330-12

彩花

明治
44.7.21
内交

故人芝叟は雜劇の作者なりそのかみ蕣の情話をつくれりその稿一卷にも充ずして彼の花の朝の露ときえぬ叟もと予に從て遊ぶこと久し一夕燈下にこの傳奇をかたりきされどはるかに程へぬれば耳底またうもれたるがごとしこたび或のそゝのかすにのりて業の隙ごとにはしなくかいつけしが枝葉おひ繁りていつしか七局の册子となりぬよて朝顏日記と名づけていさゝか叟がこゝろざしをつくなふのみ

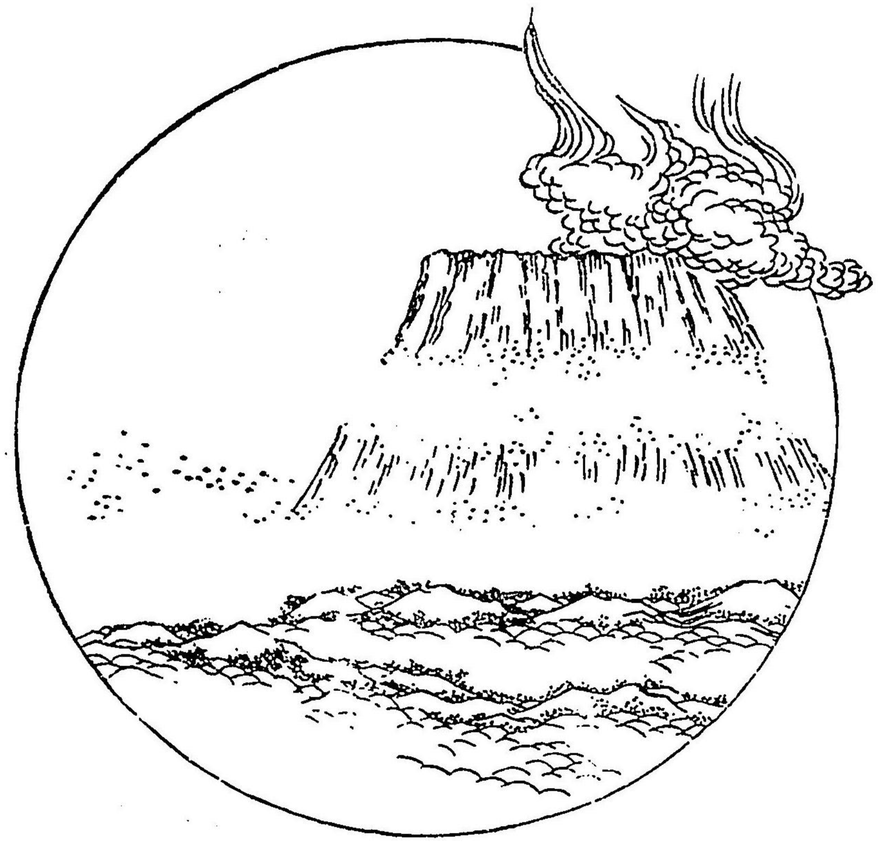
浪花　雨香園主人

仙史東海旅客自去春寓居于百濟巷也余廬在近是以數往來唱和于其客舍已知其有識今茲辛未春將東而告別也余之盛久志適脫藁私意仙史之文詞足緣飾此書以乞弁言仙史笑而歸明日復過其寓居窺其帳中闃而無人遽問主人則曰史已東矣而柳陰鶯語猶接其音容也惆悵可知但見題壁一絕則春朝晏起之作情致不可言亦附卷首以遂初志云此舉余豈無意讀者思量

柳浪識于大阪之米街

北山維嶽
何靈降神
鍾得其秀
生斯韻人

阿蘇真形圖

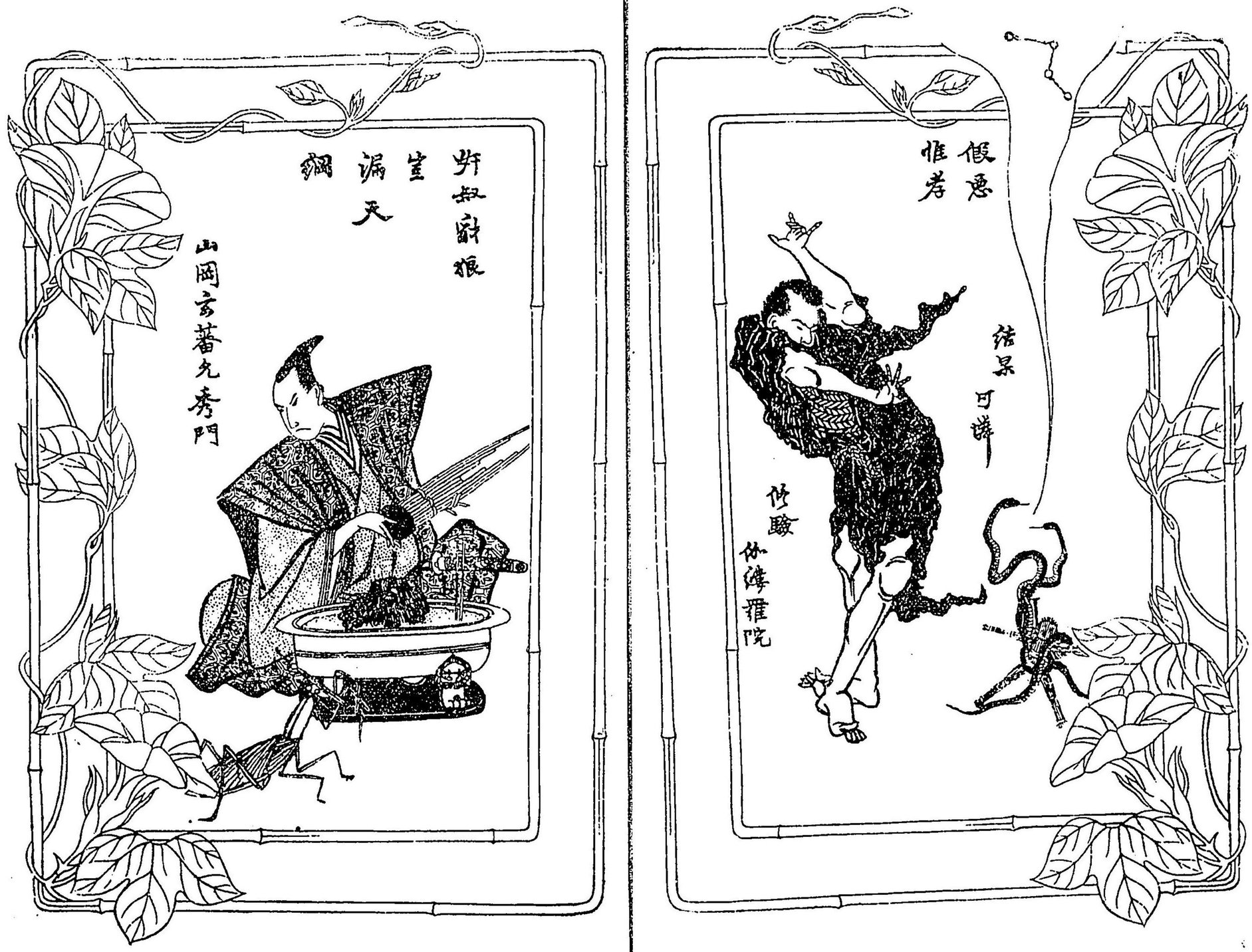


文英
武
這個
賢君
大日方滿興

情包
俠
第一
花魁
遊君瀬川

寛盛
雄
經
濟
良
阿
子
產
出
死
駒澤春雄

水月仙子風流糠致
文君淚生
澤雪


假悪
惟考
結果可憐
修驗
仏薄羅院
野叔蔚狼
宣
漏天
綱
山岡亥蕃允秀門

青娘才慧　嬡惜寫雛
水青

當丶狂
圃　粧
丑　鉏
吁
洛華柳嫩贊
冷泉帶刃為猛

德壽宴所載
木綿座浴衣

佐伯一清

朝顔日記に就て

●此朝顔日記は浪華の淨瑠璃作者として名を知られたる芝屋勝助即ち司馬芝叟の作中、最も得意の作たる事はいふまでもなし、芝叟は肥前國長崎圓山の遊女と清國人との間に生れし男にて（並木五瓶著戯財錄に獨笑庵悴とありぶ）學問も相應に在りし如く、享和の年大坂に來り、醫とも儒ともつかず暫く京攝戯作者考及傳奇作書の說に從ふ）淨瑠璃などを作りて活計となしたり、彼の箱根靈驗覽仇討新吉原瀨川仇討なども亦同人の作なりといふ、兎に角淨瑠璃一風變りたる奇人なれば交際も次第に廣くなると共に、長話と稱して短篇の小說稗史を綴り、連中を設けて、其綴りたる小說を自ら講じて人々に聞かせ、社中の者より珍らしき話の種を出す時は、之れを潤色して次會の席上にて講ずる事も度々なりき、今日の狂言作者小說家講談師を兼業とせるものといふべし、其長話は重に一夜讀切にして話の種類は左の如し、

葬。油。櫛。犬。瘤。（以上傳奇作書）花魁。雉子。錦木。梵字。太刀。昆布。鑑鏡。拍毬。朝顔。狗。雲、涙。狸。瓢。賊。楠。燕。水。櫛。禿（以上本書卷頭所載）

又芝叟のみならず此頃永嘶世に流行せしものか、本書の卷頭に話柄（ながはなし）局名家として當時名ありし者の名を列記したり、序なれば今爰に之れを附記し置くべし、

無逸。巴隨。延命。西谷。都夕。呂木子。一夢。自堂子。其光。鶴谷士加。泉鴻。潤風齋。吉田。廣谷。久池五。解亭（京）。三圓。岡吉。葛籠治。莊田。佐伯。大平。安河内。綿鐵（下寺）。一鳳。堂加林。引鶴。桃里。可樓（粉川）。三笑。平岩。拔道。直住。久木本。呂蛤（京）。橘屋（京）。馬尺改歌友（京）。加木（伊勢）。幕屋（名古屋）。

芝叟の長話中にて葬は單に熊澤が侍妾の佳話及琴唄「露のひるま」を捉ひ來つて唐土の小說に附會したるの形迹

ありて、世人の實説の如く思ふは大なる誤謬ならん、此事は次に辨ずべし、兎に角佳人才子の離合、人をして一喜一憂使瘦に堪へざらしむるもの多く、必ず好評なりし事疑ふべくもあらず、本書の著者雨香園柳浪は大坂南本町に住せる醫者にして姓を馬田と稱し、頗る文學の才に富み、渡來の支那小説をも常に耽讀したるが如く、本書の序文中に「叟もと予に從て遊ぶこと久し云々」「枝葉おひ繁り云々」とある點よりすれば、芝叟柳浪に師事せる事ありしもの〻如し、斯の如き關係上柳浪は芝叟の遺志を繼ぎて更に幾分の潤色を加へ此册子を成すには至れるなり、(版元正本屋九左衛門即ち西澤一鳳熊澤沒後百十有年)又朝顔の淨瑠璃の始は芝叟在世中近松半二の門人近松德叟(浪花伏見坂町娼家大桝屋の主人名德三俳名雅堯)に其筋を語り宮城阿曾次郎を嵐璃寛(又李冠改橘三郎)に嵌めて書下させ其稿成りしといへども、深雪に扮すべき女形を得る事能はず(當時中山由男即ち一德大彌叶琨子即ち小六又小鹿とも呼びし女形ありしが共に琴三味線を彈かず)稿本は空しく匣底に埋れ居たる内、柳浪の朝顔日記世に出で〻好評なりしかば、文化九年の頃濱芝居の作者出來島千助此小説を脚色して堀江市の側芝居にて生寫葬日記といへる外題にて、市川團三郎駒澤をつとめしが深雪に扮すべき女形に適當なる俳優を得る能はざりし事依然たりしかば左までの評判もなかりしが、後文化十一年甲戌東都より若女形澤村曙山(宗十郎忰田之助)七年目にて浪花に歸りぬ、曙山は美貌なるが上琴三味線にも熟達したれば深雪として他に匹敵なかるべしと狂言作者奈河晴助(後改豐晴助本名宮島屋嘉兵衛京都人)芝叟德叟の遺稿を潤色し、外題を筑紫秩と命じ(春狂言)駒澤璃寛深雪曙山にて上場せしに忽ち非常なる大喝采を博したり。

曙山替女となり背負ひ出る手琴を朝顔琴と唱へ璃寛には扇子に葬の唱歌を書き持はやらせけるが故櫛髪扇子縫模様染模様朝顔ならずと云事なし(中略)此頃又朝顔の珍花をはやらせたり何事も朝顔々々と唱へ芝居は古今稀成大入しけり芝叟存命ならば嗤かし歎ぶべしとて璃寛追善(芝叟の追善)の摺物を出せり云々追善の句

其まゝな芝に手向そ五形草(璃寛)　花すみれゆかりをとふや芝の露(曙山)

筆のあと探りてとはん嫁菜哉(晴助)　葬の芽出しに種の噂かな(土朗)

萬倍の花葬の嫩(わかば)より(柳浪史外)

此他に淨瑠璃としては山田野亭(名は桂藏好花堂又案山子とも號す浪花人)の作あり、傳奇作書疑編に宿屋の段を潤色し過ぎたるを難じて

其宿屋の場の一段は浪花山田野亭と云へる者阿古屋琴責と釉萩の祭文を混じ前後の筋も辨へず拵へし場也ども一兩度聞いて片腹痛く覺えしに云々

又西澤一鳳の筆にて筑紫秩と復讐合法街を搗交ぜて八册物とせる繪入稗史葬物語等あるも、漸次に原作の妙を失ひて支離滅裂の物となるに至れり、本書はこれに反して芝叟直傳ともいふべきものにして、各種朝顔物語中に於ける最も珍とすべき良書なり。

駒澤次郎右衛門は即ち熊澤治郎八を指したるものなりとの説に「此駒澤は熊澤の事蹟を書もふけしもの故常の戲雄とは同じからず云々」と西澤一鳳も書ひ、且つ本書中にも「露のひるま」の琴唄「うきことの猶この上に」の和歌及「當復入州寛作期」の詩を引用せるに見るも勿論の事なり。

加ふるに茲に一説あり、熊澤退隱後一侍妾ありこは桂宮家(秩月の姓之れに因めるか)に仕へたる諸太夫生島某の女にして、熊澤が二十三歳の時(即ち寛永十八年辛巳)江州桐原を出で〻京都に來り、冥師を求めんとせし折、不圖せし事より相識るの機を得たるも、熊澤は程無く、江州小川村に中江藤樹といへる賢人あるを知りて、之れに師事せんと京を去るに至りしかば二人の間に何等の情交とてもなかりしが、女は熊澤を慕墓するの念深く、十三歳より千辛萬苦を嘗めつ〻淸節を持するもの十九年萬治二己亥の歳に至りて、漸く熊澤の左右に侍するを得た

りといへる一佳話專ら世に流傳せしもの〻如し、蕃山先生年譜を見るに正室矢部氏（姫路藩士矢部七右衛門女）の所生四男七女（野史に或曰八人とあり）あり、事實文編蕃山先生行狀中に其名を掲ぐ、曰く

一女厚、二女載、長男右七郎、次男左七郎、三女留、四女咲、五女房、三男武七郎、四男左四郎（系譜左内）、六女俊、七女某

此内五女房外一女は生島氏の所生なりとの說あるを以て見れば絶體に虛說とのみ排すべきにもあらず、又本書中に於ける宿屋の段は三十五歲の時岡山侯に從つて上府の途、多くの從者を伴ひ堂々と大津に宿せし時藤樹門に學びし當時の學友笠原竹友といふ人、見る影も無き姿にて、治郎八の背つて好める處なればとて、鰹節を竹の皮につゝみたるを下げて之れを訪ひしを見て、宿の主人既に追ほんとは思ひしが、兎も角もと治郎八に告げたるに、治郎八は笠原先生來るかと喜びて走り出で之れを迎ひ、手から其鞋を解きて座に請じ、酒宴を開きて共に談笑して別れしといふ逸話を女とし、更に情話に一點彩を加へしかとも思はる〻節無きに非ず、要するに前記流說に取り琴唄「露のひる間」に取り、熊澤の人物に取り、名聲に取りて更に之れを支那小說の情話に附會せるものと思はる今果して支那の如何なる小說とは遽に斷言し難きも、同じ長話中なる油と稱する山崎與兵衛の話は、支那小說賣油郎を翻案し彼の山崎宗鑑が職人歌合の狂歌「皆ごとに都にいづる油賣更けてのみ見る山崎の月」「山さきやすべり道行く油賣り打こぼすまで泣くなみだかな」より出たる趣向なりとは既に傳奇作書にも明言せるを以て見れば蓋し思半に過ぎん、又駒澤の生地深雪の本國を西國に置きしは、彼の明石の一會を中心とし總てを之れより割出したる脚色なるに相違なし兎に角稗史として文章は猶慊ざる處多きも構想の妙拔群を以て稱すべき傑作なりといふべし。

宇治の臺榭より二百七十七年目　明治辛亥春三月

樊文會樓上　雨谷一菜庵誌

朝顏日記目次

第一回　雲……一
第二回　花……六
第三回　鵲……一八
第四回　歌……三〇
第五回　螢……三八
第六回　蘭……五四
第七回　月（原本七回二あり）……六三
第八回　后月……七九
第九回　踊……八六
第十回　文……一〇二
第十一回　諫……一一一
第十二回　眇……一二三
第十三回　關……一三六
第十四回　川……一四四
第十五回　豹……一五二
第十六回　柴……一六〇
第十七回　蟲……一六五
第十八回　狩……一七五
第十九回　后蟲……一八二
第二十回　壽……一九二

朝顔日記姓氏譜略

諸侯

菊池左馬權頭武賴朝臣　太宰世子龍壽丸君父少武殿

大内介多々良滿興朝臣

武人

山岡玄蕃允秀門　吉弘市正

冷泉帶刀爲猛　相良主馬

駒澤次郎左衞門春雄　駒澤祥一父丁巷

岩代瀑布太　秋月弓之助雅朝

笹虬之進虬太夫　荒尾虎橘父瀧平左衞門

花岡山十郎　小野右近

瓜生主水　湯淺勘兵衞

蘆守忠吾　伴筑八

安積潤藏　附健卒傳藏　僕關助

女流

紫光禪尼　雲居の方

嫩柏於蘭

弓之助妻水青　同娘深雪

淺香眞柴

伽縷羅院母茂

夜珠瀬川

小支那搗子於六

沙門

智遠慧長老　月心和尚

祠官

加茂縣主祐包

醫者

荻野祐仙　橘雞庵

卜者

佐伯一清軒

修驗

伽縷羅院

庶人

眇吉兵衞　脫毘狐兵衞

木綿屋德兵衞　大津庄官名傳ばらす

故芝史遺話

朝顔日記

浪花　雨香園柳浪著

青陽齋蘆國畫

第一回〔雲〕

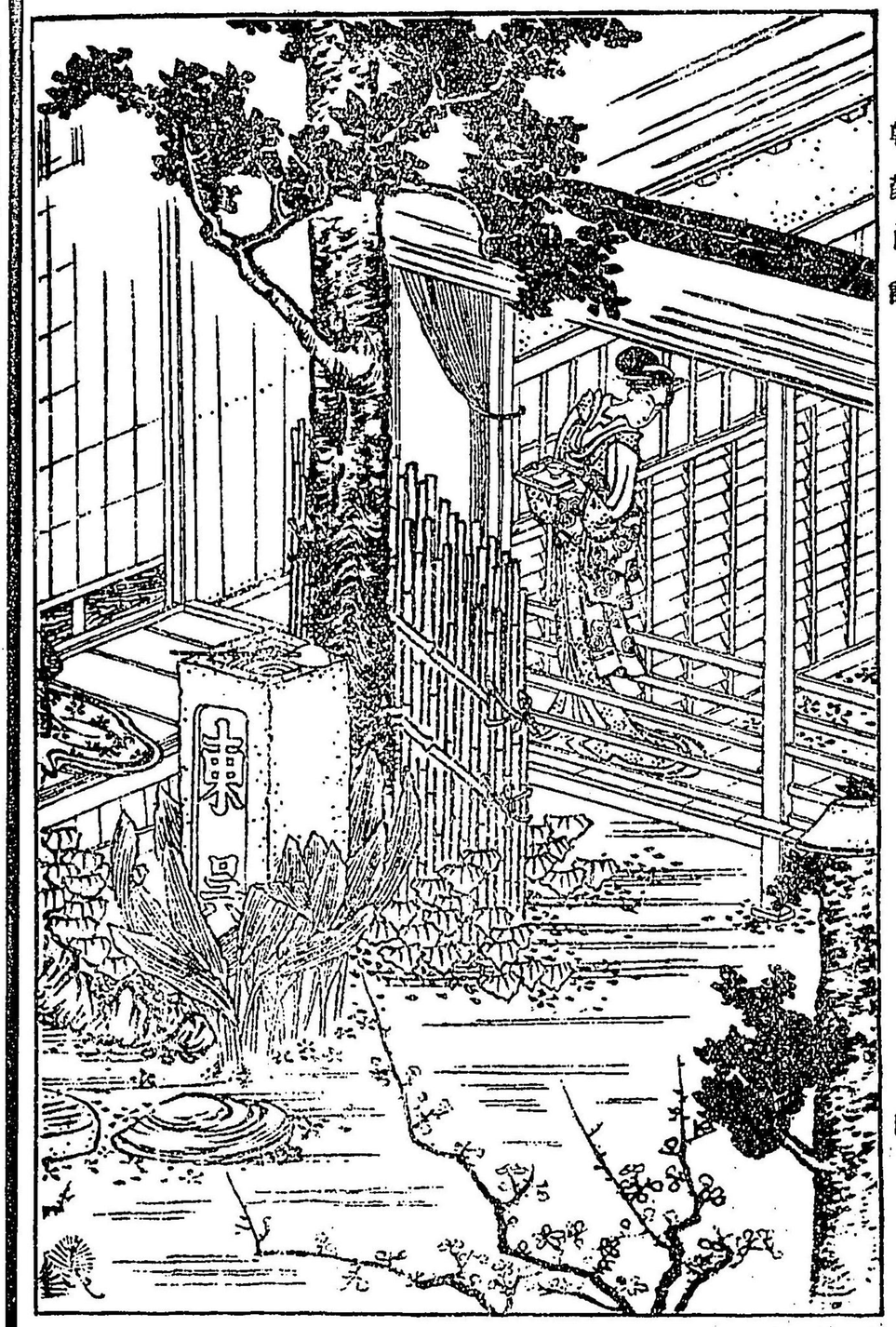
あさがほはあさな〳〵にささかへてさかりひさしき花にぞありけるされば此葬につけていと愛たき傳奇なんありける當初肥後の國に宮城廉助春彰といふものあり代々國司菊池殿に仕て四百石餘の采地をたまはり夥の家隷を扶持し男女の子寶さへ富て何不足なき家道なりこの廉助緊く篤實の天賦なるうへ博學のほまれあるにより主君菊池殿の御心にかなひいちはやく擢用ありて儒學教授の職を掌とらしめ給ふ夫より廉助は日ごとに學校に往還て一藩の子弟を訓導せりさて此宮城が莊院は菊池川の湄紅鶴林といふ地方なりこの菊池川は東南のかたなる萬重の山より落合ふ大河にて逆卷水は巴渦をなし激怒濤は奔馬に異ならず魍魎蛟螭もすむべくおぼえてもの凄ましき勢頭なり後背には名たゝる阿蘇が嶽高く聳て絶巓より火焰濕々と燃あがりその音雷霆のごとく震はためき百道黑煙みだれ立て中天を焦し時あつて泥をふらし岩を飛す慫鵰もこれがために怖のき翔豺狼もこれを見てかくれふす周圍の巖壁は宛も削成がごとく雲樹いやが上にかさなりつねに金烏を呑玉兎を吐く其高さ幾千仞といふかぎりをしらずまことにこれ十分猛惡げなる山の形勢にてこれを仰げば毛髮も森

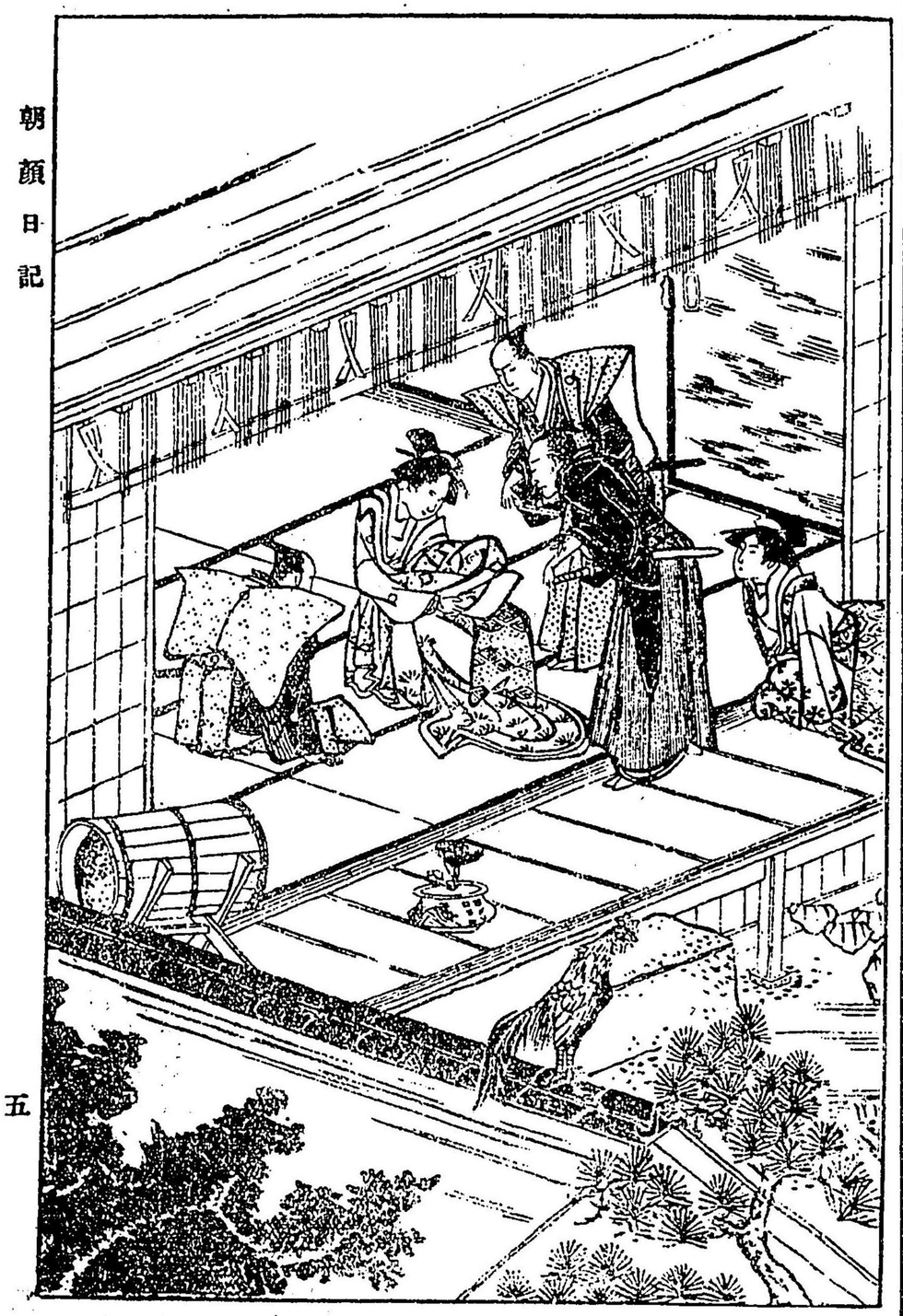
竪ばかりなりおほむね薩摩の霧嶼豐前の英彦なんど世に聞えたれど阿蘇は鎮西第一の名山にて靈異また灼然なり往年征西將軍の宮良懐親王南帝の詔を受て大明と隣好を修びたまひしより通聞の使者往來たえせずそのころ明の成祖永樂皇帝より那の山を封じて鎮國壽安の山と崇めたまふとかや古き史書に深山大澤龍蛇を産すと紀て名山大川の秀氣鍾まり凝れる時しあれば極て英雄豪傑を醸し生すことになん宮城廉助が渾家は嫩柏と喚なすものにて宮司何某が妹なりこの嫩柏婦人ながらも其心雄々しくつね〳〵良人が經史を講ずるを聽いかに感激するところかありけん一個の大願を發し景暮たる望なれども天下國家を利益すべき一奇兒を授けたまはれと岳廟阿蘇權現を願ぎ奉まつり朝な〳〵垢離をかき東をのぞみて遙拜只願丹欵を凝して禱けりかくてのち良人廉助五十を過自己四十の坂に登そめて不料また姙娠とぞなりにけるさすがに儒者の妻にしあれば胎教といふことを守て着帶の月よりはます〳〵言行を慎しみ紡績の餘力には幼少ものどもを膝下に集合て忠孝の道をいひきかせける敎ゆるは學の半といへば自他のためによき功德なるべしかくて嫩柏ははや分娩期を過せど臨盆べき容子もあらねば自己はさらなり親屬まで且あやしみ且あやぶむとかくして一月二月は夢の間にたちゆき已に十五箇月にぞなりにける嫩柏はほと〳〵鬼胎をも懐むかと安きこゝろもなかりけり。いつかその年も晩はて〻春待前一日になりつ閨家は注連かざるは蓬萊つむはとのゝめきあひてかしがましこの夕嫩柏ふと陣痛けるにぞ大家慌ふためき穩げ婆よ符水よとひたさわぐ一盞茶時ありて陣痛も小止けるにぞ家公廉助は藥餌なにくれと指揮をなし柱にもたれつゝついねておもはずうちねふりぬそのとき誰とはしらず咄々起ね山神降臨ますはと叫こゑに

驚き但見れば一朶の白雲にうち乘たる一員の金甲神出現ましますその威嚴あたりを拂て雄偉し廉助喫一驚慌忙退去て席に額突うちかしこみけるが忽然紙門の裏頭より呱々と産聲高やかにあげたるが赤子に似氣なき大音なり恰好自鳴鐘も鳴响喨ば五更の一點とおぼしく人々歡語ていと熱鬧なり廉助おぼえず頭を搔て回顧せば山神はかいくれうせたまひて初鵲屋角にしばなくにぞ、つと起て障子ひらけば東天亮々とおしあけ〻たのけしきばみやをら一輪の嫩紅のぼりえて看々御嶽の巔をはなれ一道の白氣この家の破風口より起つて横さまに靉靆とたなびき嶽の半腹につらなりて絶ざるは不思議なりける光景なりこの曉誰いふともなく宮城大人の莊院よりあやしの白氣立のぼりをりふし赤子の啼こゑ方二丁ばかりの間に聞えしは奇怪いかさまこれは神の授たまふ兒の産れしゆゑなるべしと此界隈の里人もいひあへりと

驚ぎ但見れば一朶の白雲にうち乘たる一員の金甲神出現ましますその威嚴あたりを拂て雄偉し廉助喫一驚慌忙退去て席に額突うちかしこみけるが忽然紙門の裏頭より呱々と産聲高やかにあげたるが赤子に似氣なき大音なり恰好自鳴鐘も鳴响喨ば五更の一點とおぼしく人々歡語ていと熱鬧なり廉助おぼえず頭を搔て回顧せば山神はかいくれうせたまひて初鵲屋角にしばなくにぞ、つと起て障子ひらけば東天亮々とおしあけ〻たのけしきばみやをら一輪の嫩紅のぼりえて看々御嶽の巔をはなれ一道の白氣この家の破風口より起つて横さまに靉靆とたなびき嶽の半腹につらなりて絶ざるは不思議なりける光景なりこの曉誰いふともなく宮城大人の莊院よりあやしの白氣立のぼりをりふし赤子の啼こゑ方二丁ばかりの間に聞えしは奇怪いかさまこれは神の授たまふ兒の産れしゆゑなるべしと此界隈の里人もいひあへりと

ぞ驚て年がましき管家婆が赤子を襁褓につゝみかさ抱き來り家公廉助に見せて慶賀をなせば廉助悅てこれを見るに初髮は艶々しくのび玉を欺むくみどりごなるが眼のさやのはづれたるさま、よも凡庸にはあらじとに山神の靈異といひ久後は國器にも成べきものなるんと未たのもしくぞおもひけるかゝる祥瑞あるにめでゝ那の御嶽に象どりて乳名を阿蘇松と名づけこよなく慈しみ育けるされば此兒成長の後緣故ありて駒澤何某と名を更め大内家の執政となりその君を賢者と仰がしめ國を富し民を惠みまた幾十の書籍を著はして世の利益をのこせり伊人胸に韜略を藏し才は經濟を包唐山にては諸葛孔明天朝にては青砥藤綱にもをさ〳〵劣るまじき器量なり且那の諸葛青砥にも優てその縹致世にすぐれ威あつて猛からずはたよろづの風流をさへ物しけるその弱冠しとき天上の月老いかに奇巧おきけんある美姐と一線の赤





繩を締しがあるときは紊あるときは解てほと〳〵絶はまた續き後來めてたく懲匹の述好を遂畢ぬ其根由は

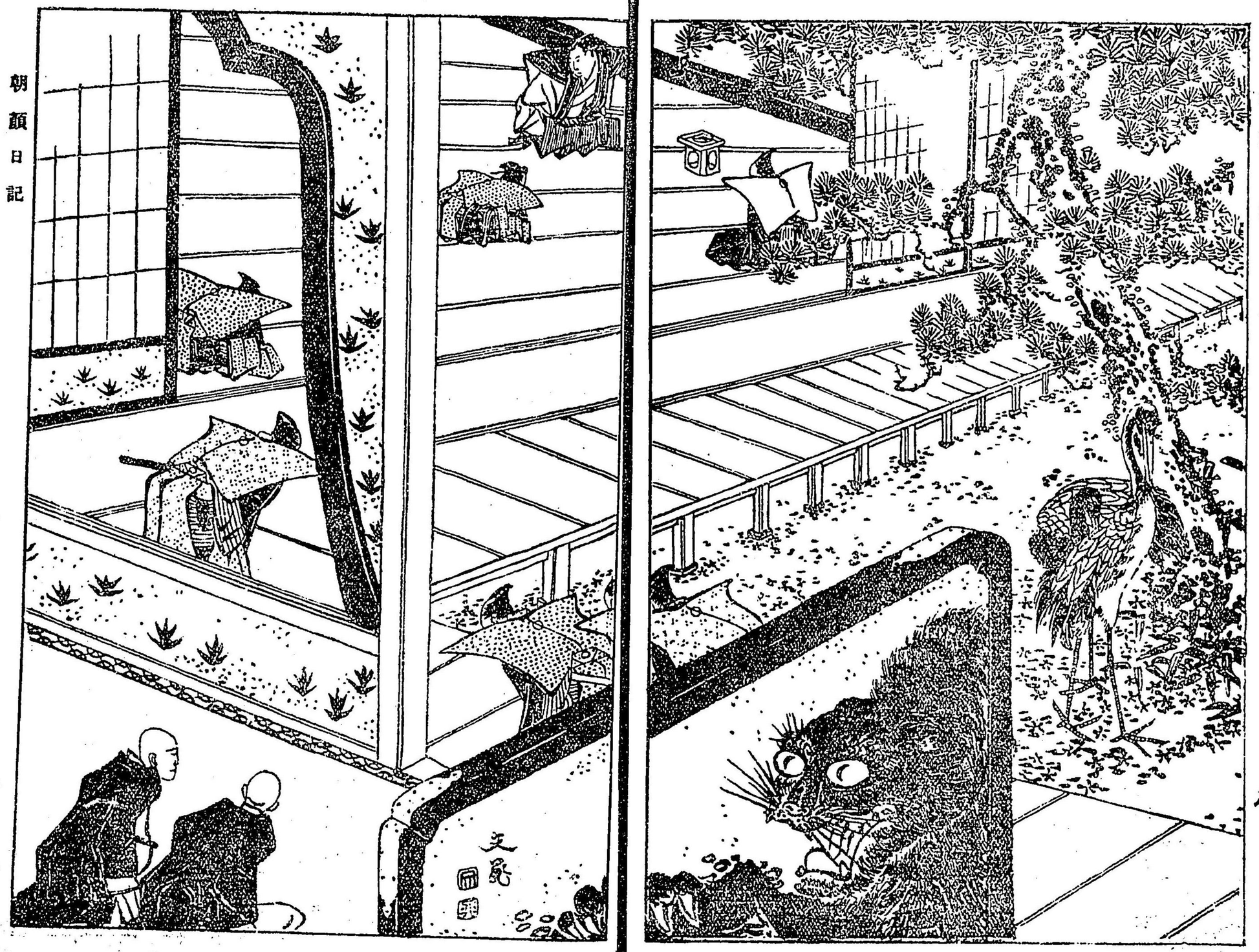
露のひるまのあさがほをてらす日かげのつれなさにあはれ一村さめのはら〳〵とふれかし

此一閔の唱歌よりいとぐちを惹いだしつ

第二回〔花〕

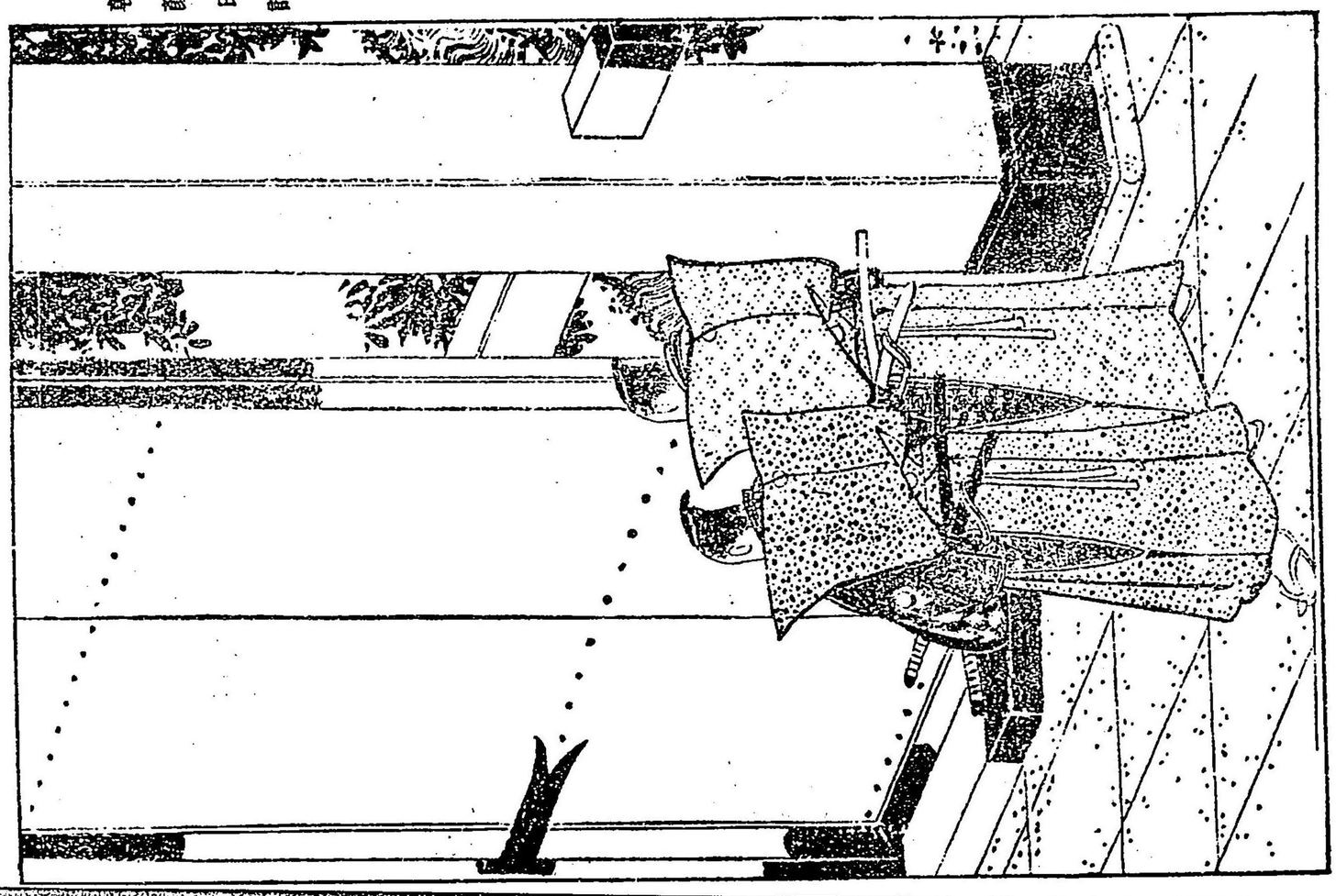
さても宮城廉助の乙の子阿蘇松は夥の年月をかさね今茲僅十一歳奇童の聞あるをもつて大守菊池殿より召出され今日なん初て執謁をなしにける菊池左馬頭殿つく〳〵これを御覧したまふにその顔色容止のあてなるさま露をふくめる花に倭千回みがける玉にひとしくあたりも輝耀ばかりなり頭殿ちかく召れ阿蘇松とは汝よな詩作なんどもなせるよし今この庭階の風趣を即興に仕まつれと仰せける阿蘇松ひれふして上意を畏みいさゝかわろびれたる態もなく立どころに五言の絶句をつくりふり袖うち褰げ雪なす玉腕を運らしつゝ清々白々繭紙に一揮と寫完てこれを呈ぐその字樣一個々龍蛇のごとく墨痕いと句やかなり殿御感なのめならず當座に二百石の新地を下され紅梅夥の屈從列に加へさせたまふこれより阿蘇松は直に潭府に止まりて蔭日向なく給事をぞはげみけるこの紅梅夥といふ所以は菊池殿ふかく儒道を重んぜられ賢明たぐひなく一個の良臣吉弘市正といふものを登庸ひて執事となしたまふ吉弘は二なき忠直の人にて寛猛ほどよくまつりごつによりて領分をさまり黎庶總大守の仁德をぞ仰ぎけるこの君侯つねに風流を好ませたまひ御物數奇のあまり美貌すぐれた る兒姓十員をえらみ個々緋を穿くれなゐを襲させて昵近にめしつかはせたまふこれを看るものその打扮の華麗なるを賞紅梅夥と稱せしよりいつとはなく

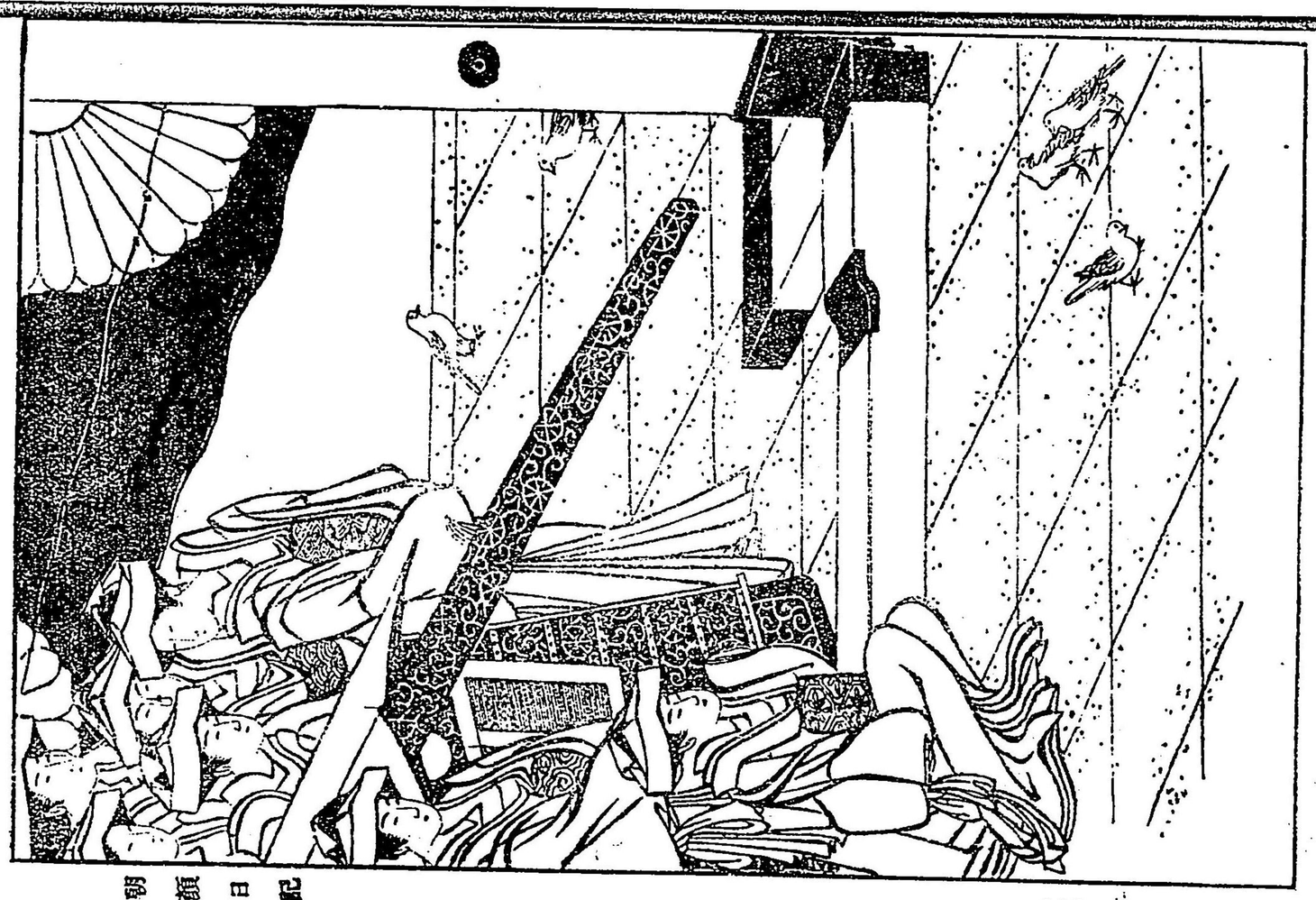
しかいひならはせしとぞ此夥の頭領は荒尾虎橘とて當家の一老荒尾彌平左衛門が二男なり父が權勢あるにまかせ日頃我意にほこり傍若無人にぞふるまひけるさるに新參の宮城阿蘇松君の恩寵を蒙ふりしきりに出頭するを猜み同僚どもとつねに抵誣いひて嘲弄なせども阿蘇松は生得て老趣き性なればまず〳〵懇懃に謙選ていつも悋らふことなければ那客氣の旁輩どもゝせんすべなくて止ぬこのゝち三四年が間話なしかくてのち阿蘇松十五歳虎橘十八歳になりけるが今春は當屋形の御先祖武德院殿の御遠忌にあたれりこれによりて御香火院水禪寺において三壺夜の大法會をまうけられ祖君冥福のために水陸道場を修せしめられてその前後三日のあひだ御領内の殺生を禁また一面には青錢精米を下行ありて貧民を賑したまふ當日は三月十八日とぞきこえける抑もこの寶刹は寧一山の開基にして代々支那より唐僧渡來て住持せられき往延慶元年開山寧一和尚國主の招提に應じて下向あり當國第一の風水好き福地を卜て一座の密林ふかき山脚を伐闢き土木の工を悉して草創ありける大伽藍なり宮殿樓閣宏壯と建つゞき金碧懸日と相映ぬ山門の額は晧月山の三大字にて南帝後龜山院の宸翰なり後背のかたの懸崖よりは一道の瀑布漲ぎりおち中ほどなる巖稜に激て段をなせばあだかも双龍の珠をあらそふかとあやまたる那邊すべて躑躅山吹さきみだれ藤波またうちゆらぎつまた客殿のさまをいはゞ欄の砌まで那の飛泉のながれを引入ておほきやかなる池をなせり澄きつたる水は西洋鏡をのべたるがごとくほと〳〵五濁の垢を滌にたへてこれに照鑑せば毫髮をもかぞへつべし水禪の名虛しからで清淨なることいふかぎりなしかくてその日になりければ菊池左馬權頭武賴朝臣御參詣あり從者は大伴惣門の下馬場にのこされ侍衛のものどもを具



して大雄寶殿より上せたまふ御側室雲居の方は御腰下に簇擁ける仕女たちを總て雪白なる裝束をぞせさせ給ひけるこは大切成御法の場なる故なりとぞこの時佛殿の階下に立並たる例の紅梅伴の兒姓共と其間遠からねば一頭は紅一頭は白一對の美人隊をなして正しく紅白の親隨なればあるとあるひとわれをわすれて喝采てげり知客寮には法施香資の臺子をならべたて庫裏の側には米甕山のごとく積おけり正殿の中央なる須彌壇には故肥州刺史從四品拾遺補闕武德院殿寂阿大禪定門と寫たる御靈牌をまうけ七寶の卓には灰白色なる至正銅の瓶子に一枝の金花を挿さめり寶鴨は奇楠を炷らし銀燭は青煙を吐俎豆に盛たる百味は山海の珍異を盡したり住持智遠懸長老勅賜の紫衣を着し綴錦の袈裟を斜に總貏の僧侶を率ゐ珊瑚の珠數つまぐりつゝ恭々しく靈牌に向はせられて讀經のこゑいと殊勝なりこのとき右左に排列たる緇徒たち種々の具を鳴して法樂を奏せらるゝにぞさしもにひろらかなる殿上ひつそとしづまりて物の音いといたうすみわたり天人も花を雨すべくすゞろなる人もものあはれにてほと〳〵涕泗のあゆるこゝちすやゝ時を移して法會かたのごとく修のひ完りぬこの時梵鐘殷々と響法鼓琴々となりわたるにぞはや日中とはしられける菊池殿は智遠長老の誘なひに應て書院の上段に座をしめられつく〳〵と眺わたしたまへば客殿の造ざま修らひざまはさらにもいはず庭の砂子も玉を磨たらんやうなるに池の鏡のどかに靄わたりてまた仄かなる木末どものさう〳〵しきころなるにいといたうけしきばみてよこたはれる櫻花は枝もたはむばかりにさきみだれたり翠籠の外よりは和暖かにふちふく風にえならず匂たるけしき爲さそふといはん風致ありていまや散もはじめず咲ものこらずいとおもむきふかくぞみえける菊池殿一座を屹

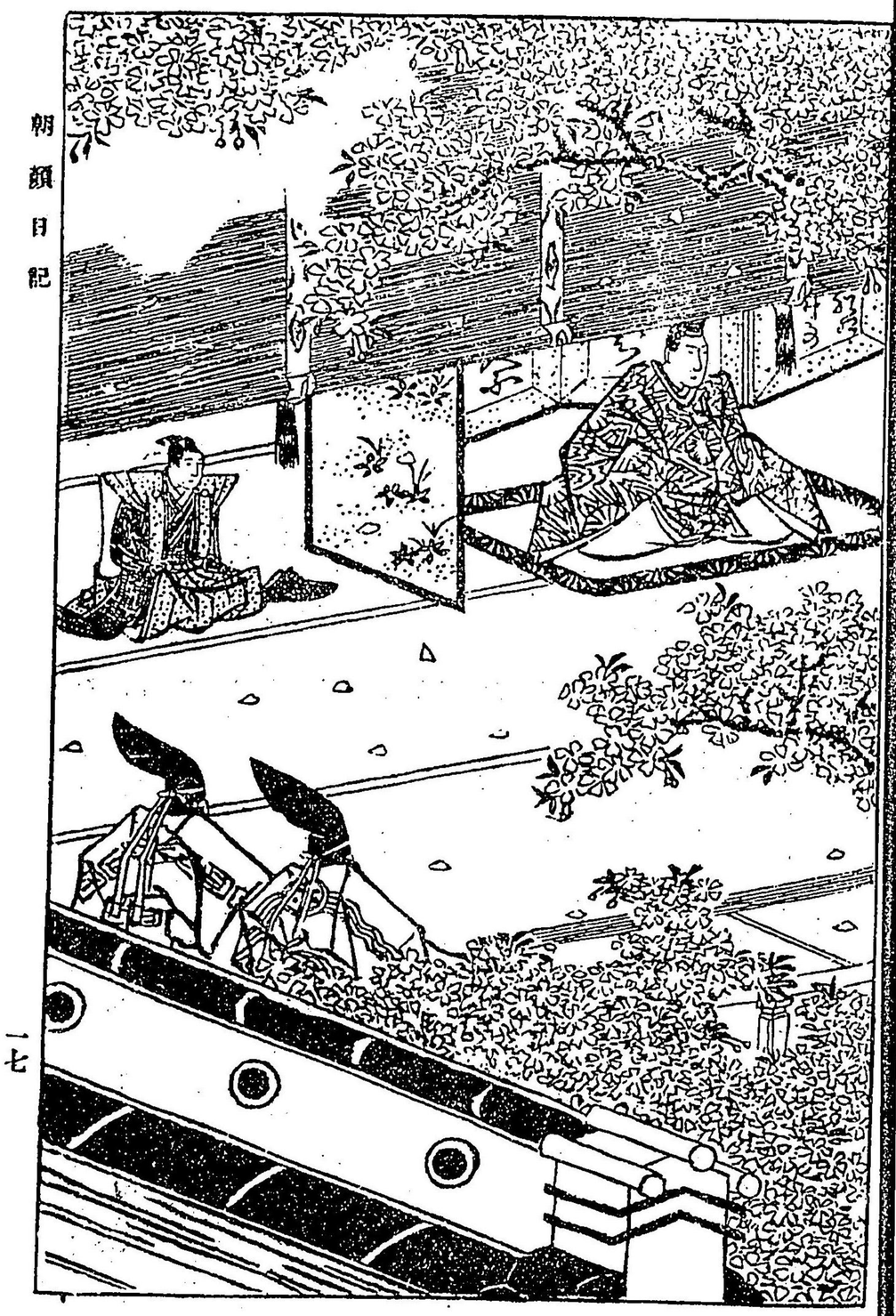
と見わたしたまひて香爐峰の雪はいかにと仰せけるに御側ちかく侍座せる群臣誰あつてその意を解するものなく個々顔見あはせて呆れてゐたり菊池殿いと沒興げにこたびは御聲高やかに香爐峰の雪は如何と叫ばせたまふを遠侍に在ける御兒姓宮城阿蘇松上意をうち聞半晌御前の動靜を覘がひしが人々全然舊のごとく默座してあへて一語の回答を禀しあぐるものもなくて泥塑を居たるやうなり阿蘇松はいと不堪枝蔘おもひそのまゝついと起て茶道風也を呼び和主はやく御覽遮なるあの釣簾をば高々と捲上らるべしと耳語ぬ風也こゝろを得てそのまゝ膝行落緣にいたりおほよそのあはひ三四間ばかり簾子をとり除けば忽地天亮たるごとくそこらあか〳〵とはれやかになりまさり綻みだれたる櫻花どもの梢のかぎりなごりなく見えて今一入の興をそへさせたまふ菊池殿はじめ簾子を隔て御透見あらせられしほどは何とやらん水月鏡花の御こゝちにていと眺めうくおぼしけるにいま阿蘇松がいちはやく心つき簾をまかせしその才の敏しさを御感賞ありける長老もおぼえず如意もて膝をうちさて〳〵宮城氏の子は希代の才人かなと頻に稱贊して止たまはずされどなほ座中にはいまだその意を解しえざる面持なるにぞ長老御前に對ひて君侯知召ごとく唐の白樂天が遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看といふ絶唱あり天朝にてはいづれの天子のおほんときにか雪のいと高くふりける日便殿に出御なり今のごとく香爐峯の雪如何と詔ありけるに玉座に侍づける公卿衆いまだ天意を會せずしてしばし躊躇給ふをりしも官女清少納言いちはやく起て玉簾を褰げあげられし故事と符節を合せたる頓智なりそれは女流これは少人今昔とはかはれどももろともにその才慧は妙なりと例をひきて稱贊たまへば頭殿ます〳〵御氣色うるはしく其まゝ阿蘇松を





ちかくめされいみじく出來せりとの上意にて差換の御佩刀を御手づから賜り渠が發明をぞ賞したまふこれによりて阿蘇松ははからず面目をほどこしけるされば此事を聞傳て御供前のうちよりは兒姓溜に來り阿蘇松にあひて賀儀を演る人も多かりつねに我威を震へ荒尾虎橘をはじめ殘んの傍輩共はこれがために壓倒れて個々色をうしなひ萎々としていと羞澁默し居たり那の荒尾虎橘は自來肚裏惡き人にて日比阿蘇松と睦まじからぬうへ今しも偶と上首尾を出來し拜賜せしなんどゝいと誇がなるあの面つきこそ惡沮けれとたまりかねて旁輩にむかひ適間君侯の御意に香爐峰の雪はいかにと仰せしは禪家のすなる問答と云ものなるを阿蘇松ぬし誤心得て籠子を捲せられしは偶中といふものなりかしこけれど君侯にもそを出來せりとて御恩賞ば底事ぞかの淸女が籠まきしは雪にて詩の意にもかなへり今日の御前は花なり樂天が詩にも香爐峰の花とはいはずかゝる齟齬にてしかせしは申さば麁相といふもの也それが物怪の僥倖となり不意首尾せしは察するところ方丈には龍陽の肚裏あるゆゑ胡論に執成まうされ這奴を悅ばせたるものならん惣じて佩刀を下さるゝは一番鎗か一番登かのときにこそあるべけれ但外におぼしめしもあることかさるを己が分際をも辨まへず御辭退まうす法もしらぬ獸呆何はともあれ雪と花の區別さへ不會得文盲のほど傍疼しと苦哂をなせば餘の兒姓どもゝ執妬くおもふをりにて汝和余唱嘲み詢るにぞ阿蘇松はいとどうち羞らひほと〳〵汗あゆる心地しつゝ蝸牛の角めだちてわが上よりおこり天にひとしき主君をあしさまに罵せてはあら勿體なしとづか〳〵とすゝみいて今虎橘ぬしの仰するところ一を知ていまだその二をしらぬといふものなり如何にとなればおほよそ風流の道は詩にも歌にも雪を花に比らへ花を雪に

とりなしてこそ幽玄なる風趣とも承はりつれ一々その例を引ていはんには其數かぎりはあるべからずたゞその最膾炙人口なるものを擧て申さん唐詩に去歲薊南梅似雪今年薊北雪如梅櫻ちる木の下風は寒からて空にしられぬ雪ぞふりける」雪をゆきはなを花とはあまりなる俚言俗趣にていづくにおもしろみ味はひの侍るやいかにやいかにとはちふきいふにぞさしもに硬猾き虎橘なれども一句の下にいひこめられたちまち收と消て頓口無言おぼえず赦しその面は猿の尻にさもにたり自來この房裏はおくまりたる所なればかく論口におよぶといへども別室にはものにまぎれてしれざりき短氣烈火のごとき荒尾虎橘このとき怒心頭より起り憤得て毒火沸かへればいかにもして這奴が過失を見あらはし又候喧嘩を仕かけしたゝかに打擲些の氣を出さんと多方計較つゝ彷徨をりてありけるが偶と阿蘇松が佩刀の置所法にはづれてさし出たるを見より最究竟ござんなれと那邊をゆきすぐるふりして阿蘇松が佩刀をあしにまかせて蹴ちらせば佩刀はそのまゝ瓦落々々〳〵と轉きたるを餘の兒姓また手して刎飛せば壁に磕て割刺と音す人々手たゝきて閧とわらふ阿蘇松慌これを把ておしいたゞき倘これ恩賜の佩刀なりせばおのれやわか活おくべきと肚裏に恚おもへども態と面を和らげ蝟縮てゞ居たりける虎橘は案に相違しいかに柔弱者にもせよ佩刀を蹴られてよも默止てはゐるまじその咎めかゝるを待て刀の置やう式に逆れしをもて尾鰭をつけて罵しり辱しめあはよくば眼に物みせんずと巧みおもひしそのかひなく今かくをさまりすぎたる擧動は原來這奴生れ付たる臆病漢よとぞつこんその內兒を見すかしやをら居丈高になりて阿蘇松を屹と睨まへおのれはいひ甲斐なき蠢東西かなまことの壯夫なりせば武士の精神といふなる佩刀を蹴られて半晌も



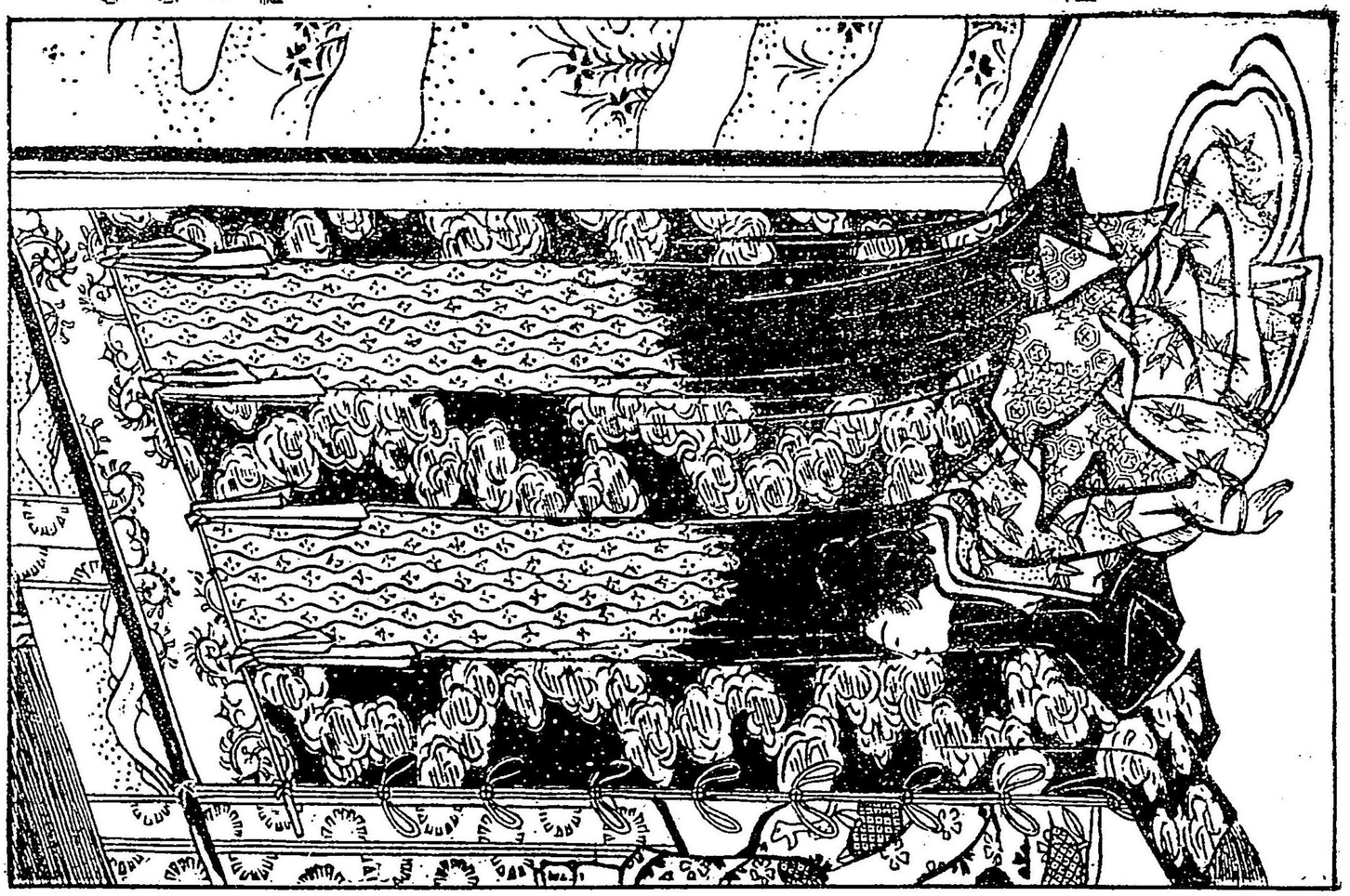
猶豫すべきや我今かく無禮をなせども起あがりて敵對せぬはこの虎橘が怖しいか何にもせよこな不辨菽麥の委蹇なりと飽まて嗤きはづかしむといへども阿蘇松は聾のごとくしゝらしんと蹲まり居ていさゝかもとりあはねば虎橘ます〳〵欺負おのれは腐儒者が孩兒世裔の洒家に向ていかて相鬪をえせんこの生白けたるしや面はと罵もあへず扇子逆手にとりて阿蘇松が腮にあてゝ仰むけ哺と唾を吐かけしは言語道斷の狼藉なれども宮城阿蘇松は天の縱せる寛厚の性なればこゝこそ一生懸命の期なれ倘御供前を鬧がし私鬪に身を果さば屍の上に耻をのこさん兎にかく堪忍するにしかずと胸の忿悸をおし鎭めおししづめ虎橘ぬしこはあまりなる雜言かな無禮戲も場所によるべし這里は御供さきに侍りちとは御遠慮あるべしと側首背向鼻紙とうてゝ唾をぬぐへるはいと老趣き翠動なり虎橘は呆れかへりげに一向の烏龜め己が悍怯を掩はんとて事に虛托しかいふらめといよ〳〵見くびりやをれ阿蘇松御供さきは和主にならはふかかゝる殿堂にてこれほどまてに耻辱をうけつゆ朽をしともおもはずわが無禮を得咎めぬは沙汰のかぎりの鄙萎女の腐つたるにも劣れりそれになんぞや日比汝が父廉助が嘴くを聞くに凡武士たるもの平生は文道にて身を俯むれどもまさかことありては君の馬前にて大敵をうち挫ぎ粉骨をつくさんには武藝こそ肝要なれとつねに刀法鎗術の用心を訓すよし聞と見とは裏表今この弱息が臆病を見れば廉助とても高のしれた木葉武者驚破敵とみる時は瓦多々〻と戰出したちまち見崩して一番に逃走るは治定なり武士の風上にもおかれぬ族にて祿賊ともいふべしと出放題なる惡口雜言このときにいたり阿蘇松は所謂堪忍嚢の緒をきらしほと〳〵たまりあへずしておぼえず髮毛天さまに竪敦圍あいて適間より御座ちかきを憚用捨ておけばつきあがり方量もなき無禮の段々武士の魂を土足にかけ剩さへ人の面を巷とし恐多も君をさみし父には種々の惡名をつけしてう人面獸心の國賊めと思ふさま罵かへしもはや聞すてゝは一分たゝず弓矢八幡ゆるすまじいざ尋常に勝負せよと飛しさつて身がまへせしがやよ待虎橘汝と今這里にて討果さば大切の御法會といひ淸淨の道場に血を落さんは恐れあり互に死ても不忠の遺恨いつそ明日壺井の松林にて潔よく勝負を決し本事の程を見すべしと語つがへば虎橘呵々とうちわらひ放屁阿蘇松なんぢこの塲をいひ脫て今霄のうちに逐電せんず肚裏その手は喰ぬぞ逃ばとてにがさうか眞の武士の及の味一太刀うけて鹽梅よと佩刀すらりと拔はなしをどりあがつて阿蘇松が眞甲めがけ堯竹割と切つけたり明晃々したる刀のひかり已に咄嗟と見えたるが當下阿蘇松飛鳥のごとく虛閃一閃とかはし扇子をもつて丁と打ば佩刀はからりとおちたりけり並居兒姓等これを看て大半虎橘に荷擔をなし阿蘇松を中にとり圍茅ばなの鋩脫つれて八方より討てかゝる阿蘇松賺さず落たる刀把手も見せず虎橘が短刀にてうちむかふを斜ひにとびちがへて那の剛敵の虎橘を吟と一聲大袈裟に劈斃せば鮮血煞と泝りて紅梅伴の紅梅の花をちらせるごとくなりこの騷動おほかたならず嘩くうちに人夥馳あつまり矢庭に阿蘇松をひきすゑ血刀もぎとり屏風もてとり圍嚴重に警固をなしまた一頭には亂騷げる兒姓どもを欄住こと〳〵く手囚になしつ菊池殿このよし聞し召おほきに驚かせたまひそのまゝ阿蘇松を勘察吏の者にあづけられ緣故を委細問糺さしめたまふ頭殿にはかゝる不意の椿事いできて饗膳いまだ央ならざるに掃興したまへば忙しく供觸をつたへいそぎ寺門を立出られ歸駕を促がし給ひける

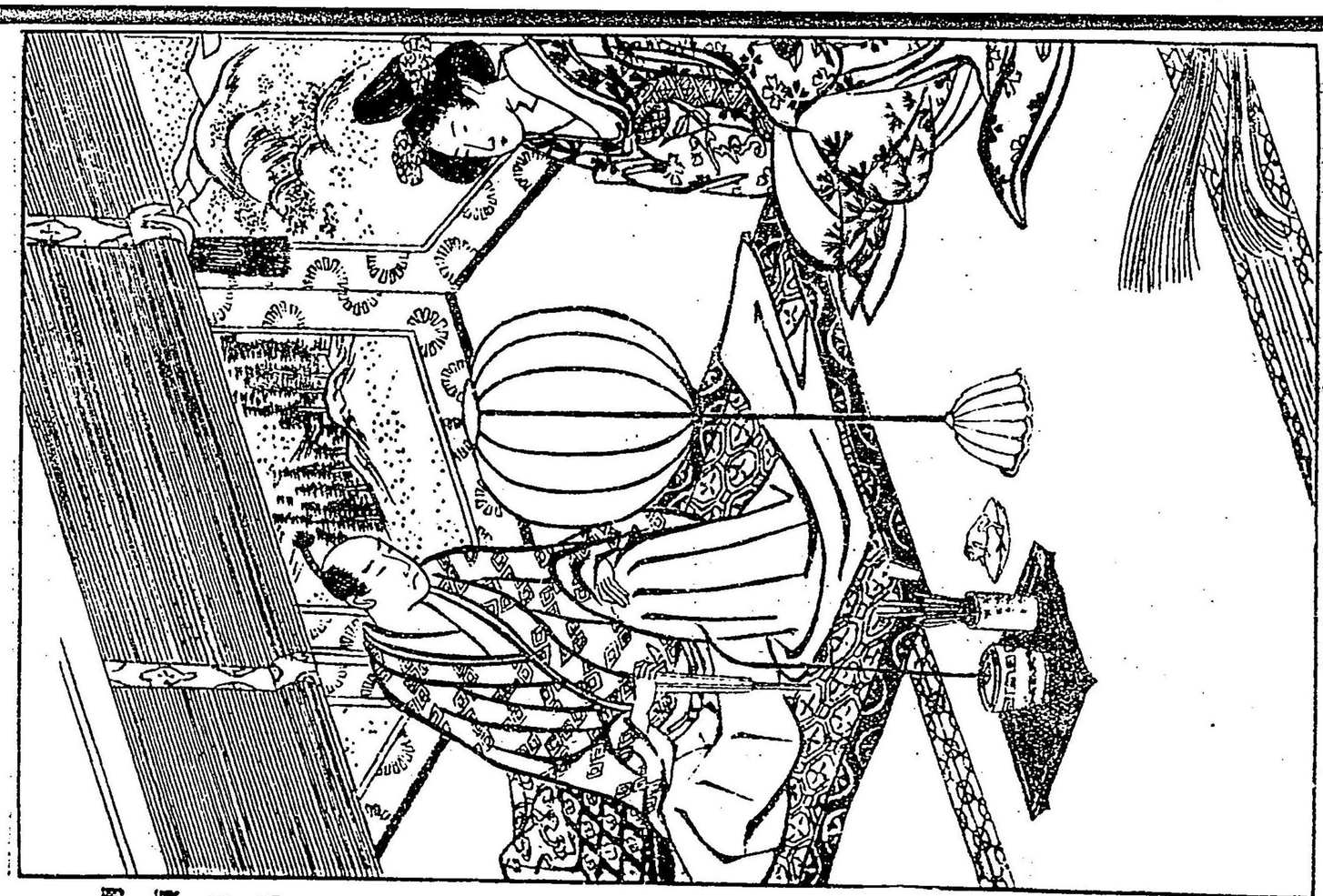
* * * * * * *

第三回〔鵑〕

名たゝる月は痴雲のためにひかりを失ひ色めく花は狂風に香をむなしうす美玉碎けやすく甘泉竭やすしさるほどに勘察吏の人々は荒尾虎橘宮城阿蘇松及傷の一件逐一に査糺をとげ一千人の口單をしたゝめさせて執政吉弘市正にさし出しなほ詳に事の容子を申てその發落をぞあひまちける吉弘市正これを聞て頃に裁斷をもなしかね熟左思右想に初虎橘よりしかけたる喧嘩にてことに種々の雑言を吐き剩さへ上の事までうせし條國老の嫡々には似げなき不敬されど今その人死せし上は別に罪を問べきよしもなしまた阿蘇松は最止事を得ずして討果せしわけなればその罪輕きに似たれども同僚を殺害せしこと明白なりしかじ故さ式目に據て喧嘩兩成敗とし阿蘇松をば武法にまかせて自盡なさしめんにはさあらば公正なる制度ならんしかなりしかなりと計較し了りて詰朝御館に出仕をなし君侯に見えて言上るやうは昨十八日御香火院の御法莚において荒尾虎橘宮城阿蘇松及傷の儀精細糺明つかまつり律例を査侍べるに如此の定法と一般候得は虎橘が屍はその父彌平左衞門へ下され葬式を免し又阿蘇松儀は古例のごとく賜釼おゝせつけられしかるべく候はんかと伺がひける菊池左馬頭殿これを聞せられ忽地御氣色かはり御顔色眞青に筋くれたちて御眸いと鋭に見えさせたまひ市正が いまだいひ果ざるにつと起て奥ふかく駈入たまふ市正この御光景を見るより呆れて半晌口を開かずこれ全く君侯の御心には阿蘇松を助けたく思召ゆゑなりと猜しけるゆゑ自來忠直の人なればわが裁判の未熟なることを知り且はぢ且おそれそのまゝ御殿をまかん出私衙に回りてもほと〳〵寢食をやすんぜ[illegible]あんじわづらひけるがいづれ君侯の御内意[illegible]

ひ見んと數回出仕をなせどもとりつげる幹辨どもいつも御不例々々とのみいひつきて御逢あることなしこれによりて様吏のものをして夥の帳簿を閲せその例やあると只顧穿鑿すれども別にさせる異議もなければ市正ます〳〵叫苦眉頭臥蠶を起し來とさまかうさま肝膽を惱まし齒をさへいたむるばかりなるにこの夜一夜おもひ躊躇てえもねられず獨燭を紫て旦を待けるが猛然手段をおもひつきたりこの手段とは御側室雲居の方の世に勝れたる怜悧の性なるを聞知り居にぞこれに便て私下より君の所思を覘ひ聞ばやとひそかに廣敷に手蔓を索めてそのことをいひこみ叮嚀に賴みければ御側室にも快くうけひきたまひけるこのゆうべ菊池殿蘭房へ入らせたまふに雲居の方百般心を費やして豫じめ設おかれし美酒佳肴はさらなり吹彈の興をさへ催させたまひ御機嫌うるはしく見えさせたまふをり御話の蔓につきて過しころ兒姓供の事ありしが對手阿蘇松はいかなる御所置にか行なはせたまひしと何氣なくうら問見たまふ頭殿きてしめされさればいまだ何とも家老どもより申出ずとばかり仰せてまた餘の御話に轉て止みぬそれより君成らせたまふごとに雲居の方をりにふれてこのことを覘がひたまへばいつもおなじ御應なりき一夕雲居の御方君に向はせたまひて妾ふとおもひ出せしことのはべる妾が鄕貫は知しめすごとく豐後の府内にて侍るが妾いまだいとけなきときの事にて國司大友右近將監さまへ近習を勤めし高階源藏といふものゝさふらひしが恰ど此度のごとく互に意氣地の口論よりこの源藏當座に一人を斫殺し三人に傷つけしを巡檢の吏役拘到て緣故を精く糺明せしが源藏もとより二なき忠直のものにて私なく奉仕けるゆゑ那の邪人ども君の御前へよろしきを妬み下城の途に待ぶせ不意討にせんとして反て渠がために討れしといふこと證跡





分明なるにより國司の御裁判には那源藏に百兩の首價を出させこれを吊ひ料として死者の妻子にくだされ殘の者どもは御叱にて結案侍りぬとつばらにものがたらひたまへば菊池殿聽了てのたまふには吁その判斷いまだ宜きに愜なふとは云べからす喧嘩兩成敗といふことは古よりの式法にあらずや雲居の方膝をすゝめさ候はゞその源藏へは切腹おほせつけらるるか殿御頭を悼せたまひ否々卿のまうさるゝ通なればその源藏とやらん誠忠無二の者なるべしさればその忠臣を欺殺にせんとせし惡黨等と一般に裁許なば主人は事に聞しと世に誚られ臣たるものこれを見て以來忠義を勵ものあらじ雲居の方いよ〳〵あやしみさあれば源藏を御助なさるゝが御政道にかなひはべるにや殿仰すらくしからずはじめにもいふごとく助けては國法たちがたし予がおもふ旨はその源藏とやらんを勘當して領内をかまひ追放せしめ死者は名跡をたてゝつかはし荷擔の者等は急度叱り過て改むべき利解を加すませなんかくせば大概寛仁の制度たるべし雲居の方この御旨を聞て暗々地よろこびまたも四表八表の御かたらひになりてその夜はわきて帳内もしめやかなりしとぞ吉弘市正は雲居の方より御内意をつたへ聞よろこぶことかぎりなしかくて市正は詰旦御館に出仕をなし執謁を願ければいち早く御召出しありける市正は御側室の内意を含て宮城阿蘇松追放のことを窺ひたてまつれば菊池殿たやすく御聞濟あらせられ、しかはからへとの御諚なり市正慎て承はりそのまゝこの由を役筋へ申渡しぬ市正はさしもの疑獄の頓に結案になりしはひとへに雲居の方の御庇なりとかたじけなくおもひ且その發明をぞ感じけるその後菊池殿翡翠帳へ入らせられ御機嫌よくやよ雲居かの阿蘇松ぎは長の暇をとらせ追放せしぞ前日卿が虚談よく出來たりと仰せられけるとぞさてこの菊池殿いかなればかくまで阿蘇松を助けたくおぼせしと其奥意をくはしく原ぬればこれより先菊池殿水禪寺の智遠慧長老をまねがせられ密にこれに内意をおほせられ近臣どもの相を看せしめたまふに長老一々看了ていへらく個とも骨法凡庸にはべりそれが中に宮城阿蘇松のみ希代の神相にてその前途たのもしくおもひはべる渠は王佐の才を具したる人傑にて後來世を濟ひ國を利し天下の至寶となるべきものなりされども惜べし一個の坎穴ありて十四五歳の際不意災星にあひてほと〳〵一命も保ち難からん倘天幸を得てこの大難をだに免かれたらましかば渠が功名成就すべきにと密に嗟嘆をぞせられける菊池殿仰すやうさあらは如何にして助てまし長老拂子とりなほし天機洩すべからずとぞ應られける菊池殿このとき長老の算語を記得居たまひて年頃試見たまふに近臣等が身の上の吉凶つゆ違はずして符節をあはするがごとくなり蓋よりしかあるべきはづはなかりしかの慧長老といへるは震旦國揚子江なる金山寺にて修煉せられし高僧にて風鑑ことまた比なく人の禍福を指すこと淵鑑がごとしとなんこれによりて菊池殿はこの回も阿蘇松が事起りしとき渠が齡丁ど十五歳なるゆゑ長老の風鑑その驗あること神のごとくなるを感服したまひ世の利益の爲をおぼしめし辛じて助けとらせたまひしは依估なきところ明白にて私にその德果を貪給はぬ證據は御膝下に召使はれず自國の利益のためにしたまはざるにてはかり知るべし久後にいたりこの阿蘇松駒澤某と喚れ非常の功蹟をたてその名を海内に震ひし時菊池殿はじめて市正にかくと明させたまひしとぞさきの夜雲居の方へおほせられし御話といひ類なき賢明の君なりかしそれ虎豹の兒はいまだ文をなさずといへ共はや牛を食の氣勢ありさるほどに勘寮衙門に囚こめおかれたる宮

城阿蘇松はしかく人を殺せしうへは露ばかりも命たすからんとおもふ未練の心はなけれども大罪を犯せし身の私に死路を求むるは上への恐怖なきにしもあらずはやく公裁をまちて殿科に處せらるべしとくより髻をはらはせ最後の觀念潔よくぞ見えにける浩所に上使入來て君の殿命を演つへつぬはせ追放仰つけらるゝ旨いひわたせばたゞちに護送の健卒ども無刀の阿蘇松をひつたて出づ阿蘇松はゆめおもひかけずからき露命を助かりしがはや除名の身のうち萎れつゝこの衙門をぞたち出けるこゝろなき行路の人もこの光景を見て總て哀を催せりかくて阿蘇松は行こと十丁あまりにして官橋の上より迥に御館の甍を望んて拜をなし君の大恩を謝したてまつり正しく再生の父母なりと感激涙堰あへずこの期におよびても嫡親嫡母にたゞ一目だに遇まくおもへどもとても遂はぬ時機なればげに武士の上ほど悲しきものはあらじとたゞ女々しくも涕うちかみ彼三間太夫が澤畔に吟行こゝちしてほどなく菊池の城下をはなれける東の郊垣なる分界堠子をかぎれる例にや警送の健卒どもは這里より阿蘇松をおひ放ちてひつ回しぬ阿蘇松は屠所の羊のおもひをなし徐々とたどりつゝやがて岐なす路の邊の石敢當にちかづき但見れば妻手なる綠叢樹の透間より一道の茶の烟たちなびきていと冷靜たる荒廟ぞあらはれたる那方よりばら〳〵とたちいでゝ阿蘇松を扯とゞめ別れを惜めるともがらは日比親しきかぎりにて適間より集合居て起程を見送るにぞありけるされど骨肉のものどもは上をはゞかりて出て來らざるなり阿蘇松は人々に請れて茶店に尻うちかけ離盃をくみかはすほどに後馳にはせつきたる從者がさし出せる花布の袱包をほどき袷うち着てりゝしく旅裝をなし差替の双刀を佩て編笠を左にもちはやわかれを告げてうつ起ば個々涙の袂をわかちける宮城阿蘇松それよりひたもの東をさして歩行けるが阿蘇の御嶽は道の便といひ所願もあればいざ詣でばやと峻しき羊腸をのぼりつおよそ麓より半腹までは百千萬億古木たちこめてそれが間々に山櫻どものさきまじりたるが花はみなちり過てなごりかすめる嫩のこずゑの淺翠なるにのどかなる曛影さしていとまばゆし斜風うちよそくをりは葉末の滴に袖を濕すこは昨の雨の記念なるべし羅にすがり梯を攀て辛じて宮所にいたりつきぬ莓地に粘印たる花片は殘香なほありやなしやえしれぬ鳥どもむれつゝさへづれども樹がくれて人にちかよらず深壑はどう〳〵と岩激泉鳴喨げり石の華表は幾個かこえ來つ長命燈もほのあかりてさすがに神々しく馳て岳廟に進香麻下の砂地に額を突き祝詞して寢しをなせばをりから神樂の音さへ冴していとすゞしげなり心ゆくまゝにそこら徘徊けるが例の詩の口裏に衝いづるまゝに腰に佩びたる墨斗とうてゝ柄短き毫して瑞籠の瀑たる間に題つけぬ這方の大宮司は姻族なればやをら尋いたれば卯の花の垣根に戯遊る男の童の阿蘇松を熟面たるがたゞ一目見るよりそのまゝ驅入てこれを案内宮司忙はしく出むかへて正廳に請じ閤門たかりて欵待ける積る說話にその夜はいといたう更てやうやく臥房に入ど短夜のならひはやくも山鴉の啼わたるに夢さへ結びあへて朝まだきに起出て粥など啜完旅裝ひ刷ろひいとまゞうして立出れば宮司親屬ども袖袂に纏りて拽とゞむ阿蘇松いへらく厚意かたじけなく侍れど御遊當の身の上なれば一夜といへども御座近きあたりに長居せんは恐れなきにあらずと固推辭いふにぞ大家げに夫は理よとおもへばさらに留めん法もなくいとゞ別れを惜みけりかくて阿蘇松は宮司が宿をたちいづれば夜は已に明はなれたれど木だち深き山奥なれば天色なほほのくらし雲の

たえ間の星輝に透見て蛆路をくだりとある巖頭に立て老樹の隙より見おろせば有明月のおちかたに菊池の御城とおぼしく粉墻朦朧仄見けるに篆嫣の在所なれば直に膝坐てふし拜ぬこれより先は山又山にわけいればこれこそわが故郷の見終なれとすゝろに腸を斷おもひせり剩脚下より山鵑の二聲ばかり啼たつにぞまたしも哀をそへて眼をしばたゝき郭公は不如歸と啼ものをわれは罪ある放逐の歸る由なき身の上をくやみ歎きつゝもろともに血のなみだをぞ墜しけるそれより宮城阿蘇松は八重にへだつる山河を跋渉つくしゆき〳〵てほどなく豐後の國鶴崎といふ地方にいたれりこの港より便船を乞てうちのり一路順風潮日ならずして周防の國降松の浦に着にける這里より大内殿の城下山口へは早路ゆくところにてはやその程も遠からずとなん

* * * * * * *

第四回〔歌〕

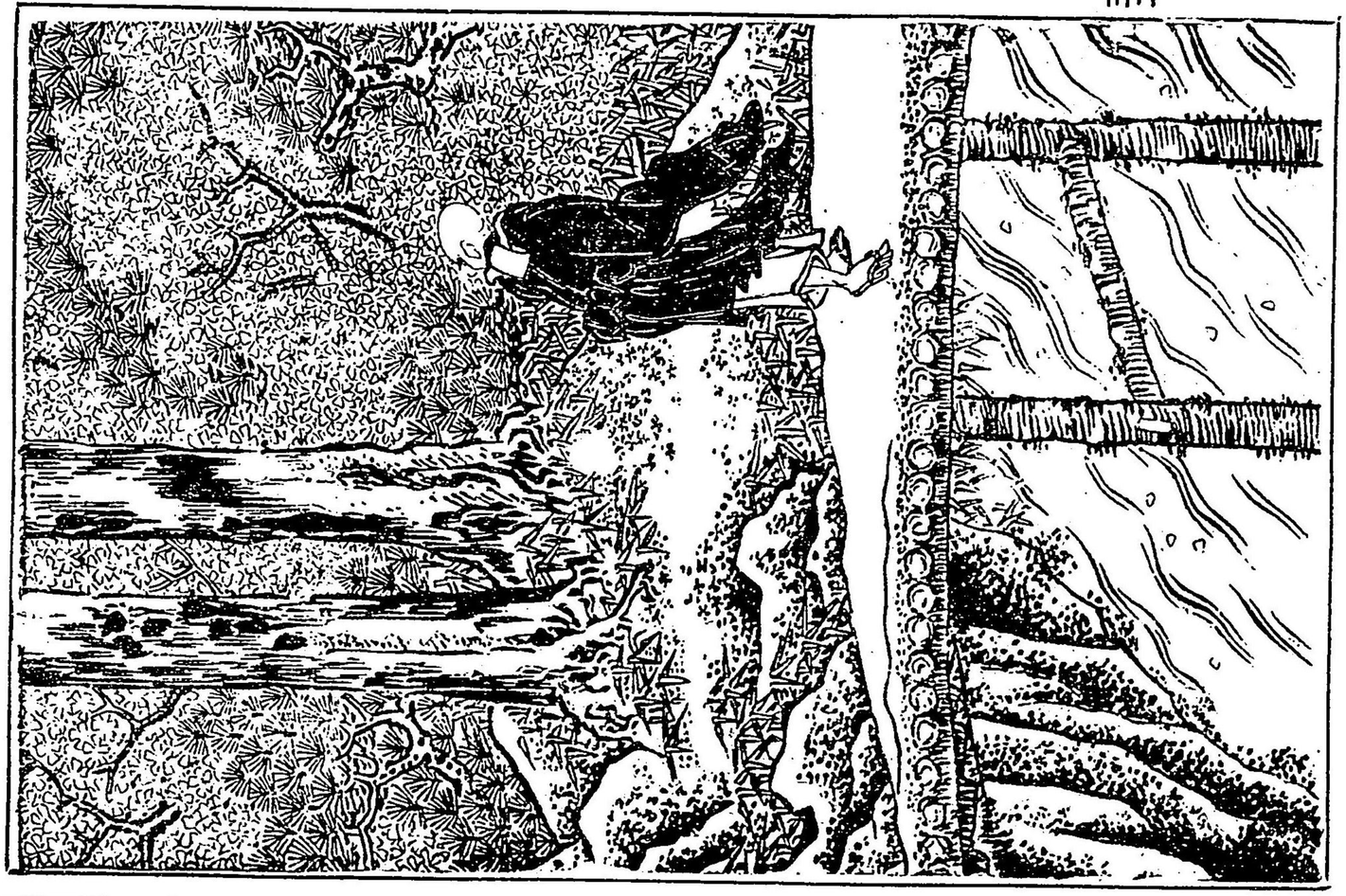
大内家は琳聖太子以來綿々と續きて繁榮比なく武威を山左にふるひけるが當主大内新介多々良滿興殿の代にいたりては已に數ケ國を押領し室町家の命によりて西海道の探題となれり當家の儒臣に駒澤了菴と喚なすものあり渠は肥後の藩中宮城廉助の兄弟なり廉助が八男阿蘇松がためには現在の叔父たるによりてこれをたのみて此の城下に來りやがて駒澤が邸にたづねゆき始て對面をなし自己かく零落たる緣由を明白に告て寄托たまはれと餘義なくたのみければ叔父了菴もとより骨肉の因あるうへ賴母しき人なれば一議にもおよばず承引快よく欵待て舍めおけりこの了菴先生といへるは山陽山陰の際に扳群たる宿儒にて博聞强記はさらにもいはず經濟の度量まことにたぐひなしこれによりて大内殿よりも重用ひられて政務の

商量官に令つけたまふ受業の門弟どもは日ごとに門に市をなし這里に集合て學問をぞ勵みけるさるほどに宮城阿蘇松は這家に寓食ゐて昼夜刻苦書を攻て刹那も惰たらず從來天の縱せる英智あるうへ螢雪の功積りて僅かに五ケ年が間に學文成就してその見識また卓絶たるには叔父の了菴だに手を拱やうに上達せしとかや歌ありて證となす

後陽成院

まなべ人朝に聞し道芝の露は
夕の風にきゆとも

この五とせのうちは阿蘇松戸を出ずして學問のみに日をおくりしゆゑさせる話しもなしことし十八歳になりけるその如月のはじめ初冠して宮城阿蘇次郎紀春雄と名乘ぬかく男となるにつけて青雲の志やるかたなくいざひとまづ京鎌倉におもむき仕官をかせぎ見んと機をみて叔父了菴に向ひ小侄こと遊學のため都會へのぼりたきのぞみはべる當分の暇たまはるべしと慇懃に演べければ了菴首をふりてこれをとゞめ都會はよろづ華麗にて少年輕薄の結交好まざるところなり又こそをりもあらめと百般賺しこしらへて渠が望を拒みける了菴しかせしはふかき宿意あるゆゑなり了菴もと一子祥一といふのあれどもこの祥一所行放蕩なるうへ父が敎戒をもちゐず了菴これを見かぎりて遂に勘當におよびしが餘に一男半女もあらねばいと便なくおもひしをりから不料阿蘇次郎が尋ねきたりしを見てその怜悧き才あるを愛しこれを螟蛉となしわが家督を續せんと其時よりこの准備ありて熟渠が擧動を見によろづ小節に拘はらぬところあるはまつたく志望の大なるゆゑなりと猜せしゆゑ今なまじいに手放せば二度回り來るまじとおもひはかりて强にひき止めたるなり事にさとき宮城阿蘇次郎はやくその氣色を見てとり吾はじめ國を出し日より御直參ならでは仕まじと大なる志をたてし



ものなり駒澤家五百石の秩祿望むところにあらずと一通の留書をのこしその夜しも野干玉の闇にまぎれて叔父了菴が家をしのびいて星夜にはしりつゝゆきゆきなやみぬる足曳の山口のかたも遙かのあとに見なしつかくて日を累ねて歩るほどにいつか浪花の大都にいたりきゝおよべる墨江四天王寺なんどあらかた拜み巡りそれより北をさして長柄川をうちわたり山崎の古街道を經て西嵯峨に入り名勝故蹟をさぐり不期も名にたてる嵐山の麓に來て見れば對面なる群峯の形容濃采の金屏をひきつらねしかとうたがはれ下ゆく水は瑠璃よりも碧なりこなたかなたに霞あひたる梢ども錦をひきわたせるやうに百千株櫻花のはや十二分に爛漫て山も埋もれて見えぬばかり比しも彌生十日あまりなれば天色の麗かなるに人の心ものびらかにて物面白きをりなるうへ日いとよくはれて川添の氣色鳥の聲もこゝちよげなりこのとき士女雲のごとく出さかりて車轂擊人肩摩所せきまでうち集合所々に幕うちはへておもふどち圓居しつゝ歌よむあり詩作るありまた那方の河原には下蔭めきたるがいたく醉しれて謠つ舞つ隨意あざれくるひ花は餘外なる光景なるもをかしさすがに洛下とて人の打扮の華奢なるはさらにもいはず世は種々に己が自適るまゝにかく風流たるあそびをきそへるこそ優しけれと獨語て那里這里と彷徨やがて渡月橋をわたれば那方に大やかなる堰のあるを見てこの川の名におべるをもさとりつ水無瀬の懸泉のあたりなる一樹の櫻の中に勝れて眞白なること雪をあざむくはあまたの中の老樹なればなるべし爰にやんごとなき御方の御遊にや棚なし小舟棹さゝせて管絃を奏たまひけるが其聲妙にいといたう清わたりて蔭たけなることいふばかりなし

舟うけて誰ものゝ音にあそぶらん

嵐の山の花の木がくれ

と兩三遍うち吟じけるこの時誰とはしらず後方より袖を捉へて今吟ぜられしは足下の詠れし和歌なりやといふ阿蘇次郎つとふり向てこれを見れば頭に唐山巾を戴き身に褐色の衲衣を穿たり殊勝の禪僧とみゆるにぞいや〳〵しく腰折めて正是小的が詠たる蜂腰なり那の禪僧うち點頭足下の大姓高名は如何阿蘇次郎應て小的は宮城阿蘇次郎春雄といへる浪人なり那の僧これを聞てこはよきかたらひ人を得たるは貧道は月心とて東福寺會下のもの貧僧も頗この道を嗜みはべるいざ下に居たまへ霎時ものかたらひてんとうちひらみたる盤石の座うちはらひて二個相對に座を占互に風月の佳話をなすにその好めること色々相符はなはだ趣をなしければ阿蘇次郎も一知己を得たりと悅びける月心いへらく貧道もこの峨阜の花見んと昨日東山より來り遊びて甲夜は臨川寺に宿れり佳期おけることもあれば今より般舟院にまかりて投宿をとりもろともに夜櫻を賞せんはいかゞ足下もし同心ありなばいざ伴なひゆきなんとすゝむ阿蘇次郎いふやう今日は如何なる因緣にや尊者に邂逅剩へ同宿を誘ひたまふこと望の外のよろこびなり自來いそぐ旅にしもあらず見たまふごとく世間は那のやうの人山人海にて熱鬧しくはなはだ俗氣を生ぜりいかさま今宵は月もあれば夜深人靜まるに乘て尊者と手を携さへて月前の花を再賞しはべらん旅は伴侶世は好意さらば陪伴申べしとうちつれだちてゆくその夜阿蘇次郎が月心和尚に示たる句詩とて世にのこれり

渡月橋頭人月レ渡　月明還在綠波間

明れば宮城阿蘇次郎月心とつれだち峨峨山をたち出しがけふは天もどんどりとかすみとぢてあまもよふすさまなりやがて太秦にいたれば月心はまたこのわたりに訪人のありとて懇に再會を期りて別をつぐ

阿蘇次郎もほと〳〵一夕の奇遇を感じふかくその好意を謝てたちわかれぬさてこの阿蘇次郎は遽の起程にてはか〳〵しき盤纏とても支度せざれば這里まて來る道上にて費金は大かたに費使はたしつされどさる大丈夫なればこれらの瑣々たることは屑ずともせざりけり阿蘇次郎は北野の菅廟に詣て茶店の床几にやすらひやをら茶錢を償はんと腰なる財布をかい探り見ればいつか売になりて分半の錢子さへあらねば今霄の房賃はさらなりさしあたる茶錢をさへわきまふたつきなくあぐみて居たりける但見れば對面の繪馬堂にうち仰ぎて立居たる漢子の髪は髻のきはより手束ばかりきりのこして後さまに反せしはあたかも慈姑のかたちめき羊羹色なる一ッ小袖うち着て偽八丈長外套をひつ穿ちゝら短かき相口を門にさしたるさまいはゆる繪馬醫者の類ならんと北叟笑しが渠が這方へふり向たる面つき何とやらん熟識のやうなり世には似たる人もあるかなと瞳を定めて看るうちに渠もまた阿蘇次郎を見て目をはなたず一霎時痴立てうちまもりぬ那の藪醫者は樋雞庵とて一條戻橋の邊側に裏店かりて住居せるものなるがこれより先この雞庵些の瓜葛をたよりて周防の山口に下り國守大内殿の醫官荻野祐安が徒弟となりこれが玄關番を勤め居しうち雞庵もとより破落戸のことなればいつか祐安が息祐仙をそゝのかしをり〳〵花街へつれゆき好々嫖蝶にぞしたてたるこゝにおいて雞庵は祐仙が愚蠢を欺負多方騙局すまし祐仙をしてその父祐安が調度より圓金二十兩を竊出させこれを借とるやいなその夜に山口を逐電してこの頃京都へ回り居たるなりこの雞庵比先山口にありしとき駒澤許へ入門してその講釈を聞に來往せしゆゑこの阿蘇次郎とも熟識なりさて雞庵は聢と阿蘇次郎なりと認めしゆゑ頓にちかづきよりて禮をなし一別以來契濶の情を叙またその上洛のゆゑを問阿蘇次郎も禮を回し小的こと遽の旅行にて嚢中も乏しくかく窶々しくしてこのわたりに呻吟ぬるよしをあからさまにうちあけて今はいかにともせんすべなしいかゞしてよけんと商量をなせば雞庵咲面つくりそは嘸窘迫ならんさあらばまづ吾廬へ來たまへ幾月までも舍藏まふさんと慇懃にいざなひけるにぞ阿蘇次郎ふかく悅びさあらば多擾にあづかりまふすべしとあつく感謝をなしぬこのとき俄に天色かきくらし雨しとゞにそぼち來兩個は忙袖笠して竄づたひにて雞庵が家にたどりつきぬ雞庵などてかく容易ひきうけ留舍しぞなれば渠もと阿蘇次郎が萬藝に精熟せし事をよく知り居ゆゑこれを香餌にして榮利を射んとの伎倆なりそれより宮城阿蘇次郎は 樋雞庵が儻舍に在て渠が勸にまかせ儒書の講釈をはじめけるに正にこれ徳孤ならず必隣ありといふごとく滿京の諸生ども阿蘇次郎の博識を聞傳〳〵われも〳〵と集合ひ來てその門に入るもの夥しくこれによりて束修頗收納けるにぞ雞庵は舌打して獨咲しその束修も大半に掠めとりて十分計ごとを得たりといと誇かなる顔貌なりおほむね一回阿蘇次郎に出會その議論を聞ほどの者感服せざるはなく個々その大才を賞して喧しくいひさわぐより後には由ある人さへ門下に來りあそびてます〳〵繁昌なしけれども雞庵おのれのみその利を貪り先生にはろく〳〵に新衣をも穿せざるやうすなれば高弟どもこれを察して大に不平の色をなしそのともがら密かに商議して先生をすゝめ下河原にて一座の乾々淨々せし空房を借うけ一切の家伙までとりまかなひ日を卜みて阿蘇次郎を這里に移しまた一個の老實なる蠻僮を買て炊夫とすされば阿蘇次郎這里に下帷せしより門人ます〳〵あつまり衣食豐充てぞ過活けるこの後またしばらく話なし日月梭のごとく宮城阿蘇次

郎はや二十一歳にぞ成ける今年はいかなる機運にや卯月の初つかたより兎道瀬田の間螢の出ること夥しく夕暮などには眼口にはいるばかりにて十や二十は一攫にも握らるゝなどゝいひのゝしるに浮やすき都會の人情京浪花の人はこれを見んと隨意酒肴を具へて樓船はさらなり漁船をさへしつらひて宇治橋のわたりは所せきまで棹よして螢狩をぞ競ひける一日下河原の僑居にて宮城が内弟子芦守忠吾伴筑八兩個かねて示しあはせしことにや阿蘇次郎に向先生も聞召るゝごとくこの夏は宇治の螢夥しく出てその輝耀も格別なるよし先生も朝夕御指南のみにて送る日たまへば御精も竭申べし明なば一日の閑を偷み試歩あらばよき破悶ならん吾儕も跟隨まうしてんと懇に勸ければ緊温潤なる阿蘇次郎渠等が好意を悖かずそは一段有趣べしと容易允諾ければ兩個はほと〳〵雀躍していさみたち炊夫を驅使手に〳〵ちとの料理をなし小々やかなる食籠の三段ばかりあるにそれをものしてあるは酒筒をつめるなんどゝいと騒がしければ阿蘇次郎これを見ていへらくその行厨は頗沉重なるに猿助は留守さすに傘人はいかゞめさるゝととふ筑八點頭明日は面々輪番看綸輪傘にしてまゐらんといふにぞ大家興と笑坪に入ける誰かはからん阿蘇次郎がこの螢狩にて一個の絶美の風流女と奇遇許多の説柄をなさんとは

第五回〔螢〕

けふは日もいとよく晴て清和なるに風さへうちそよめきておのづつら交加人の袂もふくらかなり宮城阿蘇次郎は白面青衿伴筑八芦守忠吾を伴なひ黎明より都門を出て伏水にいたり豐後橋をわたり小倉隄をつたひゆくこのわたりの風景恰も一幅の西湖の圖を看るがごとくなれば阿蘇次郎はいと興ありて心のどめき古詩など吟じつゝあゆみ行に程もへず宇治の地方にいたりてまづ黄蘗山なる萬福寺の山門に入れば伽藍の莊嚴ども總て支那めきてめづらしそれより興聖寺平等院なんど見巡り扇の芝の故跡をたづねやがてまた名たゝる通圓が茶店にたちより茶を啜て渴をしのぎ又しも宇治橋をわたり橋姫の祠のほとりに彷徨經島龜ケ石あるは彼佐々木忠綱が乘いだしたる橋の小嶼が崎はいづれぞ捲の島はあれなるかと往つ還りつ躊躇つゝ川の面を見わたせばこの時なを未牌の下刻なれどもはや篝燭狩の催とおぼしく種々の遊舟ども陸續と棹のぼし來て橋の上下は所せきまでうち集合て熱鬧きことといふばかりなしこれ後の世の天滿祭に彷彿たり阿蘇次郎は兩個の門弟と共に橋の欄干に靠てひたすら日を娛ましめ心を慰め居たりしがすこし間隔て川上なる柳原しげくたちこみたるが時しも綠の蔭をふくめていと冷靜き佳境なるに一艘の樓船をつながせてぬしは誰ともしらぬ火のつくし琴をぞしらべけるなまめいたる鶯音は伽陵頻をもおもひやられその彈音いといたう妙にして興趣といふばかりなし阿蘇次郎眉うち顰コハ古怪や那舟にてひく琴曲はしらぬひといふ頌歌なり筑前の國司太宰少貳殿秘曲なるゆゑ西國にすら彈人まれなりあのすゑに十八段の廻波といふ秘操ありといひければ忠吾筑八は今にはじめぬ師の博識にて音律にさへ精しきことを感じけるこの時また河の面にも那の琴曲を聞んとにや夥の舟ども漕よせて琴彈ふねをとりまきける筑八いふあの彈人は暮ならんかほどの美聲は都下にてもたやすく聞得べからずさらずば難波女なるかもしらず阿蘇次郎いへらくいな〳〵この彈音を聞試るに陰聲なり總て女の聲は陰なるものぞされどまた盲目はきはめて陰なるものなりこの聲はしからずたしかに女は女なれども陰中に陽を含ばやはり兩眼明

かなる未通女なるべし噫唱かたのゆかしさよいてさらばちかづきよりて聞まほしと兩個のものどもと商量橋詰なる漁戸をたのみて一葉の艇を借うけ直に打乗朔公を役がせて那の柳蔭の樓船のあたりへ掉やらしむ朔公いちはやく掉よして那の船の眞側にこぎよせて櫂を川中にさしとゞめおのれはそのまゝ船端を枕として臥ぬ阿蘇次郎等は割籠竹筒などとり出し冷けき酒うち喫興をたすけて濤がへしの曲をきくやがて琴彈もやみければ集合る船どもは隨意に散ゆきやゝ遠ざかるにつけてあとはひつそと靜まりかへりつ恰好那の船の障ひらけて裏面のさまあらはに見ゆ四十ばかりの女房の紫鹽瀬の袷の上に柿地の小蔓雲鳳の帶をしめて坐したるがその膝下に青春十六七とおぼしき小姐ありて金糸のひた繡刺せる緋紋縮緬の襲して烏金天鵝絨の帶を纏ひ同年ほどの丁髮三個ばかりかしづき居れりその側には一族の奴々めきたる女客もほの見ゆ琴は小姐の前に横たはり在にぞ今彈ぜしぬしとはいちじるくしりぬその人々は香爐を輪流つゝ名香を聞居たる体いと高尚なりされば遽に物音しづまりしもむべなりとしらる浩處に不意一陣の旋風吹おこりて忽地舟棚にありたる物件の輕きかぎりは四方八面なく吹ちらしたるに那の小姐の帆子をも吹まくりてこれを捲あげ雲井遥にとりゆきける一盞茶時この狂風の和ければ適間捲颶たる物ども陸續墜くだりぬあるが中に那の小姐の帆子は至輕だけ頓にも落がたくひらり〳〵と飜來るそのさま帛色の濃紫なるが曛暉に映やきあひて宛も綵ある鳳凰なんどの舞あそぶかとあやまたれつ丁髮ども船檻へ出てあれよあれよと悶掻どかひなし那方這方の舟よりもこれを見てコハ希代の壯觀かなと罵しりさわぐに事有湊巧かの帆子は漸々に飄墜て阿蘇次郎が船を望て落來るさまなれば萬機轉の阿蘇次郎倖と舳の方に居あはせたるにぞそのまゝ起ちてみづから櫓を把ひとつこぎると見えしが船は隨つとまはりぬほどよき所にて阿蘇次郎左の手は後さまに櫓をもち右の手して腰なる扇子扱とりかの落來帆子を水際二尺ばかりにてこれをひつかけ把得たり見る人一同に唱采喚闘て半晌は鳴も止ざりける這時阿蘇次郎おもはずもちたる櫓をはなせばわが船と隣の船と岸多哩と抵りてあだかも粘りつきたるやうにうちあひてはなれやらず恰好丁髮どもは船檻にありあふゆゑ阿蘇次郎はそのまゝ那の帆子を扇子に載てさし出しこは姐々たちの帽子には侍らずやとて遞しあたゆ丁髮の淺香隨即コハかたじけなしと謝をのべかの帆子をとり扇子を回すとて仔細と阿蘇次郎を看るにその俊俏の斯文なる眉清目秀美麗玉を欺むき一表凡ならず衣紋のをりめ正しく舉動の温柔なれどもどことなく嚴しせし風趣あり顔容のけだかきさまは光源氏に比べくその神氣のいさましきは遮那王丸にも劣るまじくぞおぼゆやがて前の丁髮出來阿蘇次郎に對て手を突禮正しくいふやう婢主母のまうさるゝは適間女兒が失ひたる帆子をめぐみたまはりしはこよなき悅びに侍るなり唐突なれども謁見はべりて禮をも叙まくおもひ候へばまうけの酒醡もいと荒みてはべれど九献まゐらせなんこなたへわたらせたまへと請じける阿蘇次郎うち回答てまづは帆子御手入悅ばしくさふらへまた御船にめされ美酒賜はるべうねもごろなる仰もいと感激おもひ侍れど御舟には上蔕のみおはすなるに寇者としてちかづき侍らんは世の憚なきにしもあらずよて無禮ながらも同辭中なりとぞ叙ける丁髮どもいさゝかこれを聞いれず多方語を盡して誘なひせたむるに忠吾筑八はさきつかたよりかの美人の隊に見とれていと好ましくおもひほと〳〵涎れおとしてありけるがこれを幸とし丁髮どももろと

もにせひともと先生をすゝむれば了髮どもはまづ人質の准備にて忠吾筑八をはやく己が船へいざなひつつなほしひて阿蘇次郎が袖袂にすがりひたすら口説てやまず謹慎ふかき阿蘇次郎も今はほと〳〵もてあましぬこのとき年がましき侍女のをうな出來コハものがたき石部金吉さまよかゝる風流の莚に風流のまれびと何かはくるしかるべきいざといひつゝ手をとつてわりなくひき入るゝにぞ了髮どもはさらなり忠吾筑八まて是を扶け袖をひき腰を推しなどして無難舟の中にいざなひつゝ引入ける阿蘇次郎は當下かの船の中央に座を占まづ東道貌なる女房に禮をなしてその好意を謝しをはりまた座並に寒温を叙けるかの女房はすこし暮春景たれどもみづ〳〵しきそのさま咲後れたる牡丹のごとくにてなをしも餘香を失なはずそれが小姐とおぼしきは世に冠絶たる縹致にて正しく沈魚落雁の容閉月羞花の粧ありかの小姐暗地斜秋波かよはすに阿蘇次郎もおもはずじつと四目齊視ければ小姐は倩兮と笑眉つくり袖かき掩ふ宛轉は天津乙女の人間に下りてあそぶにやあるはまた龍宮の乙姫が海底より出て愬さむかとぞおもほゆる筑八忠吾はこれを見てほと〳〵上有頂天ものいふことさへしばしすゝろなりかの女房は帕子の禮をのべをはり見たまふごとくわらはが船は郎たちとてもなくいと興なく侍りしによくもわたらせたまひしとやをら盃とりあげて村醪の醉に足ず野花の趣きをなさずとまうせども一樹のかげ一河のながれも他生の緣とはまうさずやうらなくおぼしてきこしめせと阿蘇次郎にさしければ阿蘇次郎もよろこびにたへずはからざる欵待に遇はべるとふかく感激をなしぬされどなほうゐ〳〵しきたいめんなればかたみにうちとけたるけはひもなくけふの空の晴和なるさまなど演てやゝ風流たることばもほころぶまゝに女房とのはは

や郭公を聞召れつらんといふ阿蘇次郎いらへてこの夜ごろはこゝろがけ侍りしかど我すむわたりはふつに來啼ぬにやゆめのひまにはおとづれ侍りけんおぼつかなく侍るきのふある人の岩倉にまかりて初音を聞得しといひほこりつなど清談それより敬盃酬盃いとにぎはしさばかり才人と佳人と一對をなして奇遇しは正にこれ錦の上に花をそゆるといふべういみじう盛事なりかしこの光景を見るものどもあるは羨みあるは執妬してあたりの船より亡賴ものとおぼしく百般罵しりあひて戯弄にぞかの女房侍女に吩付て左右の舟窓を扃せつかくて艙もしば〳〵めぐり來てしばらくはなしもとたゆれば阿蘇次郎は些の着酒力そのうへかくたてこめし船の裏比は四月の天氣なり何となく蒸々と炎氣けるゆゑなにげなく側なる扇子とりて三四分おしひらき一座にゆるさせたまへと會釋をなし襟のあたりをうちあふぎやをら下におかんとしておもはずなごりなくひらき見れば一首の歌を寫つけたるがまづ筆のすさびよのつねならずおぼゆる

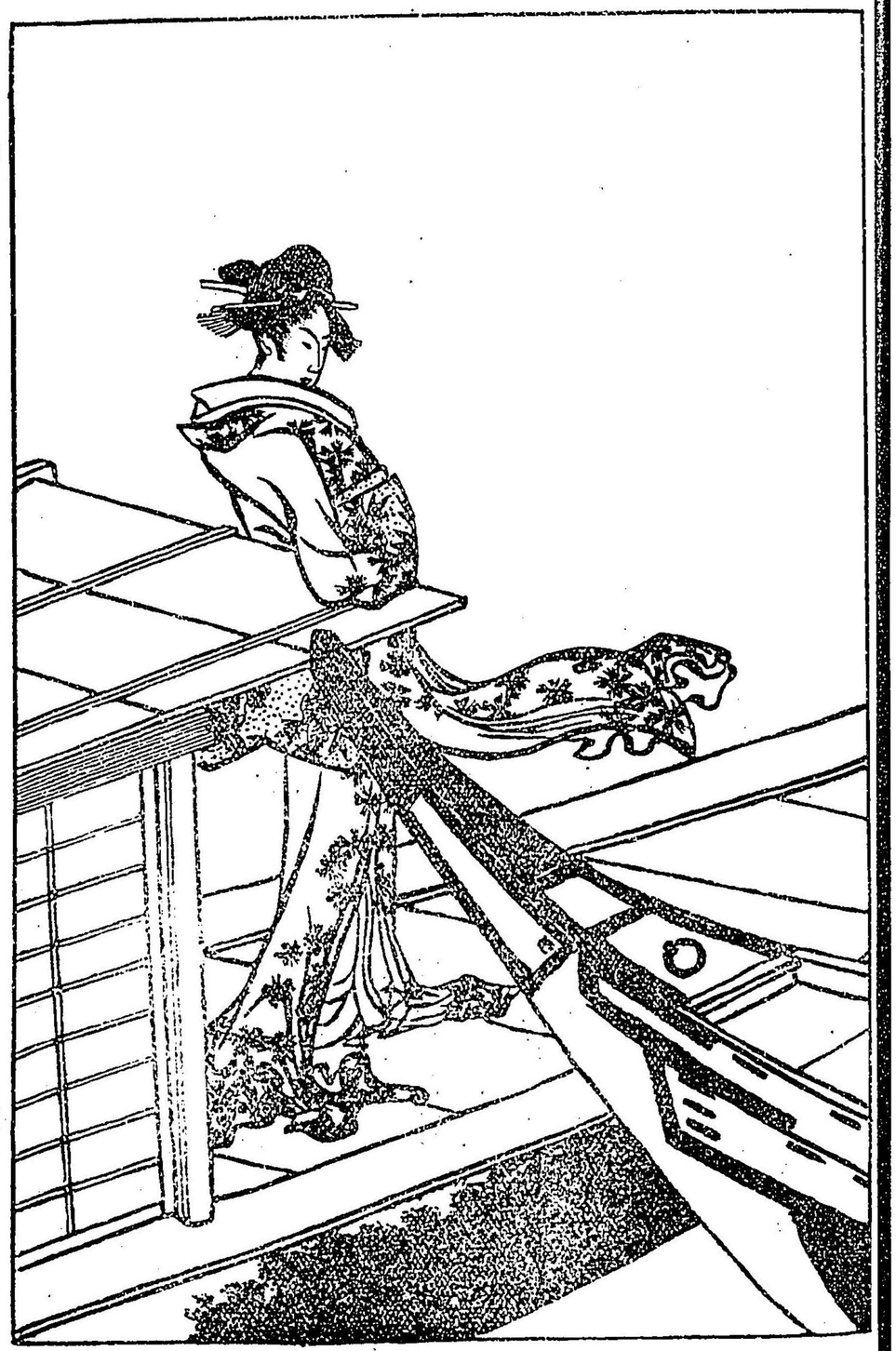
梅がかをこむる霞のたえまより
こぼれて匂ふ鶯のこゑ

阿蘇次郎は認ある忠吾が扇なるにぞ渠が方に背向ひコハ足下のもちたまひし扇子なるか歌のさま優しきはさらにて墨痕のうるはしきこといふべうもなし何等の人の寫れしにやそのぬしゆかしと問ければ筑八應へてそは婦人の詠歌なる由さるかたより得はべりきしかあれどその人は誰といふことをしらずといふ阿蘇次郎眉を顰めさもあらば加茂の祐包かさらずばたれなるらん今の世都下にてこれほどの歌よむ人は聽もおよばずとふかく感ぜし面もちなり乳媼はほと〳〵絶倒いりてあまりにまじめなる御顔ばせかなそれこそわがかたさまの主母の詠たる歌なれといへ

ばかの女房は乳媼を叱めてさな洩しぞいとはづかしきにといふ阿蘇次郎襟もと刷ろひ原來上臈の御詠歌なりけるかむべ拔群たる風趣ありけるよとふかく感にたへてぞみえける那の女房もいとはぢらふさまにもてなせどもささつかたより琴といひ香といひことに今の和歌などの風流たる態の趣向あるにぞこれがために三個の漢子は全然に蹶歴れ興は婦人のかたに奪はれおの〳〵羞澁たるありさまなり負じ精神の伴の筑八泳へかねてや己が扇子の蟹眼のかたをむかふさまになし那の女房の前にさしいだしこの扇面はこれなる吾師よりその詠歌を書て給ぬと賣弄ぬ阿蘇次郎はこれを見てほと〳〵手に兩把の汗をにぎりつ女房はこの扇をいたゞきひらきてみてあれば

よゝの人の月はながめしかたみぞと
思へば〳〵ぬるゝ袖かな

と走筆なる墨痕のうつくしささながら飛花落葉のごとくなりかの女房數回吟ぜしうへコハなさけふかき御詠歌にてちかごろの秀逸とこそおもひ侍れといよ〳〵その人品をも慕へるさまして賞しける阿蘇次郎は又しも前の歌をほめてあつき語に償かさねていふやう適間彈たまへる箏の琴はたしかに筑紫なる松浦檢校が操たるしらぬ火といふ調子にて筑前の守殿の秘曲なりしとうけたまはりき鶯舌もいと嫩かにいみじう侍らひつれば極めて令姐の御爪音とこそ知れはべるかゝる秘曲をしる人の都がたにあるべうもおぼえ侍らずさればいかなる上臈にましましけるやらんきかまほし包まずあかさせたまへかし女房うち聞てコハおたづねにあひ侍りていとはぢがはしくこそ候へわれ〳〵はいふにかひなきものゝ眷族なりなてうあからさまに告まゐらすべきまたこそおりもさふらはめ左のたまふ郎君こそ由ありげなる御けはひとく〳〵御名をなのらせたまへ阿蘇次郎いへらく小的は西國がたの浪士なりもとこれ下從のうへなればいかでおこがましくも名のり候べきさはあれわが性として律の調子を好みはべるが今の御爪音の有趣わすれやらず聞ならく太宰の家には菊の栞といふ秘曲も侍よし不知火を彈せたまふうへはよも菊の栞を知しめさぬことは有じ今日は不思議の幸ありて遇故郷の音じめを承り一入興深くおぼえはべりぬかしこけれどよきついてにしあれば菊のしをりをもあやどりて聞せたまへといとせちにのぞみけるかの女房うなづきてコハくはしくもしろしめされきその唄は女兒もよく記得はべりやよ深雪かばかりねもごろに仰するにとく彈べて御耳を汚しまゐらせよといふ小姐はたゞ偷眼してひたすら阿蘇次郎に眷戀ゐたりしがこれをきくよりさと顔をうち赧こゝろときめきたゞむねうちさわぎてわらはゝゆるさせたまへといふことばさへ口ごもりていとはづかしげなりされどなほ母も伴へる一族の奶々もすゝめてやまずこの時小姐深雪は何かはしらず了髮淺香に耳げば淺香阿蘇次郎が膝下に居よりいとうらゝかなる扇子をさしおきこれにものかいてたまはりさふらへ我かたの深窓のこはせたまふにといふ阿蘇次郎くだんの扇子をとりあぐればいかにも姐のあふぎとおぼしく玉手にふれしうつり香の身にしむばかりものゆかしくうらおもてうちかへしつゝ珍玩そび光輝奪目銀地風もかほりをそゆるにぞいかにも仰にまかせなんその料には とまれかくまれ菊の枝をりを彈せたまへといよゝせちにのぞみける小姐はやをら袖かきおほひなほたをやぎてはぢらへば乳媼の眞柴阿蘇次郎にむかひてわがかたの姐々はまだ羞澁深窓にしあればなてう郎君たちの前にして容易しらべたまふべき適間郎君の賞めたまふなる梅が香の歌に主母がちかごろ手をつけられてさふらひきそは菊の栞とおなじ調子なり客

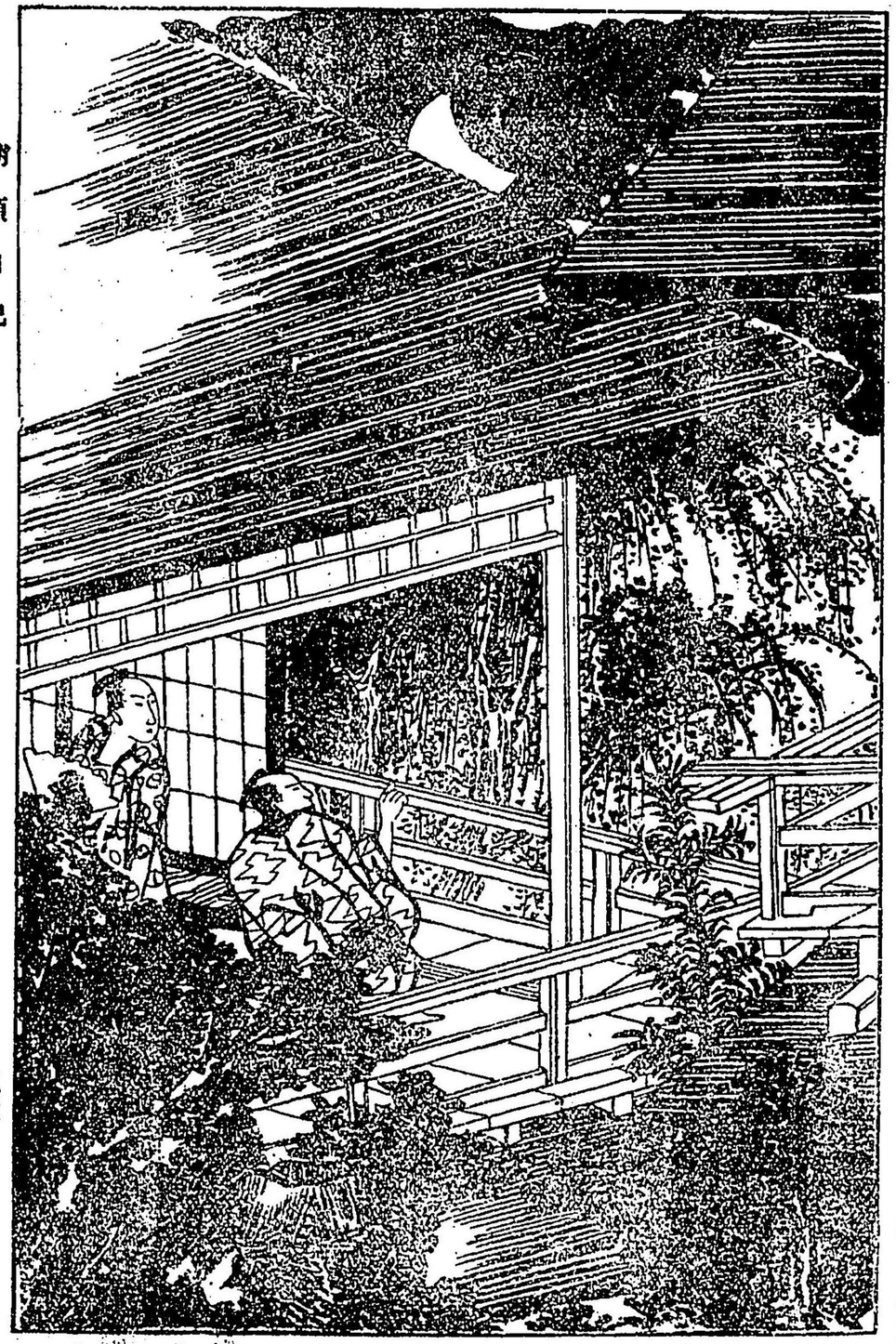


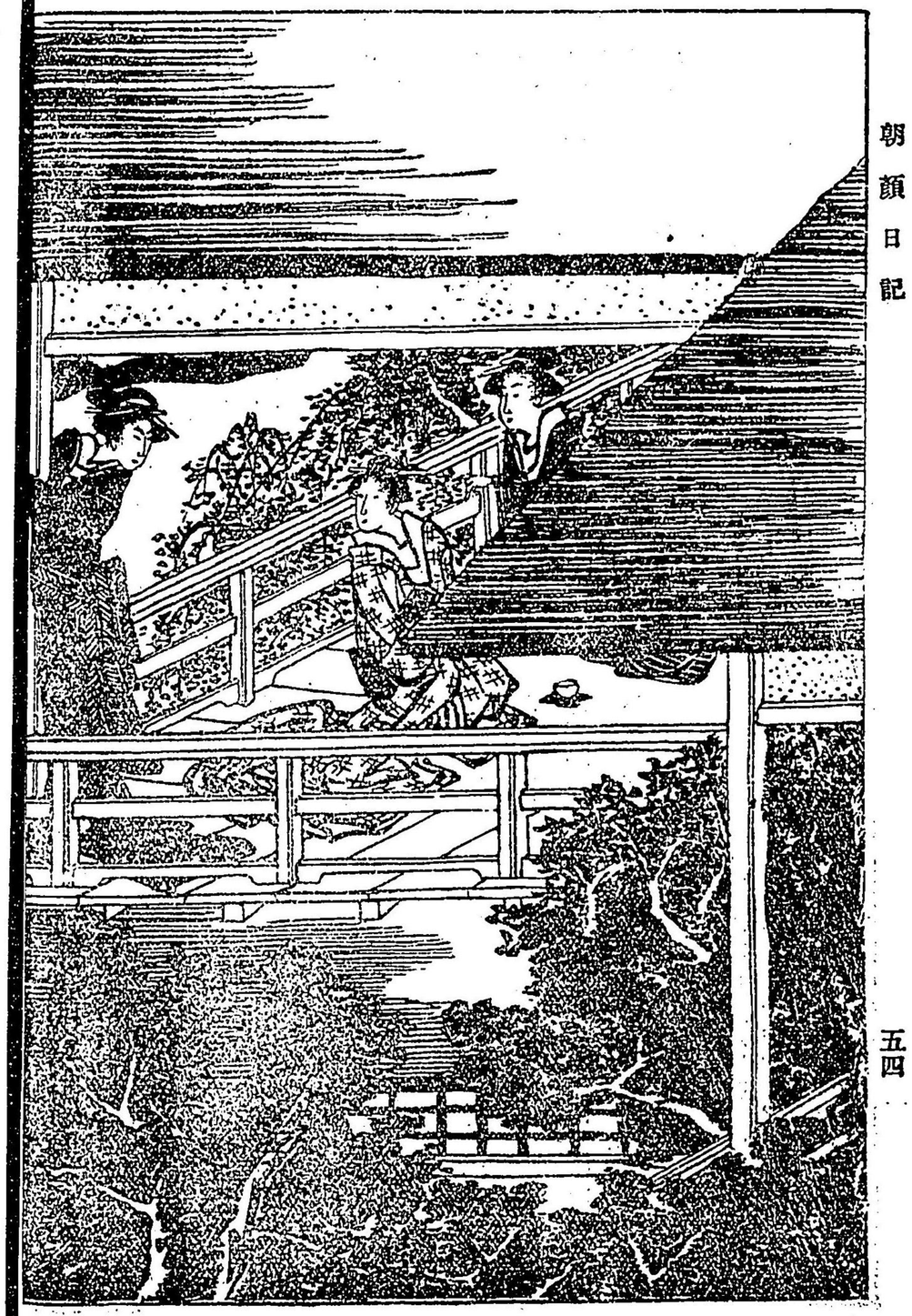
まずもその扇子の盃賛をなしたまへさあらば換免にして主母にも秘曲を彈てつくのひたまへと彼方こなたをすゝむれば母刀自もこれをうべなひやをら調子を律にしらべかへていともやさしき玉琴を掻鳴しつゝ操とりける了髮どもは研あてがひ往生ずくめに寫すれば顔にたく火の阿蘇次郎今は推辭ん法もなくかの琴曲を聞ながら披らく扇子に描しはたゞ一輪の朝顔にて時に名たゝる繪博士が妙をつくせし筆のあと阿蘇次郎も一時高興にまかせて

露のひるまのあさがほをてらす日かげのつれなきにあはれ一村雨のはら〳〵とふれかし

とたゞすら〳〵書くだせり恰好梅が香の曲もはてければ小姐はさらなり女房たちこぞりてこの扇を見るに歌のさまの古雅なるは催馬樂とやらんの調べにやはた字様のうつくしきは草の葉分にさゞれゆくその水莖のよどみなくいとつゆけくぞ見えにげるかゝることにうち興じて阿蘇次郎もおぼえず數盃をかたぶけ微醉まゝに人々に向ひて今日ははからずもかく御欵待にあづかり何酬べきよしもなければ今その扇の繪賛に手をつけつたなき音染をきこえあげ些の興をもそへなんと側にありあふ蛇皮線をかき抱きしばし調子の音どりしてやをらのど〳〵彈ける「露のひるまのあさがほを照す日かげのつれなきにあはれ一むらさめのはら〳〵とふれかし」とおしかへしつゝ彈うたふその聲妙にあはれなりきく人耳を側たて感にたへずすゞろに涙をさへこぼしつまたしもはら〳〵とふれかしなどうたふ時天も感應まし〳〵けんまことの村雨はら〳〵とうちそぼち水のうへ船の屋根にも音のふにぞこの雨氣人の肌肉にしめていとすゞしくこゝちよげなりこの時右左の障子をひらけばはや黄昏の川面に數百千萬螢火の亂れ輝耀光景は巷の説にいやまされり阿蘇次郎屹とこゝろつき日も暮はて

て婦人ばかりのこの席に長居せんも影護たしとはやも衣紋をかいつくろひ竟日の饗を謝し兩個の門弟をいそがしたてとくわが舟へ乘うつれば人々名殘ををしみけるわきて小姐は情郎と今日半日の圓居してはや十年も馴染しこゝちけふわかれてはいつの時心のたけをあかさんとせんすべもなきおもひして秋水もうち潤かなしさを袖に包みて淺香をよび又もさゝやく柳かげ淺香ははやく心を得て乘後れたる筑八が裾をばひきとめやよあの先生さまの御名をちよとこれに記してたまはれと筆とのべ紙手に遞せば筑八いなまず昔やりて己が舟に飛のりぬこの時滿江は一面の螢火にて宛も白日の如くなればかの小姐はいとのこりおほげに阿蘇次郎が影のかくるゝまて掉くだす舟を見送しがはやもせつなに見えざれば遺る憾みのやるかたなくおもかげそひてわすれがたきにたけきことゝはなみだにしづめり阿蘇次郎は夥の舟々を漕ぬけゆくにいづれも俗趣ならぬはなければはや興盡ていそぎ前の橋詰よりあがりやがて一個の逆旅店をたづねて三個こゝに舍をしめおの〳〵沐浴などしつかくて檻に靠て眺みやればこのわたりもすべて柳はらにぞありけるうち戰げる梢のいとあかやかになりにたるに少焉東の山の端より一輪の皓月さしのぼり大さ車輪のごとくその影一帶の大河に映じ金の波さゞれたち山色は霞々として黛をなし清風徐に吹わたり白露江に横たはりて涼爽ことかぎりなくわすれては秋の天かとぞおもふさばかり縱横に亂れとびかふ百千點々の螢火もこの一痕の月のためにたちまちに光を奪はれさらかへりたる風景のまた眼ざましく趣きあるにぞひたすら飽ず望居たり隣の架棚にも女の聲いとかしがまし筑八はむくつけにもさしのぞけばこなたを見入たる女の顔を月光にすかせばまがふべくもなき前の了髮にぞありける筑八北叟笑





してこはまた這里にても不思議に環會はべりといふ丁髪淺香これをきゝげに前の風流客にておはしき師の郎もますらめよろしくまうさせたまへかゝることにしあらば一つ房に含なんものをといひさしつゝ入しがやがてまた出來たり欄干をよぢて這方の内を張き半身を顯はし諸郎爰に在り明なばわがかたさまの人々石山へ詣て侍るなり諸君にも伴ひたびてんやといふ忠吾筑八は渡頭に船のこゝちして雀躍つゝさうなく諾なひ明日の約束をぞなしけるかくておの〳〵臥房に入ぬ宮城阿蘇次郎はまだ夜深きに起出二個の門弟を法おこせば筑八忠吾目をすり〳〵はや隣より誘來りしやと問にぞ阿蘇次郎いへらくしからずいそぎ都下へ歸んなんいざたまへとせりたつれば兩個はこれを聞て大に不興し霄に約せしこともあれば今日なんかの美人たちと石山にうちつれゆかば昨日にまさりて有趣かるべし先生にも今一日まげて吾儕と閑要せたまへとひたすゝむれど阿蘇次郎頭をうちふりて歡樂は時を得て極むべし窮士は寸陰を惜むべしとその惰をいましむれば忠吾筑八はせんすべなくふかく望を失なひてしぶ〳〵師匠の跟につき都をさして回りける

第六回〔蘭〕

宮城阿蘇次郎が兎道の川舟に奇遇つる女房たちの素姓を委しくたづぬれば筑紫なる大宰少武殿の浪人秋月弓之助が宅眷なり弓之助が渾家を水青といひ女兒を深雪となん喚ける那の弓之助國を挂冠些の瓜葛を托みて洛陽にのぼり岡崎村に隱れ栖ぬ弓之助生得てその相貌堂々文武の才を兼全剩へおのが名において精兵の譽世に高し本國筑前に在りしときは大宰家に仕へて二千八百石の秩祿をとり一隊長をつとめしとぞもとより大祿の餘光にてかく陸沉の身になりても緊く内福なる過活にて夥の婢僕をも使ける昨日は著纓家の雜色なる一族の内室をも誘ひて宇治の螢見にまかりたるなりさてこの弓之助が退仕したる緣故といふはこれよりさき大宰家の健卒に足柄傳藏といふものあり渠が一個の妹に和蘭とて天賦いたる雪落ものもとより八九分の顏色ありこの和蘭いつの比よりかおなじ藩中の騎士花囿山十郎と密通をなしつその家もと貧かりければ山十郎をりにふれて些の人情を使てみつぎけり傳藏はもとこれ不良ものなれば自己が榮利を貪りて蘭が山十郎と通せしことはしらず顏にぞうちすぎける阿蘭は形のごとき淫婦にてまたしも小野右近といふ武人にも契をこめてふかくいひかはせしかば那の右近おらんが色にめてまどひこれを百年偕老の老婆にせんと門戸不對姻婭なればにや乾父といふものをこしらへむまく傳藏とも擅て程ちかきに迎娶んとその支度をぞいそぎける花囿山十郎その催を聞とひとしく勃然として震怒傳藏をせめはたりお蘭はぜひわがかたへまうしうけずば八幡武士道たちがたしとさん〳〵にいひのゝしる右近はまた約束せしことゝいひとまれかくまれ蘭はわが妻なりと双方ます〳〵いひつのりさあらば刄鋩にて取て見せんと共に意氣地をたてぬくにぞしたしき傍輩どもは三四十人斗づゝも互ひに荷擔をなし向敵手を討果し蘭をうばひて立退んと豈夜兩家にうち集ひて今や切ていてんと犇めきける老分の人々中に入曖かひ見れどもおの〳〵馬耳風に聞なし咄嗟大騷動におよばんとすその比筑前の國主大宰小武殿御他界ありて世子龍壽丸君いまだ幼少おはしけるゆゑ賢女のきこえある後室紫光禪尼簾子たれて政をきかせられぬ尼公こたびの騷劇をふかくおどろかせたまひ物馴てかひ〳〵しきものなればとていそがはしく秋月弓之助を鈞座に呼出され今度の騷動も汝が隊下のも

のおほしときくいちはやくその場にゆき向ひ無事にとりしづめよとの上意なり弓之助かしこまりて直に馬を飛せて闘爭の場に馳ゆきけるこの時双方白刃をうちふり已に巷の戰におよばんとす弓之助は馬を眞中にのりつけ後室よりあづかり背にさし來し御家の令旗をぬきとつて前後左右を麾ねぎ上意〳〵と呼はりけるこれを見てさしもに亂れさわげる徒黨のものどもたちまち颯と東西にものわかれして各々地にひざまづきて令をきく弓之助馬上より大音上御幼君をないがしろにし譜代恩顧の身分として上の御爲をかへりみず私の遺恨によりわがものならぬ一命を果さんとは重々の不忠なりきつと先非を改むべしまつた傳藏は塾居まうしつけ蘭は尼となし一生緣付をゆるさずかゝれば双方の武士はたちなん御代がはりの初めなればこのたびの罪を問れず寛仁の御制度をかたじけなくおもひすみやかに和睦をなしてこれより忠勤をはげみ候へと上意と稱して諭しけるにぞ山十郎がたも右近がたの荷擔人もふかくその道理に伏し且尼公の御仁心を感じ蘭だにしかく仰付らるゝうへはわれ〳〵べちに夾さむべき意地とてもさふらはずとさしもの亂逆たちどころにしづまりしは全たく弓之助が一時の機變によるものなりかくて弓之助登城してこのよし後室へ伏稟あぐれば紫光禪尼御感ましまし御褒賞ありて祿あまたとらせたまひぬその後世子龍壽丸殿御元服あらせられ累代の箕裘をつぎ故のごとく大宰の小貳に任ぜられたまふこの新小貳殿一日鷹野に出たまひしが一陣の霎をしのがんとはづかにありあふ三四人の近從のみをしたがへ御手に鷹を居させられてとある庵室に入らせたまふに戸ざゝぬ裏頭には圍爐の茶ふきこぼれてあるじはいづちへか行けん見えざりけり小貳殿主從はこの庵の竹緣に尻かけてやすらひたまふをりから雨も小やみたり雌手

なる山脚より袖笠して下り來たるはいとうらわかき女僧なるが御佛へ供へんとにや寒菊山茶花などをりいれたる阿伽桶を手にさげつこの女僧暫と見るにわが庵に息ひたまふ御方はさもけだかき御打扮なり正しく國司よと猜せしかばあたふた垣根につくばゐける小貳殿ちらと見たまひしがふかく懸想ましましやをらたち來てかの尼が側にちかよりたまひ面をあげよと仰するにぞ女僧いとはづかしげに顏すこしあげて背向へるそのさまほと〳〵玉を欺むくばかりなり梨花一枝春雨を帶といふ態にていまの雨にそぼぬれてあはれにたをやぎたるそのすがた墨のころも綾錦より嫋きたり小貳殿名はなにといふぞと問せたまへば惠春と申世捨人にはべるといらふ殿は御還るさの道々も近從にかたらせたまふは惜べし絶代の佳人この草莽に埋みはてんことをさるにてもかゝる美人のいかなるゆゑに尼とはなりしいぶかしさよと心ありげにのたまはすればおひ〳〵はせつきたる御供のうちに知人のありてあれこそは足拇傳藏とまうす健卒が妹にて候と聞あげける殿うなづかせられてさればこそ往年大亂のをりはいかなる女にしあればしかく騷動におよびしぞと久しく不審はれざりしがあれほどの縹致なればさありしも理りよといよゝ慕しくおぼしけるやがてかの惠春を帳内にめさせたまひたゞに還俗させられてもとの名にあらためさせ御側室とかじづかせたまひける外面似菩薩內心如夜叉と說れたるがごとくこの和蘭の方顏ばせのあてなるには似げなくもその心いとおどろ〳〵しく奸才また類なかりければ佞媚をもて君の心を蕩かしたてまつりひとり寵愛を專にせしかば殿は何をかなしておらんを悅ばせんといちはやく傳藏を擢器ありて側執事となさしめらる傳藏もとより梟獍なるものなれば己に諂らふものを媼負して首尾をつくろひ骨鯁の人

を仇讎のごとく忌嫌これが讒をかまへあるは罪におとしあるは黜ぞけしかば世につるゝは小人の習俗なりこの傳藏が當路に希旨榮利を得んと望むものも多かりこゝに笹虬太夫とて一千石の祿を給はりこれも隊長を勤めしが一子虬之進がために一個の美女をもとめてこれが新人にせんと多方心を費せしがある氷人きたり足下のもとめたまふ注文にかなひたる風流女こそはあんなれ秋月弓之助が女兒深雪といふものこそ世にすぐれたる縹致なれ鐵の鞋を踏破て日本國を搜しもとむるともこれより外にはあるべうもなしといとほこりかにすゝめければ虬太夫父子はその人がらをもとより見もし聞もせしゆゑ頻に懇望におもひ氷人して秋月家へいひ入れけるに實明緊の弓之助日比笹親子がひとゝなりを惡み且その門風をもいやしみ居ればいかでたやすく氷人が花言巧語をうけひくべき百般事に虛托て固辭をぞいひはなちける虬太夫はなをこりずまのやるかたなく暗算やがて當時日の出の足拇傳藏にとり入重く賄賂をなしさま〳〵追縱して殿の御聲がゝりをねがひ秋月が女兒をせがれが妻に仰つけらるゝやう渠が執成をぞたのみける太宰の少貳殿は傳藏がいふにまかせて即日秋月弓之助笹虬太夫を召せられ汝等には似合ごろの男女の兒どもを持たるよし門戸も相應なれば予が媒をするぞいそぎ日をえらみて婚儀をとゝのへしかるべしと雷霆擊の嚴命に虬太夫はよろこべども弓之助はハツトおもひもとより心にはそまねども君命いなむよしもなくその座はまづ御請をなして罷出ぬ弓之助すご〳〵私邸へ回りしが怏々として樂まず渾家の水青は氣をいため御顏色の常ならぬはいかなる怯事か侍りきと女兒もろともたづぬれば弓之助は數回歎息し新君色に耽りて佞人をちかづけたまふはや當家も末になりたり足拇傳藏先年の事を意趣に含みをりに

ふれて我をはづかしむそのうへ腹あしき笹虬太夫を取持上意を借て好まざる婚儀をなさしむることすべてかれがはからひによれりまことに奇怪なり國道なき時は去ると聞いざや暇を乞捨にして片時もはやくたちさるべしとつもる憤懣をあかしければ渾家の水青も良夫の肚裏決せしと見てければしひても諫めず密にその支度をぞなしける一日秋月弓之助は月番の家老の邸にいたり一通の封章を玄關にさしおき古實のごとく隊長の備正しく鐵砲きり火繩のものを左右にうたせ家眷を後陣にかこはせつゝしづ〳〵と溯臺を起程ける殿は弓之助が封章を御覽するに己が不足をいひならべ押て暇を乞捨しは言語道斷の曲事なりと以ての外に怒らせたまひ追手をかけよといきまきたまふを御母堂紫光禪尼慌てゝ殿をなだめ渠が舊功どもを叙られてわりなくとゞめたまひしゆゑ弓之助は事故なく筑前の國をひきとり家眷を具してこの京にのぼり來たり今の岡崎の莊院を購得て移り栖てぞ居たりけるこれはこれ前の話なれども因によりてこゝにしるす

第七回〔月〕

今茲秋月弓之助が娘の深雪青春破瓜にもなりしかば父弓之助佳婿をもとめてこれに妻あはせんと渾家の水青もろとも多方心を費やし詩歌香茶の友どちにさへたのみて才貌双全人をぞたづねける弓之助が和歌の伴に加茂祐包といふ人あり忽日岡崎村に來り弓之助にあひていへらくかね〳〵足下の望まれつる才子こそあんなれと東福寺の月心和尚さいつごろ浪士宮城阿蘇次郎といふ人に嵐山にて邂逅しことをかたり「舟うけて誰ものゝ音にあそぶらむあらしのやまの花の木がくれ」と詠たることまたそのゆふべの句詩に「渡月橋頭人渡〻月月明還在二綠波間一」とつく

れりその氣宇の軒昂はさらにもいはず才器は古今獨歩なりと申されき下官はいまだその人を見ざれども しらるゝごとくうらなき月心師の語にいつはりはあるべからず心師は緇徒のことなり誰そぞちにしかるべき氷人をたのみて媒話て見たまふべしと敘られける弓之助はもとより祐包の篤厚をよく知り居ればつぬなみの慰言とはおもはずふかくその語をば信じそはよくもしらせたまへりさもあらば手蔓をもとめてかたらひ見侍らんとあつくその好意を謝し種々欵待てぞ回しけるされどもこの弓之助は生れつきたる謹密にて東福寺の月心とはしたしき友垣なるが夏中は山籠りして戸出せられずときゝわざ〳〵たづねゆきて和尚の學窓に偶坐して半日の閑談をなし其序に阿蘇次郎が人品をぞ尋ねける月心いへらくかの宮城氏は今の世の英雄にて寔に王佐の才ある人なり詩歌の類はその緒餘にて已に此頃きこえしかの人の歌に

うきことのなをこのうへにつもれかし
かぎりある身の心ためさん

と詠めりこの歌のこゝろいきを嚙味見たまへ大丈夫の氣象にあらずや弓之助またその品表を問に瑕なき璧と知しめせといふにぞ弓之助大によろこびしばしまた四表八表うちかたらひてかへりぬかくて弓之助次の日も渾家水青等とこのことをかたり出し宮城氏に親き人もがな氷人に央てんとつぶやく日比この家にこゝろやすく入來る醫者に橘雞庵といふものありをりふしその座に居あはせこれをきゝて酒酸鼻をおごめかしそは僥倖なることこそあれその宮城氏は不佞とは仔細有て日比親しき中らひなりとそれに馴染る由をもあらましつげ不佞良媒をなさばたやすく事を成おほせ申さんとしたり貌して阿蘇次郎が才と縹致とを口にまかせて褒ることはなはだしく說得て天花も亂墜るばかりなり弓之助が性

としてかくうきたる調子にのらざればいづれは足下の紹介を蒙りてんさりながら一應その人品をためし見たるうへのことにこそとて最愛の一個愛玉なればかく大事にかけて念を入るも道理なり斯て日を經しが弓之助は今日も省に來る鷄庵を止めてはや八月も二日三日立ぬ來る望の日はわが宿にて賞月筵を催し縉紳家兩三位を請じ奉り例の祐包月心などをも招ぎ待るなり幸のをりなれば御話の阿蘇次郎とやらんをも一座せしめてその人品をも見まほしければ貴老多勞ながら宮城氏へ來ん望の月の筵にはかならず光賁たまへとわが語を傳なほほどよくこしらへたまはれと宿題をさへことづけてつかはしける雞庵はこれを允容やがて岡崎をたち出ぬ雞庵もと秋月が內福をよくさとりゐるゆゑ事成ば一籠の媒表をしてやらんとすゞろに例の火を動かしはや手に取たるものゝやうにほと〳〵揚々たちて下河原にいたり宮城阿蘇次郎にあひにた〳〵笑貌つくりしか〳〵の由をつげ來る十五日には秋月氏の高會に往せたまへと約ぞなしけりさてまた岡崎なるむすめの深雪は宇治にて眷戀し情郎をば筑八がその名を書つけくれしゆゑ宮城阿蘇次郎といふことをしれり今しもその人を婿にせんとの私意にて箋君月見の支度せらるゝを見てよろこぶことかぎりなし媽の水青は乳媼の眞柴了鬚の淺香とも顏見合てうちわらへりされども水青は物がたき良人をおそれ前に阿蘇次郎と螢狩にていてあひたることをばふかくかくし侍女どもにも口どめせしゆゑたゞこれ私下にてさゝやきあひみないそ〳〵といさみたち何となくいさましげにぞ見えにけるかくてその日になりければ女兒深雪は朝まだきに起いてゝ紅粉よ燕脂よといと靚に粧ひかざり搔頭はいづれにせん玉簪そはよろしかるまじきやなどうち躊躇つゝ鏡臺に向へば眞柴は小姐の背をほと〳〵とうちた

〻きてあやかりものにはべりなど〻ざれごと〻へば淺香もまたうらやましくさふらへなどそ〻のかして閨門ざ〻めき居たりけり日も斜めに傾ぶくころ、橘雞庵眞青になりてかけ來り喘吁々ざいひけるはさて〳〵遺憾なりかの阿蘇次郎ぬし俄病づきて得まゐりがたしよろしくことはりくれよと申されぬ今朝顧しときは感冒もおほかた治しゆゑずゐぶん伴なひ往てんとて月代を包み居られしが後に誘にゆきし時はいかにも大熱さし出て頭痛劈やうなりとて高枕をなしてうち呻吟居られき脉を診ひさふらふに一かたならぬ再感の邪勢なれば參らぬも無理ならずされど阿蘇次郎ぬし重き枕をあげてこの体なればとてもえまゐらずさりながら御乗題は詠おきてはべる今宵の東人へとゞけくれよとまうされしと懐裏さがしてとり出し弓之助へ遞しける弓之助これをうけとりしばしあきれて語なし渾家小姐もほと〳〵望をうしなひ簪の花を風にとられさやけき月の黑雲に掩れし心地して天さへしばし搔曇りいよ〻打濕りてぞ見得ける弓之助阿蘇次郎が乗題の歌を讀ばうつくしき手して

山のはの今宵ばかりはなくもがな
入かたをしき望月のかげ

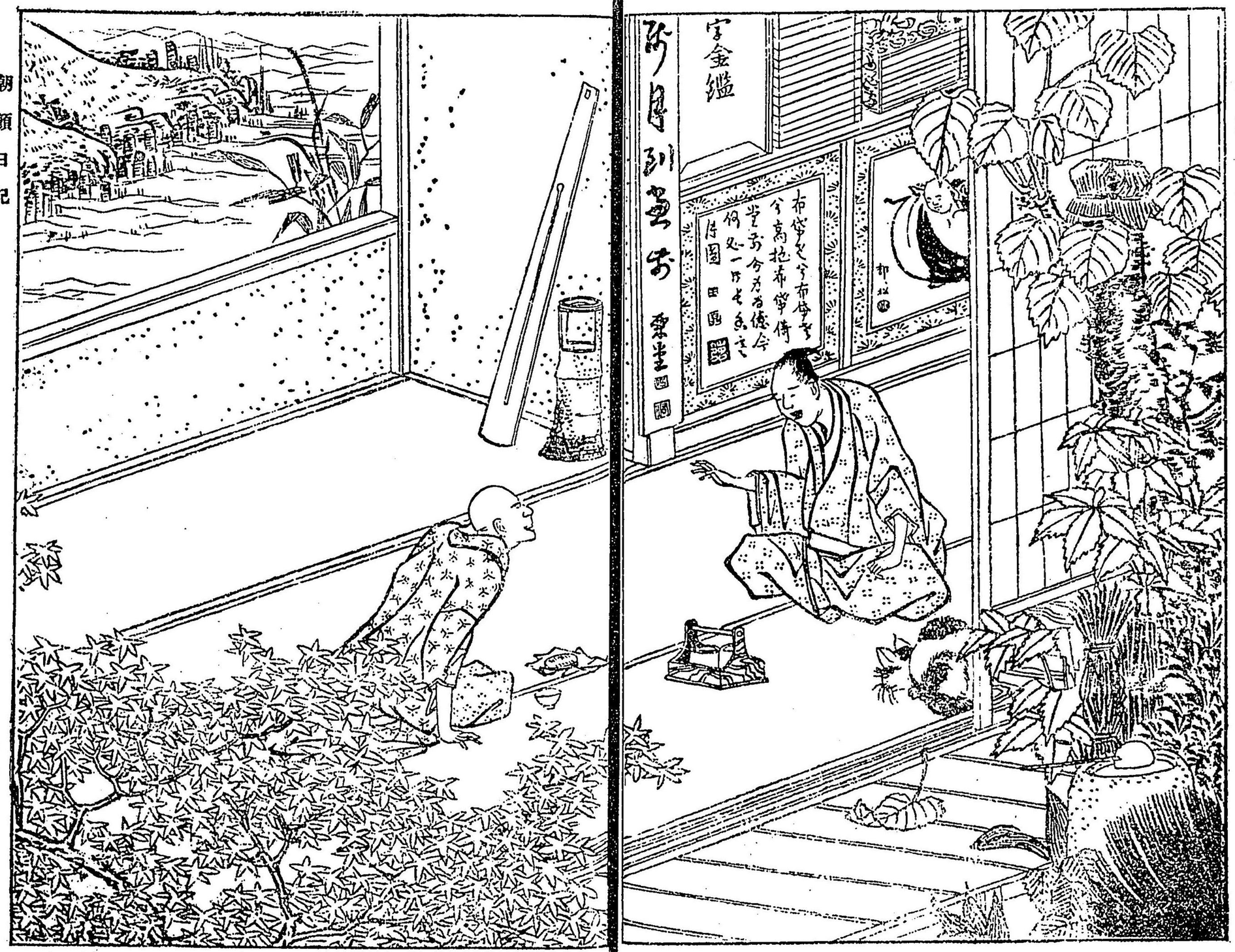
春雄と名をしるせりこれなんその日の秀逸ときこへける明れば雞庵また入り來りて前宵のことなど問ひける弓之助は雞庵に對ひてゆふべの會には賓客たちも宮城氏と一座せざるが遺憾なりと申されきこは得の賓客の詠草なりとおのれ夫婦がよみ歌をもまじへて雞庵に遞しついてもあらばこれを宮城氏へ見せてたまはれとたのみぬこのひまに深雪はわがおもひをのべたる一首の戀歌を短冊にしたゝめ雞庵がたち回る袖をひきとゞめこれにものこりしとかの懐紙の中に卷こめてわたせば雞庵は何の氣もつかずそのまゝ懐抱におしいれ慌忙下河原にいたり阿蘇次郎が容体を診て弓之助が口詞をもつたへ件の懐紙をさしおきて回りけるあとにて阿蘇次郎は懐紙どもくりかへし覽中に一枚の短冊はさまれあるをくりあけ見れば

ながれては末のうき身をいかにせん
おもかげへだつ宇治の川霧

とかいたる墨痕いとつゆけし阿蘇次郎つく〳〵とうちまもりこの歌ぬしの名深雪としるせり日外宇治にてあひしも深雪なるにこの歌のこゝろもいぶかしとひとりごちて思案のかうべをかたぶけぬ

第七回下〔假〕

そのゝち荻野祐仙は醫學修行せんとはる〳〵洛陽にのぼり三本木にて川つきの院落を借このごろ栖つきてありけるに橘雞庵ともはしなくいてあひけるが雞庵は當年の背約をわびぬ祐仙もとより蠢愚しきものなれば早く雞庵が佞辯にたらされまた懇に結交ける一日雞庵祐仙が三本木の旅亭にきたり話けるは昨日はいと遺憾ことこそありつれ惜むべし一廉の祝酒を喫そこなひきと呼やく祐仙いぶかしくおもひそは何等のことありやと問ければ雞庵いへらくわが友宮城阿蘇次郎を秋月弓之助といふ人一個女兒の婿とせんとてまづその人品を見まくおもひ月見の會を催し不佞に紹介せしめて招かれしが已にその日になりて阿蘇次郎病つきて往ざるゆゑそのこと遂に水になりにき噫かの阿蘇次郎福分薄うして絶世の美人を占得ざりしと只管嘆息して止ざりける祐仙いへらくそれは岡崎の秋月氏にてその美女の名は深雪といふことまでをもしれり雞庵ほと〳〵あやしみいかにもしかなり貴邊はいかにしてよく精しくしりたまへる祐仙ほくそゑみていへらく小生さいつごろ清水にまうでし時舞臺にてゆきちがひにその人を見たるが今の世の薄雪ともいふべくすごきほどうつくしかりき


宇金鑑

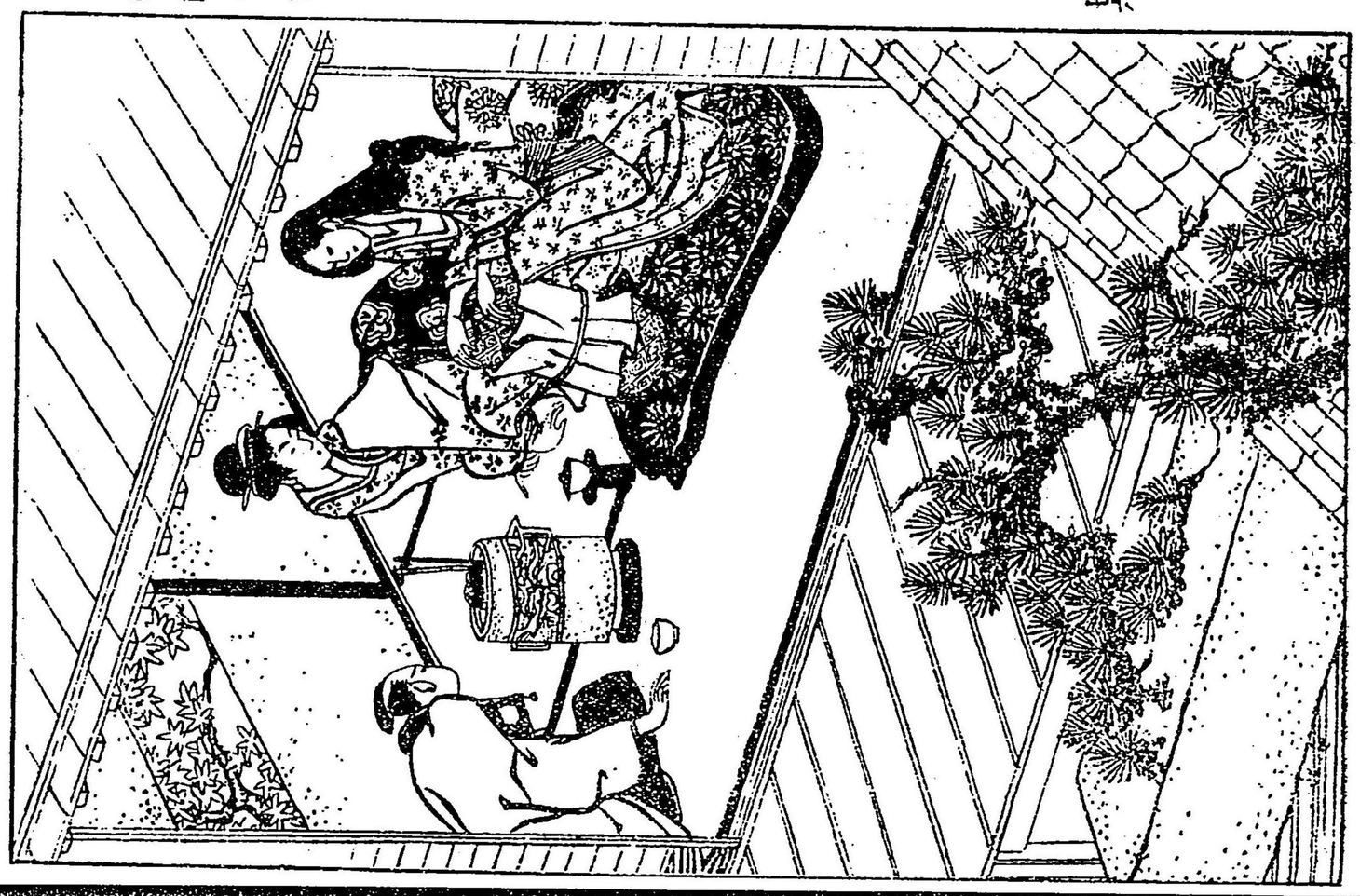
そのとき小生かの姐がたをやぎたる縹致を見て肌肉酥て醉るがごとくそれより夜として夢想せざるはなしその日あとつけて見得がくれに慕ひゆきかの人のすめる岡崎の莊院をも認け且隣の老婆に問てその苗字をもしりぬつね〳〵清水の圓通菩薩に願籠して火食禁せし奇特にや今日滿ずる日にあたり足下よりこの手蔓を聞いだせしはまさしく赤繩のあるしるしなりいかに雞庵子その秋月氏へ小姓を螟蛉に媒ね雞庵さゝて笑を忍ておもふやう那の阿蘇次郎と祐仙とをくらぶればまことにこれ雪と墨なるちがひにて祐仙は極て醜き漢子なりされども雞庵往年この祐仙より金子借りとりし債あるゆゑみす〳〵うちつけに和君は不男なりこの緣談とゝなふべからずとはいはれずなるほどはからひ見るべしさりながら那方にはいまだその人は見られねど阿蘇次郎が高名を慕ひて婿にせんとの准備なればこのをりは他人のことをいひ出してもとても承引まうされまじ祐仙いへらくさもあらば小生を阿蘇次郎になしてつれゆかれよとのつぴきならずせちがひけるにぞ雞庵もほと〳〵窘迫さはのたまへども阿蘇次郎は月代頭なり和君は慈姑のごとき髻のさまいかでたやすく假おほすべき祐仙いへらくなにさほど前髮剃ことにかたからんといひつゝ肱ぢかなる調度より圓金三十兩とり出しまづこれは當座の賞標なり事成なば分外の辛苦錢をまゐらすべしと雞庵が前にさしおけばもとこの雞庵黄白を慾がること青蠅の血をむさぼるがごとくなればあとは野となれ山となれ先は獏獲の兎なりと直に金子をうけをさめ和君さおもひたまはゞ施すべき手段もありなんと間に合をいひてその日はわかれて回りける明日雞庵また三本木の借儚舍に訪來りければ祐仙は頭を手拭にてまき浴衣ながらに出迎て笑顔つくれり雞庵これを看てともにうちわらひ和君もまた感冒

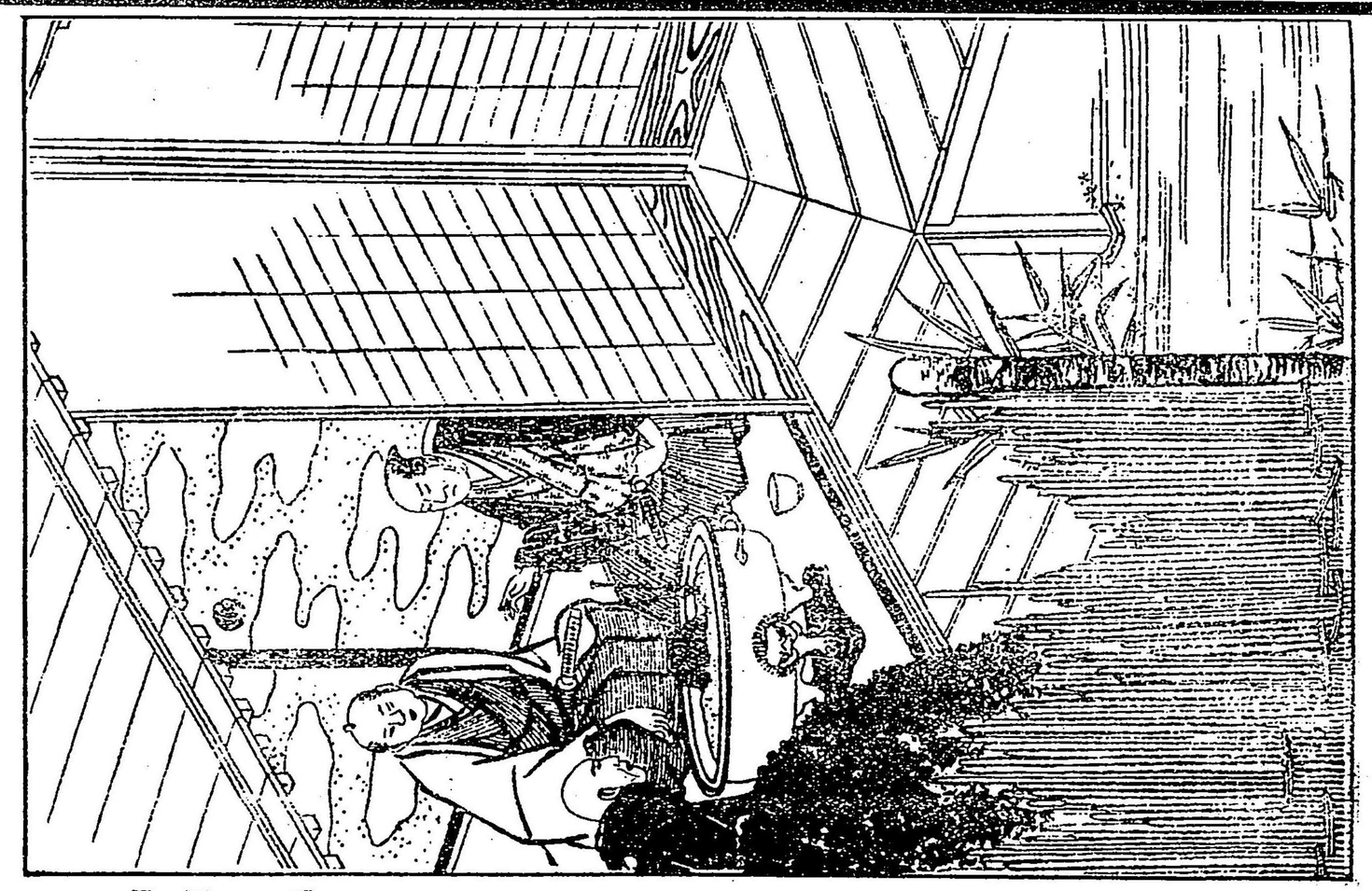
たまひしか頃の風神はとにかく風流雄を崇ることよと戯むれければ祐仙手ばやく手拭をとればいつの間にかは元服天突になり居て蝦蟇につけ髮せしごとくなれば雞庵はあまりのことに興をさましばし呆回へり笑さへせず祐仙はいとほこりかになにとよく似合つらんはやく秋月氏へつれゆきねと只顧たのみけるゆゑ雞庵はとてものことに今十四五兩も騙收さんと計較居たれば祐仙がしかく月代まてしてしきりとせめはたるゆゑ一日〳〵といひのばし幾十の日數を過けるが一日祐仙清早より出かけて雞庵をひつたて今日はぜひとも秋月氏に引見されよとさびしく催促けるにぞ雞庵も今は逃るゝ語なくしぶ〳〵穿換して祐仙とうちつれだち一條戻橋の宿をはなれさらばまづ東山を逍遙てこそと伴なひゆきて四條の板橋うちわたり芝居側をあとに見なし祇園林を徐々と彷徨ありくに暫對面を見れば五旬ばかりの武士一個の小厮に草鞋挈せて南のかたより出來れば雞庵因果と口辷て祐仙にむかひあれこそは秋月弓之助殿よといふに出合頭に雞庵老このあひだはいかに見かぎりたまひし堰鼠のみちやきりけん絶て御尋もあらずといへば雞庵もこれに應じかれこれ叮嚀に寒温をなしつ弓之助かさねてかの宮城氏今ほどは御病氣も全快ありけるか這方は何時にてもぐるしからずかならず御同伴にて御入來あれといひける祐仙は適間よりしきりに雞庵が袖をひきて宮城阿蘇次郎これに候雞庵子はやく秋月大人へ引見られよとつぶやくも雞庵今さらなにとせんすべなく僥倖これに宮城氏病氣全快にて同道いたしたりやよ阿蘇次郎どのはやく秋月大人へ名對面あれと弓之助へひきあはすれば祐仙は武士の身ぶりをせんとりきみにりきみ衣紋を正し小生は宮城阿蘇次郎と申すもの以來御懇意をかふむりなん日外の御會しのをりはあやにくに所勞侍りて得參

上いたさず約をそむき失禮を申殘念しごくに候とさすが大内の御七の子にて藩士のつきあひに武士の口狀をおぼえ居しゆゑ後はしらずまづは假粧すましつ弓之助これを見るより大におどろきやゝしばし呆れしが世にはまたかくまて揃にそろひし醜漢もあるものかなとはや肚裏に八九分の不平を生じおぼえず冷笑てつや〳〵語をさへ交へず祐仙はしすましたりとしたり顔して雞庵に對ひかねて懇望せし秋月氏にはからず御意を得なにほどか悦ばしく候途中にてはゆるりと清話もなしがたし那方茶店にて一献をもすゝめてん誘たまへと强に招じければ弓之助いと不興氣なれば懶一懶に中村屋が店にあがり葭簀かくれに三個うち圓居て說話らふ雞庵はひとり心を苦しめいまや祐仙が馬脚を露はすかと手に一把の汗を握りいつか頬あかく耳ほてりほと〳〵針の筵に坐するごとく活たる心地もなかりけりやがて當壚ども種〻酒肴を拿來て排おく祐仙は上りたての青書生なれば十分得意の顔色にてひたすら東人ぶりをつくり弓之助へ盃せしていたらくはなはだ武忽に且野趣なることといふばかりなく手酌するとて涸たる銚子かたむくる袖口より匂ひ袋のまろびいてたるぞをかし祐仙は何がな弓之助への欵待にと日比おのが同士の醜態をあらはし田樂を串ながら犬に喰すとて王といへといひつゝ犬にあたへんとしてあやまりて膝に墜せしをば拾とりて喰など沙汰のかぎりにぞ見えける弓之助はこれらの擧動を見てまず〳〵謗みわらひ這奴は世にいふ名盜人の類ならん本領を試して困せくれんと即座に七言絶句を作り會面の情をのべ和韻を賜はるべしと乞ひければ祐仙もこの及第にはひしと窘迫りはやく韻字を次てゝ達者なるところを賣弄さんと焦燥ばせくほど趣向うかまずのつそつ悶搔といへども生得たる鈍漢このときたゞしきりに親をうらむこのうらみ何ごとぞなればおのれが親が才智を澤に產つけざりし腹立なりひたすら小頭をかたむけてくるしむことやゝ半時ばかりにしてからうじて作りあげ懷なる半紙に蝸牛の這たる痕のごとく滅多書してこは〳〵さしいだせば弓之助とりあげてこの詩を看に僅かに平仄のあふたるまてにて机ばなれせぬ未熟さ唐詩礎明詩礎たのみなる涕垂兒の作にもおとれりそのうへ墨蹟の拙きは宛も釘をれを蒔たるやうなり弓之助たちまち氣色を損じ遽に持病の疝氣の起れりと謝語さへそこ〳〵にしてその座を蹶たて佛頂面してわかれ去岡崎の宅に歸り氣憤々的書齋にとほれば渾家の水青は女兒もろとも出むかへて良人が氣色のたゞならぬをきづかふ弓之助は眼血ばしりいきまきつゝやよ水青つね〳〵卿とも噂せし阿蘇次郎めに今日はじめて出あひたり水青はよろこびてそれはまづ幸のことにはべりさぞかし美丈夫にてありつらん弓之助うちはらだちなにばかなることを丹波猿にひとしき下臈這奴虛名を賣弄き身の活計をせんと巧むなまけしからぬ大騙局り雞庵めも雞庵めわれに一盃喰せたりその證據はこれを見よこの詩の作りざまはとさん〳〵に罵しりいかにしても心を得ぬは祐包月心のともがらなりあの衆にかぎりすゞろなることは申されぬはづなるにかの大騙局めが人のしらぬ名歌妙詩を盜たくはへ己がもの顔に誇りしゆゑさばかりの衆もうまく欺負しは苦々しきことなりとつひになきはらたちなれば水青はほと〳〵合點ゆかずその詩をとりあげ見れば詩の意はいざしらずその字のかたちいときたなげなるにぞ良夫の慣りは理なれども眞の阿蘇次郎が書のさまとは驚と鴉のたがひなりこは必定いかなる奸者か阿蘇次郎に假粧て良夫を欺きしと推量せしかどあかしてはいはれぬ時宜なるに女兒深雪も肌身はなさぬ朝顔の扇を爹弓之助に見

せたぐおもへど宇治にてあひしは私下ごとなればひとりたゞ伎癢にたへて母刀自と顔見合頓口無言うちしほれつ詰旦雞庵岡崎へ省に來れば弓之助家眷に吩咐て内房へとをさず己は病と稱して遇されば雞庵すご〳〵立んとするを水青やをらひきとゞめ足下はきこえぬ人かないかに家公を欺負して假東西を僞賣られし無狀しかたなりと膝を叩きてねだりけるこの時了髮どもは右左より雞庵をとらへ耳をひくか爪かしたゝかにさいなむにぞさしもに鐵皮なる雞庵もほと〳〵面目を失ひその座にたまりかねて命から〳〵逃かへりぬさてわが家へ回り見れば祐仙待ぶせ居て片時も早く岡崎へつれゆけと催促たつれば雞庵は進退こゝに谷まれどもその色をも見せずなるほど秋月氏へはよく〳〵いひこみおきたれば何時にても訪ゆきたまへと一寸逃をいへば祐仙はこれをまことゝ心得いそぎ岡崎へ往て秋月が玄關に案内す弓之助これをきくよりぞゝ神たてゝいやがり留守をつかひておひかへしつ祐仙はいくたび往てもしかありけるゆゑさばかりの獃呆なれどもやうやくこれをさとり血眼になりて雞庵が許に來り百般ねすりごとを吐て雞庵がはじめ取逃せし二十兩に今度の賞標とを併て五十兩たゞ今返せとのゝしり腕をまくりあげて雞庵にむさぶりつき組みつ轉んづ雞庵はしたゝかに打擲せられながらやう〳〵に賺してさあらばまづ賞標の三十兩だけはあづけ先より取回し明日返濟まゐらすべしとなんなく欺負すましその夜に家伙たて賣にしてゆきがたしらず逐電せり憐むべし荻野祐仙うまれつきたる恐怯とはいひながらたゞ一場の色慾のために己が狗口をわきまへず一塊の天鵝肉を喫せんとしてしかく奸者の罠にかゝり前後五十兩の金子を失なひその業ならぬ冶郎頭に剃こぼてりこのこと已にかくれなく世の胡盧とぞなりにけるかくて下河原なる眞

の宮城阿蘇次郎はその所勞全たく爽やぎければさいつごろ秋月弓之助が月見の會にまねぎたるその好意を謝せんと袴外套など立派に打扮今日岡崎村をたづね秋月が玄關より物まう乞て宮城阿蘇次郎にてはべり秋月大人お宿にゐはさば御對面をねがひ侍るといひ入ける了髮淺香はこの聲を洩聞物の間より闚窺みて慌ふためきはしり入て奶々姐々にもつげしらせ閨門いそ〳〵としてよろこびける弓之助は聲をはげまし執次を叱りて例の仁がわせたか留守といへと高やかに叫びつ阿蘇次郎はやく聞とりそのまゝ口狀を云捨一禮のべてぞたち出ける程へて阿蘇次郎が下河原の僑居に肥後より脚力來り事あるによりこの書狀着次第このものめしつれ即日下來るべしといひ越しけるゆゑ阿蘇次郎慌てゝ僑居をかたづけ歸心矢のごとく夜を日についてくだりけるこの緣故は阿蘇次郎が父廉助早く死し獨の老母九死一生の病に臥露命旦夕に迫りしかば一門の人々を集めけるにあたかも和田三浦の支屬のごとく幼少の兒女までを算れば九十人に餘れる骨肉なり世にあるうちにとてそれ〴〵に記念分して後老母は一座を見ながしやがて末期の盃を酌かはしつこのあひだしばし座もしづまりて何となくうちしめりぬ此時兒もちの娘ども病床に居よりて母御前今はの際までいさゝかの逆事なく一個の孫子をもさきだてたまはず十分の榮耀果報いみじき御臨終なればこの世におもひのこりはあらせたまはじと祝なぐさめければ老母おもき枕をあげて今しもそなたゝちの申さるゝを聞ばわが臨終果報十分なりとかさおもはるゝならばこゝに一個の遺憾こそあれ乙の子阿蘇松は一度御國を出しより今にその安否をしらず互みに御上を恐れしゆゑ雁のたよりもたえはてたり良人とちがひわれは婦の愚痴未練いまこの座につらなりたる九十人の人々より零落ゆきし阿蘇松



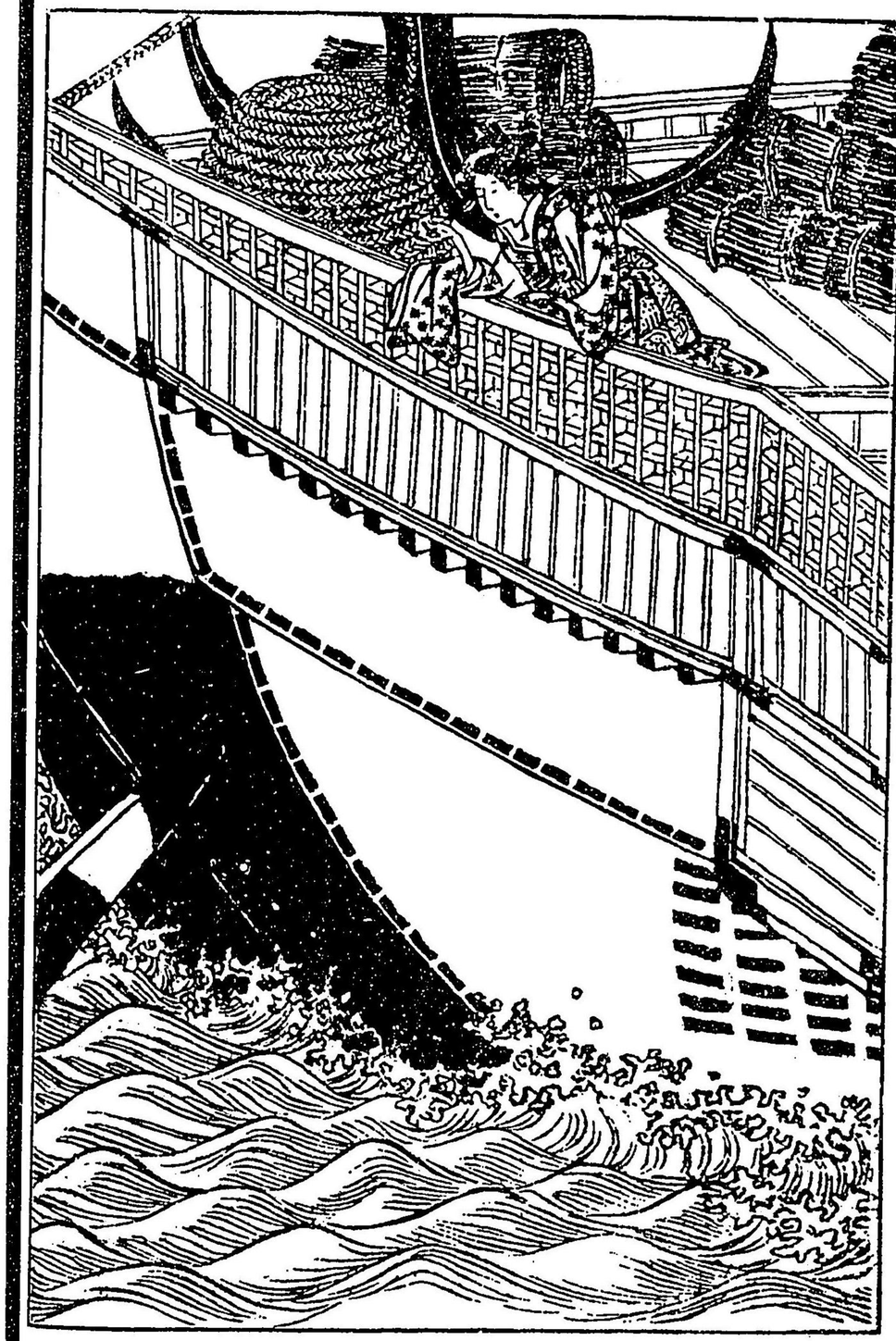


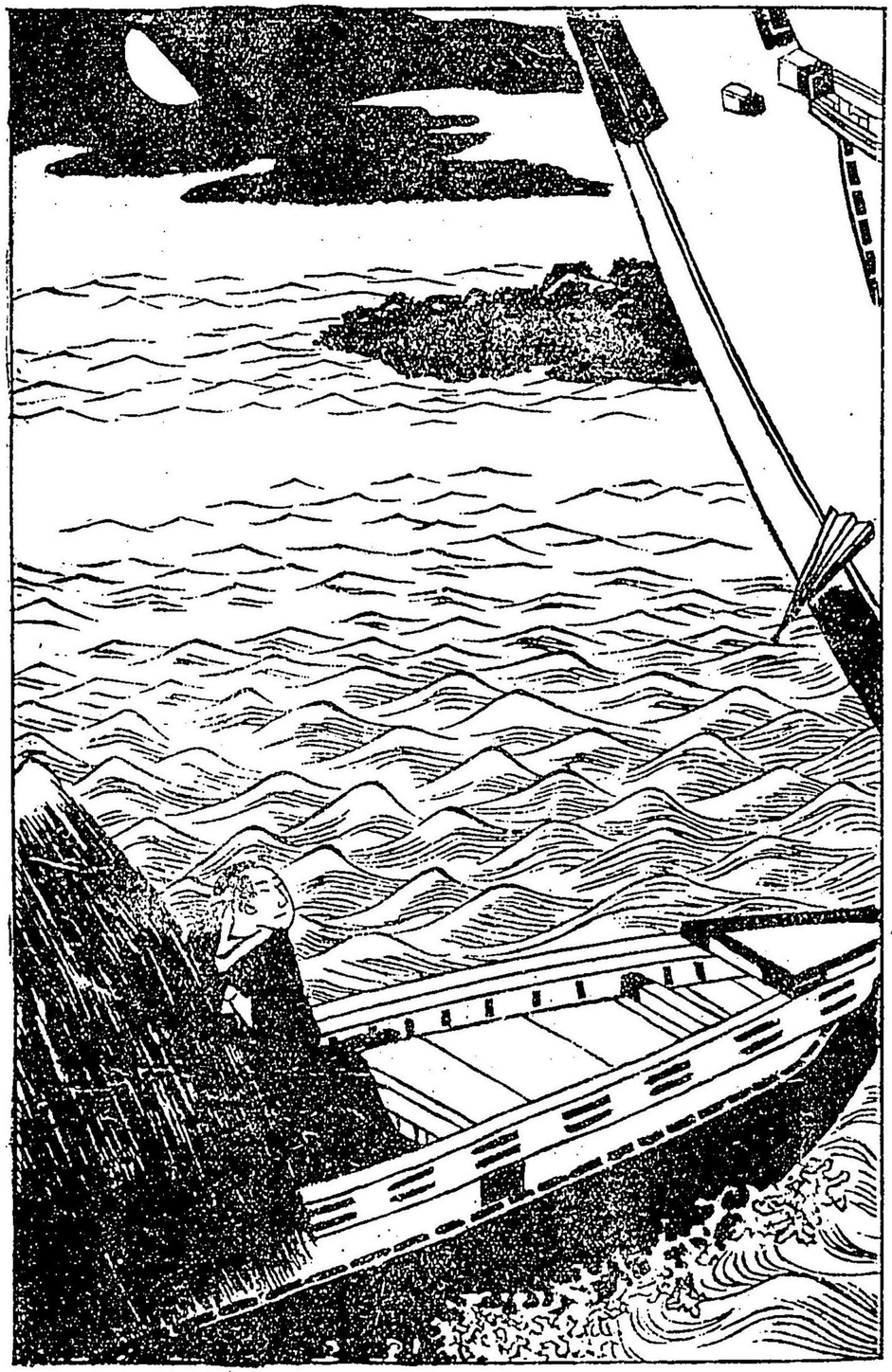
をたゞ一目見て死にたしとおぼえず聲をふりたて雨々と泣ければそは道理よといふよりも座にあるかぎり一同に悲嘆の涙にくれにける人々この動靜を見るにしのびず百般商議せしうへよき傳を央御側室雲居の御方へたよりてふかく愁訴におよびければ雲居の方きこしめしともにあはれとおぼされてこのことひそかに殿へうかゞひたまひけるに菊池殿仰すには渠がことは自盡代の追放なりめしかへすことはかなはぬぞよさりながらこれまでにも罪ありて他國せしものども世間は憚かりぬれども夜はひそかに潛び來よし無狀なる奴ばらなれば家老どもにまうしつけきつと査問におよぶはづなれどもおよそ國を治ることは重箱をばさゝらを用ず摺木にて滌ふがごとくす隅々はゆきとゞかぬがよろしきものぞとありけるにぞ雲居の方よりはやくこの内意をしらせたまふ一門のものども大いによろこびさてこそかく急飛脚をたてゝ俄に阿蘇次郎を呼下したるものなりさても宮城阿蘇次郎は取ものもとりあへず都をたちしが程なく故郷肥後の國に下りつき夜にまぎれて紅鶴林の莊院にいたり旅裝のまゝにて母の病床にうちとほれば親族並居たり阿蘇次郎母の枕側にちかづき阿蘇松にて候御氣色はいかにあらせたまふとのぶ母は聞よりこは阿蘇松かなつかしやと待こがれたるわが兒の顔一目見るより莞爾とわらひて眠るがごとき往生せりこの時人々の哀傷はくだ〳〵しければしるさず中にも阿蘇次郎は紅涙堰あへず聲を放ちて痛悲み喪のうちはおくふかき廟家の側にとぢこもり七々の逮夜をつとめ香花を供じて百日の間在すがごとく仕へあげさてしも餘波はつきせねど御攝の身をはゞかりまた故のごとく國をたちのき南の關を出ればとある山家ありこのわたりは筑後の地方なりといふそこに些の好のものにたよりて里人の兒どもをあつめ手習の指南

を活業とし母の靈牌を設けてこれを祀り這里より旦暮東のかた紅鶴林を望み迥かに双尊の墳を拜みぬとかくして一年の喪をつとめをはりぬればちかきにまた都へのぼるべしとその支度をぞなしたりける

第八回〔后月〕

かくて宮城阿蘇次郎春雄は筑後界の南の關の外の方なる春の町を起程日をかさねて長門の赤馬が關にいたり阿彌陀寺船を借て順風に颯てゆけばほどなく播磨潟明石の浦にぞつきにけるこのゆふべ後背の山よりはづかに扇ばかりの雲おこると見えしが刹那に一天かきくもりあだかも墨を潑がごとく一陣の暴風吹おろし波濤山のごとくおこり剩へ神鳴はためきてもの凄まじき光景なり時ばかりありて雨歌風絶て海のかぎりうちなごみて遠水長天と一色の淺みどりにはれわたりやがて一輪の寒鏡雲のたえ間より轉び出所は名たゝる須磨明石對面のかたは淡路島蛇のごとくに御飼阿波の眉山黛のごとくさやかなりこの時阿蘇次郎は舷により眺やりけるが猛然と想出しけるは往年宇治の螢狩にてはからずも絶世の美人に奇遇しがそのをりしもかばかりさやけき月の夜なりしが所はかはれど今月今日そのぬしはいかになりけるぞ青春は破瓜期なりし今比は齒をそめ袖をつめて誰が金屋の花とかなりけんその後手に入し一首の戀歌は「なかれての末のうき身をいかにせんおもかげ隔宇治の川霧」中たえ〳〵の霧たち人その名深雪と書たるを懷紙に卷そへて來せしはわれに眞情ありやなしやなつかしの都鳥こと問よしも波のうへにさしうつむけば襟もとに冷りとおちたる苫の滴におもはず仰ぐ後背は千石舶の水押の下原來前の白雨にかの舶に繫合ありしかと獨ごちつゝながめやる海一面はまさ〳〵和恰も盥の水のごとく松ふく風も音絶けり





こはいぶかしぬしは誰ともしらぬひの心づくしの箏の音はたしかに隣の舶なりと聞耳たつる那方には轉軸撥爪と三兩聲ていまだ曲をばなさゞれどまづ情ある音染にてまことに大絃は噌々として急雨のごとく小絃は切々として私語のごとしといへるおもひあり春雄はしばし聞入ておぼえずも大涙小涙ほふりおち身にしめ骨に浹て腸をたつばかりなりしが曲罷のちまた音なし只風清く月白きのみ春雄おもふやうさてもあやしきことかな今の頃歌はわれむかし三線の糸にしらべし朝顔の曲なりさるをいかなる人のいかなればかゝる船路に彈ぜしぞとそゞろうたがふ眞夜半はおもひほそりて居たりけりこの人是別人にあらず秋月弓之助が女兒深雪にぞありけるいかなれば今この舶にありて琴を彈ぜしぞといふにこれよりさき弓之助が故主筑前の國守太宰の少弐殿一個の淫婦お蘭といふものを愛せられそれが兄健卒傳藏をとりて國政を任せられしかば傳藏もと無頼の匹夫なるゆゑ君の虎威を借りて古參の人々を蔑にし不時の課役をかけて黎民を苦しむこれによりて御領内の百姓ども一揆を企て那方這方蜂のごとくに起り釉が浦の御城下につめかけ和蘭傳藏を賜はるべしと囂訴をなす御母堂紫光院殿の御心つきにて秋月弓之助を召回されこの大亂を靜むべしとの上意なり弓之助初國を出し時は再本國へは回らじとおもひしがこの弓之助いまだ兒姓だちの比御松囃の席にて祝言の謠をうたひ損じ已に罪せらるべきにきはまりしを紫光禪尼その比は御簾中にていと嫩やかに新羅の前とまうせしが殿へ御詫言仰せられさま〳〵と御執成あるゆゑ辛じて危きを助かりぬこの大恩須彌より高若海より深ければこの度は枉て御母堂の御内意にしたがひ忙はしく支度をなし岡崎の寓居は渾家水青に托してこれを完はせあとより下り來るべしと手筈をさだめ

おのれはまづ女兒深雪を具しすみなれし都をたちいて浪花の港口より國司の御手船に乘て下りけるがこれも前の暴雨に遇てこの明石の浦に泊居たるなりさてまた弓之助が娘の深雪ひとたび宇治の螢狩にて宮城阿蘇次郎を眷戀しがおなじ都邊に栖ながらふたゝびあひ見よしもなくそのうへさる奸人のためにさまたげらし剩へゆくりなくも筑紫へくだりゆけば何日またわが情郎にあひてましとおもひ忘るゝひまもなくひたすらあくがれつゝ心地さへ例ならずさきの白雨の怖さに羅ひき被てふしゐたるにやをらうちしづまり海面もなぎたりと船子どもの罵しるを聞いとものうげに起出しが艙口にさし入るゝ月光あかくして白日のごとく夜もいたく更て人みな眠りふしたるにぞありあふつま琴を搔鳴しわが情郎の記念なる朝顔の唄をしらべつゝ葬ひ屈したるとしごろのおもふこゝろをふくませてものあはれげに彈じけるに阿蘇次郎この曲をきゝをはりて且あやしみ且ゆかしみたゞその人のなづかしく僥倖と京へ官あがりにのぼる聲者と同船しゆゑそれが携る蛇皮絃を借てかき抱一年深雪が母水青が宇治にて彈る栴が香をいみじう妙にあやどればこの撥音を仄聞て隣舶なる深雪肚裏にや徹けん耳を側て眉をひそめ聞ばきくほどその人めきておもほえけりもとよりこの深雪は蔡邑が子にあらねど音を知こと比なくわが情郎の音染とは朧氣ならず猜せしよりやをら臥處をしのび出踉蹌して檣にあがり欄に倚て見おろすに恰好阿蘇次郎も苫おし刎て窺へばいよゝさやけき月明に偶とうち仰ぎて見かはせる顔のまがふかたなき深雪なるに深雪も春雄をそれと認むればこは懐かしといはんとせし後よりいつの間か弓之助女兒が帶を捉てはれ危なしとひき入れば深雪はやるせなくわが在ことをしらせんと記念の扇子をとりもあへず春雄をめがけて投りけるこ

の扇子あやまたず阿蘇次郎が顔をこすりおちてそのまゝ膝の上にこゝまりぬ阿蘇次郎はとしやおそしと拾もあへずおしひらき月にすかせばおぼえある朝顔の繪賛なりさればこそ猜せしごとくさきつかたの琴ぬしも深雪にてましけりとまず〳〵深雪が眞情をしり身にしめて感じけり深雪はたまさかのたいめに語もかはさず親にさかれしうきをかこち父が熟睡を待かねてやう〳〵しのび出來また舵樓よりさし覗けば怖さおそろしさもおもはず度と落音に阿蘇次郎は喫一驚して見てあれば深雪は三板に墮たをれて息もたゆるばかりの光景に阿蘇次郎慌忙飛のり抱さかゝへ還丹をふくませ多方といたはりければ深雪はやう〳〵に人心地つくより阿蘇次郎をじつと見ていとうれしげにうちまもり知しめすかはいざしらねど妾が名は深雪とて筑紫の浪臣秋月弓之助が娘にてはべるそも〳〵宇治の川舟にてふと眷戀たる赤繩よりその螢火は焦れねどこがるゝは妾が胸のうちにて月見會もいたづらにいたづきたまふ難面は月にむら雲花に風あだし媒人にあざむかれ種々のさまたげにあひしよりたゞ一すぢの赤繩におもひほそりて玉の緒もほと〳〵絶んとせしぞやいまだ枕はかはさねど貞女兩夫にまみえぬ操を露ばかりも憐とおぼし戀僠となりてたまひねと膝にひしとうちふして咽びいりつゝくどきける阿蘇次郎も深雪が心根をおもひやりそは道理よわれとてもいろに出ぬる戀衣はやかさねまくおもへども娶にかならず媒あり互に武士の家にうまれなでう不正事なすべきや我望を遂しうへしかるべき氷人をもちて表むきより申いれん無事におはして折を待れよはやく舶に回らせたまへかさねて環會てんとなだめすかして別れんとす深雪は恨の涙聲にてかくまでおもひしたひし身のたま〳〵あひてこのまゝにかへれとおほすは曲もなしあはれこの身をいつべきやはかならずはやまりたまふなと制する詞に深雪はおちゐ居直りていひけるはもとより緣をしりたる母なればかゝることにてたちのきしとあとにて聞たまはんによろこびたまふは治定なれどわらは恙なく君に從のくことをたゞ一行書のこさん硯があらばかしたまへといふに阿蘇次郎腰をさぐりて頭を搔南無三寶前つかたあはてゝ墨斗を海へはめしかこはいかゞせんと躊躇ば深雪はきくよりさもあらば今一たび舶にかへり書おきをのこしまた些の細敷をも携てまゐりなんと頭楫よりよぢのぼる阿蘇次郎に腰をおされからうじて裏に入わが臥處にいたりていそがはしく書置をしたゝめそのまゝ父が枕もとにさしおき起んとせしがまてしばしもしやまたこれが一生の別とならんもはかりがたし今はにたゞ一目せめて父君の寢顔ををがみ心ばかりの暇乞をせんものとやをら躙よりて見てあればこはかなしわれはたゞ戀

づくにもつれたまへもしもこのまゝ本國筑前に歸りなば笹虬之進といふものに合巹せよと無体なる殿の仰せのさふらふぞやたとひ命を失なふとも異夫に見え候まじとまれかくまれいざ〳〵はやくつれさせたまへとかきくどけば阿蘇次郎はいよゝ便なくおもへどもわれ今姐々をつれ退ば御兩親の恨をうけ世上の謗をいかにせんさなこゝろ短くおぼしぞ病ありともいつはりて期をだにのばしたまふうちには仕樣摸樣も侍りなんまづ〳〵舶にかへりぬとさまざまといひさとせば深雪はつと起ていかほどに申ても諾なひたまはずばぜひもなしさらばと一聲身を躍らせちひろの海へと飛いらんずれば阿蘇次郎阿呀て抱きとめさほどにおぼすことならばいかにものぞみにまかせなんわれ小節にかゝはりて秋月殿の愛子をば見殺しせんも不仁なり合巹はともかくもいかに汚名を蒙るともかく實ある情人をいかてつれなく見は

のみに憂身をやつしつね〳〵不孝に過せしゆゑ天の御罰や蒙りけん父君は衾ひき被ぎて臥したまへば御顔を拜むことかなはずさはらば御眼やさましたまはんいかゞはせんととつおいつ躊躇ながらおづ〳〵と蒲團をすこしまくれども何にもしらずして只すやすやと寢入たるその顔をつれ〳〵うちまもりあら勿体なや不義いたづらといふにてもなけれどおもふ郎にそひとげんとおいとま申て出ゆきさふらふ不孝の罪はゆるさせたまへあとにてさぞや歎きたまはんなごりをしやと聲をのみさすが別の悲しさにおぼえずかゝる涙の雨父弓之助眼をさまし娘が風狀心得ずとそのまゝ裳かいつかめばこはかなしやと娘は聲をあげよゝと泣いだすに側なる書置を弓之助とらんとす深雪はあはてとるより早く窓より海へなげ出せりこのもの音に侍女どもこは底事とたち騷げば船頭これに眼覺して水子どもを喚起しやをれ地嵐が出たは汐もよきぞはやく船出せと叫ぶ聲舟子はこれに激まされ慌ふためき働つゝエイヤンザト連聲して鐵指兒をおこしやをら布帆を拽あぐれば船はたちまち矢を射るごとく一瞬に走り去阿蘇次郎が乘たる小船とせつなに東西にひきわかれまたゞ良緣を隔ける

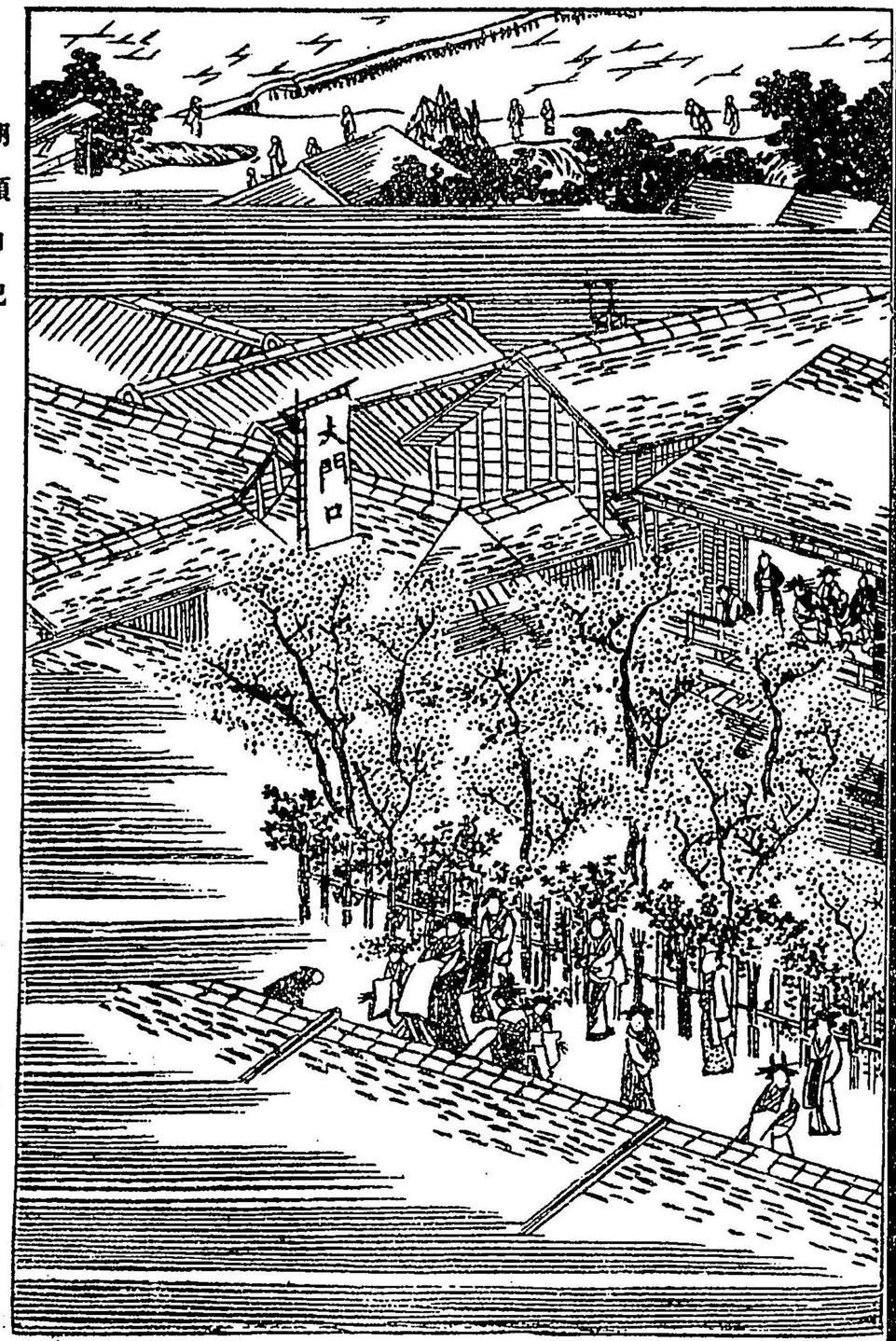
第九回〔踊〕

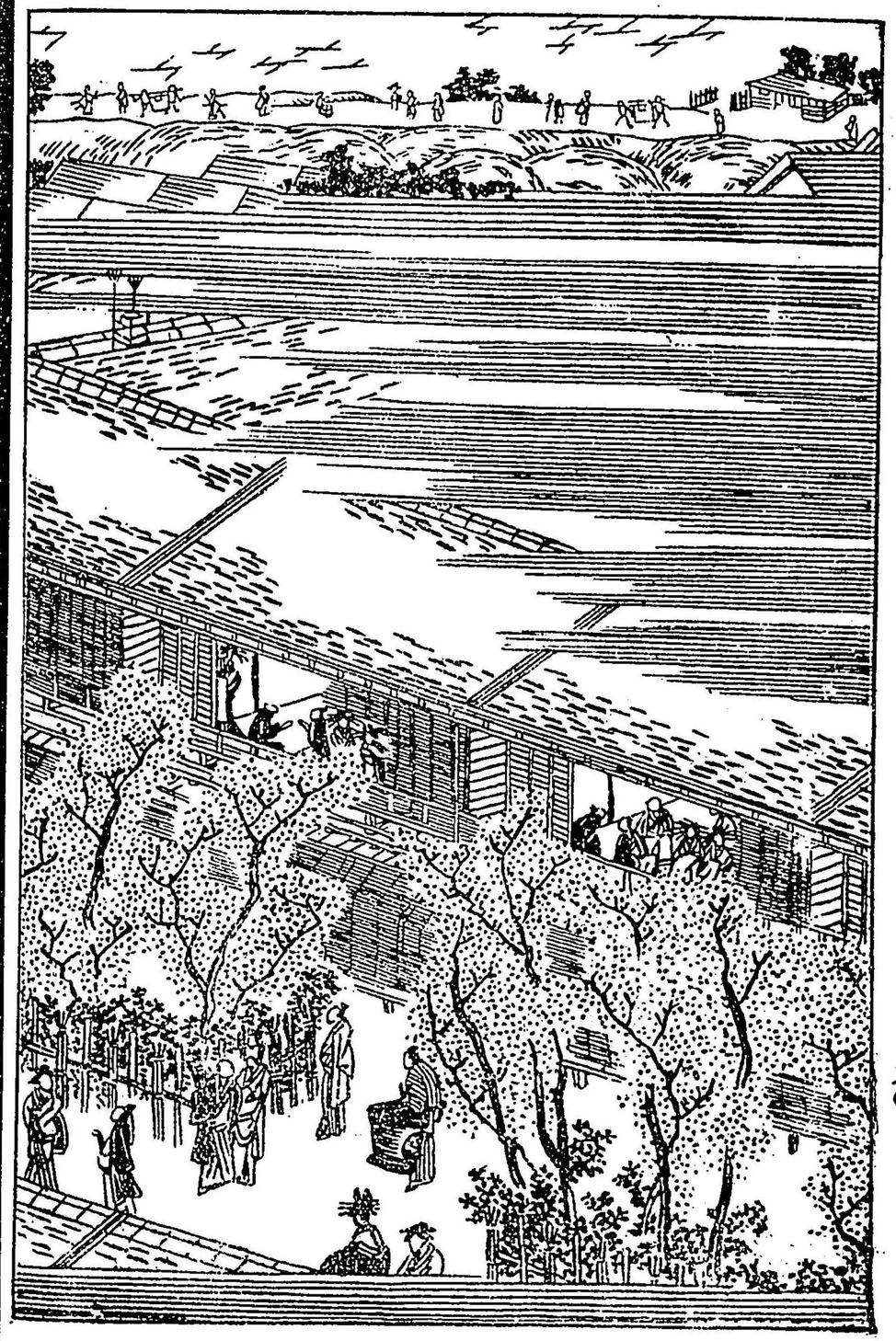
花は百日の好なく人に百歳の壽なしといへるは宜哉大内殿の儒臣駒澤了菴老病をうけてはやも奇特にせまりければ親屬を枕方に集合ていふやう我薄命にして實子祥乙が行跡よからぬを見きり長く勘當におよびてそのゆくゑをしらずこれ各しらるゝことなり了菴不肖なりといへども形のごとく秩祿をいたゞき二代の君に仕て輕からぬ恩命をかうぶり剩中老の席をも汚しつそもわが政事加談の職といふは戰場にては軍師の指揮するごとく治世の樞密を參判

なすことにて當家においては古來よりわれ一個にかぎり比なき重職なりかゝる箕裘を襲んずもの姪兒阿蘇次郎ならて外になしされど渠もと青雲の志ありて親衛を望む嗚呼の漢なればわが跡式を讓らんといふともなてうたやすく承引べきさるによりわれ死たりとも全然病重しといつはり急ぎ都より呼くだしこの遺書を祀せ各餘儀なく勘解相續せさせたまはりなば今しも目を瞑ぐともいさゝか憾はのこらじと叮嚀に咐囑しが程もあらず無常の風にさそはれてあはれ敢果なく黄泉の旅におもむきける去程に宮城阿蘇次郎は去ぬるゆふべ暴雨に沮られてはしなく明石の浦に船泊せしが夜ふけ人靜まり月いとよくはれたるを愛てあり。しが偶と隣船なる琴のこゑを仄きゝしよりはからずも秋月弓之助が女子深雪とめぐりあひ深雪が貞操のせちなるなさけに絆されたゞちにつれ遁んとせしをりからゆくりなくも深雪が船俄に蓬を拽あげて馳出せしゆゑたちまちまた西東とうき別れしてほいなく都にのぼりつき故の下河原に僑居たれども肚裏にはその人を忘るゝひまなく猛き武士といへども戀にはおもひよはるならひつねにたゞ怏々として樂しまず浩處に周防の山口より火急の消息して伯父了菴重き病に伏し息あるうちにいふべきことあり片時もはやく下來べしといひおこせたりければ阿蘇次郎は又しも席を暖むるにいとまなく恩ある伯父のことなればいと氣づかはしく思ひ取る物もとりあへずその日のうちに起行して旦暮逕をいそぎてゆけば程なく山口なる駒澤が邸にいたりぬ親屬眷族まちまうけて阿蘇次郎に對ひ家主了菴はや仙去たり故翁臨終に寫められたる一書あり和主に遞與くれよとの遺言なりと告ける阿蘇次郎聞もあへず双眼涙にうちうるみ忙しく遺書を披覽れば了菴代々主恩をかさね莫大の登庸に遇てかゝる重職を蒙りぬされども

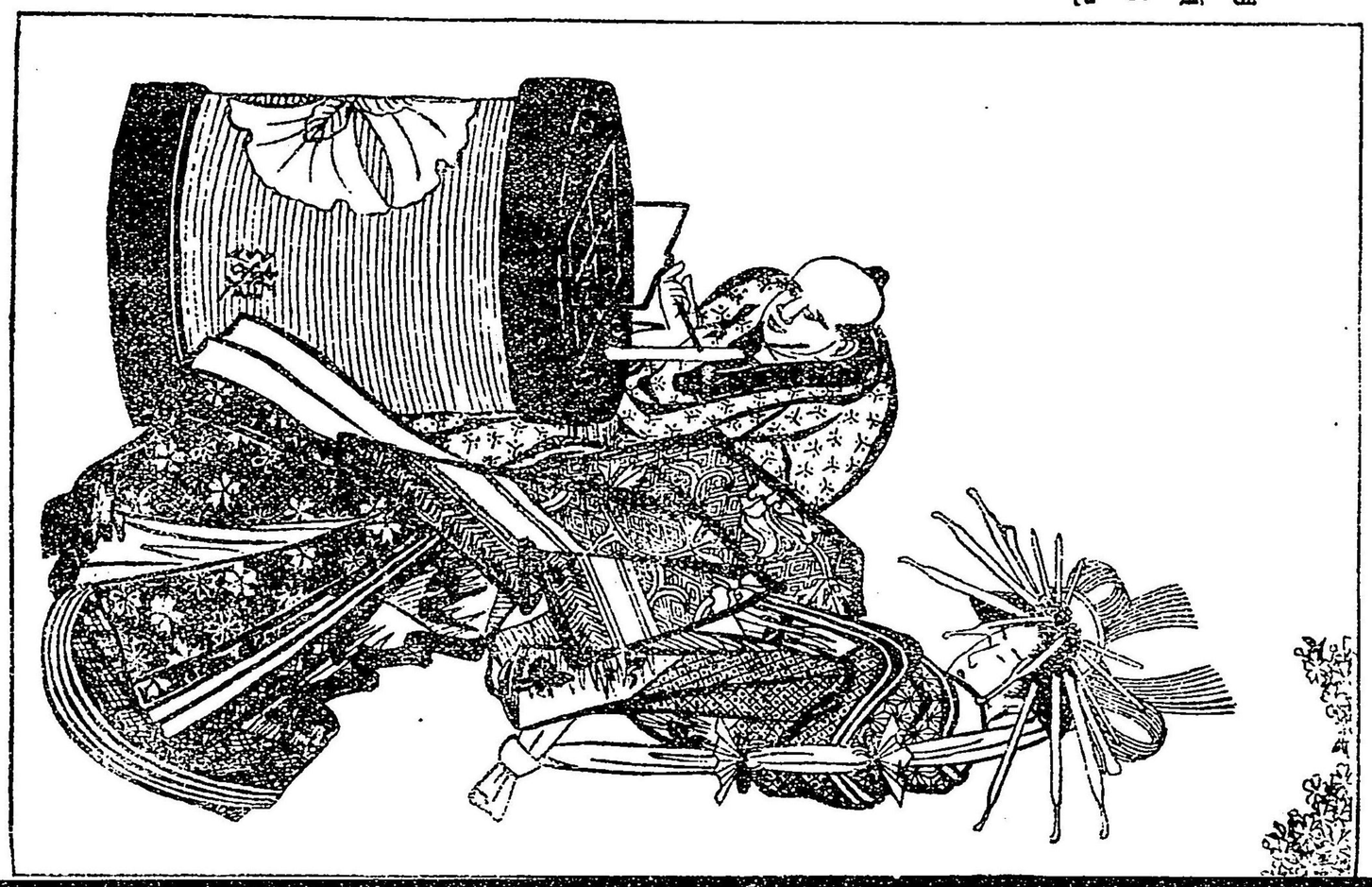
何一個寸功をも建ずして今徒に席の上に終つればこれのみ遺る恨なりあはれ汝曲てこの家督を嗣ぎわれになり代りて國のため家の爲に精忠を盡しくれよとふるへる手していとこまゝ〳〵と書たるにぞ阿蘇次郎もほと〳〵悲嘆をなし義理ある伯父の死後の托さても餘義もなきことゞもなり己が宿志を遂んとて強て推辭は道ならじと心を決して允諾ければ人々擧りて悅こびけるやがて一通の願書に了菴病危きにより姪宮城阿蘇次郎を急養子になしたき趣をしたゝめ親類の何某これを月番の家老にさし出しその執成をたのみけるにこの由家老衆より上聞に達せられしかば事故なく御聽ずみありて家督相違なく仰つけられぬ阿蘇次郎はこれより了菴の家を繼姓名をあらためて駒澤次郎左衞門と稱しけるいまだ中老席とは仰せ出されねど先規のごとく政事加談役にぞなされけるこれ全く次郎左衞門年弱けれども才學世に勝れはたその性の温厚の聞あるによれりとぞやがて次郎左衞門は父が喪を發し葬式祭祀など形のごとくとりおこなひ七々の忌もはてにければ日ごとに築山の館に出仕をなし奉公をぞはげみける次郎左衞門は養父了菴の遺言をば心骨に浹てこれを守りまさか君の御大事には一命を塵芥よりも輕じ無二の誠忠を盡さんと准備しぞ奇特なるもとよりこの次郎左衞門加談役のことなれば平生家老衆より政務のことを談ぜらるゝに職分のことなれば一々これを辯論するにその判斷はなはだ明白にて緊く道理にかなひまた人にすぐれたる卓識などもありけるゆゑ家老の面々大に我ををり其才養父了菴にも出藍て當世無双の壯佼後來は國器にもたつべきものなりといと賴母しくぞおもひけるされども次郎左衞門はいよゝ謙遜いさゝかも唐突たることをなさねば人の眼稜にもたゝざりけりかくて許多の月日を過しける後當主大内介多々良滿興朝

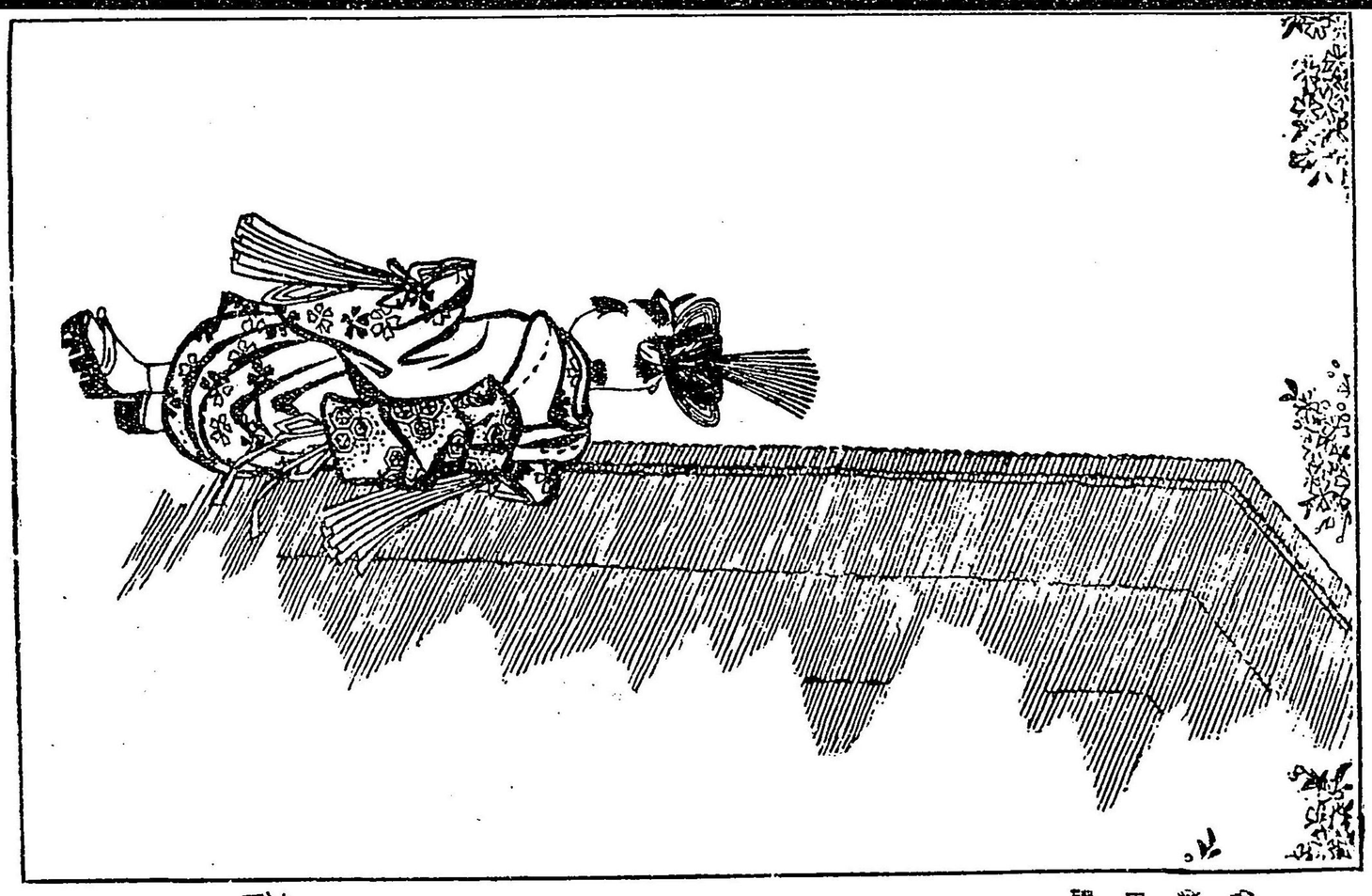
臣は往歲參勤して鎌倉に在せしが當時新大磯の柳巷第一の花魁松菜樓の瀨川といふものゝ艶色にまどひ晝夜酒色にのみ荒ませたまひ營中の御勤も懈がちなるにぞ誠忠の近臣どもかはる〳〵諫言を奉りけるにそのたびごとに總て御手討になさせられなをしもあら〳〵しき御所行のみ多かりけりこのこと仄かに幕府に聞えしにやある時管領上杉殿より大内家の長臣冷泉帶刀といふ者を召れ滿興殿放蕩のきこえあり事あからさまにならざるうち再應諫て行ひを改められなば珍重なり倘も其事募るにおいては數代聯綿たる家國には換られまじ早く儲君を願ひて介殿をば押籠おきてしかるべしと御内意を仰わたされぬ冷泉帶刀かしこみ承たまはりて退出しが周章することおほかたならずいそぎ本國に急書を下し管領よりしか〳〵の御内意あり事遲々に及びなば臍を嚙の悔あらん逸早く評定におよばるべしとの文言なりかくてこの早打寸刻を爭そひ馳つきけるにぞ當家の一族山岡玄番允を始とし家老中列座にてこの急書を披見るより各色をうしなひこは由々しき大事なりしかれば大評定をなすべしと忙はしく一藩中に令下て騎士以上のものども一人ものこらず惣出仕をなさしめ大書院には山岡殿を上座とし歷々の衆綺羅星のごとく並居たり藩士の面々格式に照がひて座を占さしもの廣間にも居あまり間ごと緣側まで人ならぬ所もなし大内家の大身なること是にてもしるべし月番の家老相良主馬滿座を見ながし帶刀が來書の趣を披露せ御家の安危この時なりたとひ小祿の衆たりとも御上の爲に忠義を重じおもふ所ありなば憚なく申見らるべしとぞ叙にける衆人これを聞より一同にはつと平伏せしがこれまて諫言せしものども盡く御手討に遇しと聞怖おの〳〵たゞ眉うちひそめ讓合のみにて默々として一言も發するものなしまた重職の人


大門口

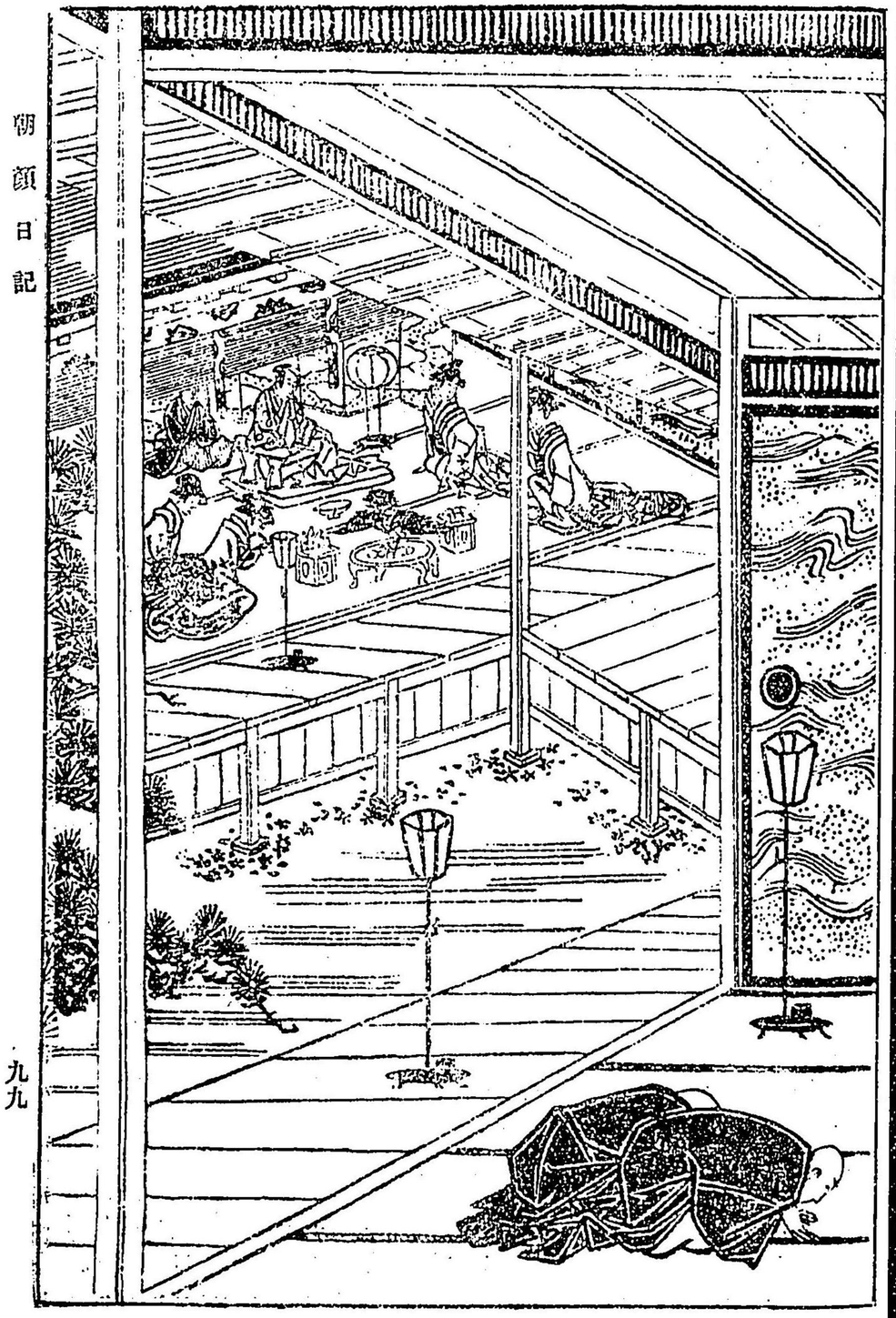


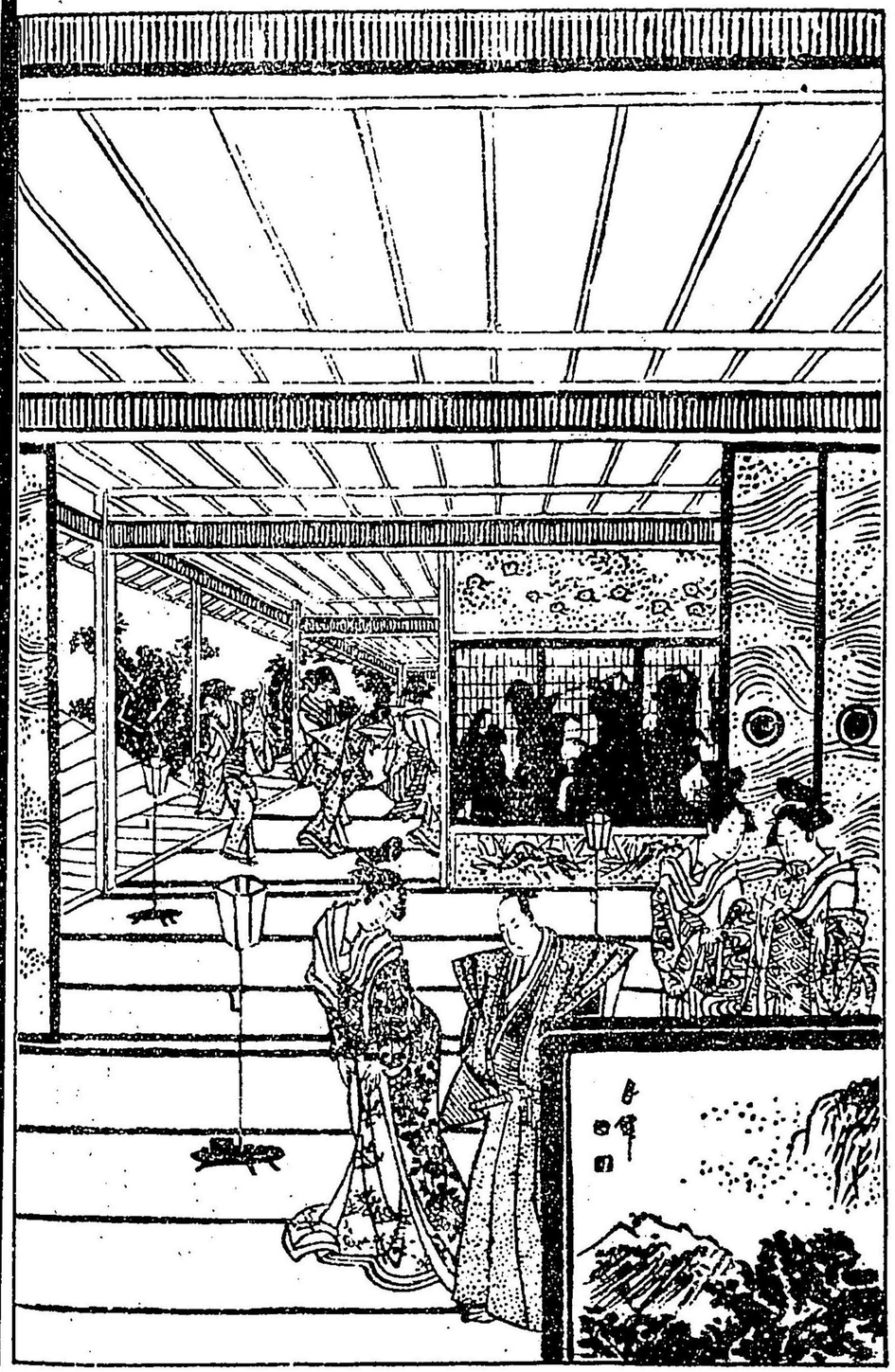
〻詮議區々なりといへどもいづれ今一應も諫言を奉るにしかずといふよりほかにさせる良策もあらざればまづその日の評定はいたづらごとゝぞ見えにけるかくて三日四日があひだうちつゞき例のごとく藩中惣出仕をなしけれども家老衆をはじめ異なる一語を出すものはあらざりけり駒澤次郎左衛門はわが弱年の分を省みさだめて夥の歴々の中には何とかいひ出る人もあらめと頓口無言てひかえ居たりしがいまだ評議さだまらずかくいたづらに日數のたちゆくことをもどかしくおもひこの時列を出ていふやう不肖の僕歴々の御前を憚からずさし出がましく候へども當家危急存亡の秋にあたり鄙衷あるを申見ざるは不忠なるべし殿さばかり放蕩に在ますとももとより聰明なる御性なればひたすら臣たるものゝ誠を盡いづくまても諫申すにしくはあらじ僕おもふ仔細の侍りて諫言言上やうの手段あればあはれ御ゆるされをかうふりいそぎ鎌府にまかり下なばおそらく仕課ざることは候まじと言葉を放つてまうしける山岡玄蕃允は胸に一物ありてかく殿の不行跡なる沙汰を聞より謀成れりとほと〳〵肚裏に悦を生じ己が嫡子を儲君に立まくおもふゆゑ今もし駒澤が異見を用ひて厥を鎌倉へ下しなば極てわが大望の妨なるべしとそらさぬ嘴脣をなし駒澤が語をくじきて殿へ直に諫言とは心得ずこれまて諫し者を手討ありしは幾個といふことをしらず今また諫んとせばいたづらに激怒をまし損ありて益なからん十全の奇計もあらずして古老の人をば閑おき和主が分際にて諫爭などゝは傍痛しひかえめされとさゝゆれば次郎左衛門うちかしこまり仰ごとく僕ごときその任にあらずといへども今度家督の御禮と稱し君邊へ近づきさへいたしなば施すべき一術のはべるからにあながちに僕へこの役仰つけられかしと丹誠面にあらはれてしきりに申請ければ相良主馬これに同じ駒澤氏が思慮あることは各もしらるゝとほりなりさればその望にまかせこれを下向なさしむとも萬に一失もさふらふまじ主馬が腹に代てうけあひ申各これに決せらるべしといふこれをきいて同列あへて拒むものなく異口同音にこの議至極よろしかるべしと諸なひけるにぞ玄蕃允もせんすべなく多分の衆議に悖りがたく澁々承引て評論頓にさだまりぬこれにより相良主馬は忙しく同僚連書の返簡をしたゝめ使を馳て此由を在鎌倉の同僚冷泉帯刀かたへいひやりけるこの時また山岡玄蕃允もわが企叛の荷擔人岩代瀑布太といふものに密書を下しぬさるほどに大内殿の在せる龜が谷の上第にはこたび駒澤何某といふもの殿へ諫爭の爲とて近々下向せるよしその風聞かしがましし近從の人々いちはやくこのよしを殿へ言上げにければ暴性烈火のごとき大内殿近從の語きゝもあへず勃然としふるひ怒らせたまひ什麼の次郎左衛門とやらんなまぬかりたる小冶郎め予に向つて異見などゝは奇怪のいたりもし一言にても傷觸を申さばたゞ一刀に討放しくれんと息まき高く罵たまふ近從頭岩代瀑布太御前にむかひ傳ひ承はるかの次郎左衛門と申ものはなまけしからぬ白者なりともしも御目前にちかづけたまはゞいかなる椿事をも仕出しこよなき御恥辱をうけさせたまはんさあらばひとゝほりの御手討などにてはよも御憤氣ははれさせたまはじしかじ渠參着していかほど拜謁を願ふとも絶て御値なからんにはとひそかに山岡がいひ來したる密書によりかくなん詞を工にして讒言をぞ搆へける大内殿は天のなせる英雄とよばれきはめて怜悧御性なれども古來より名將も色には惑たまふならひ況て麴孽てふものゝ精神を狂はしたてまつり辯才また諫を拒に足總ての人を蟲虫ともおぼしめさねば今かく瀑布太が



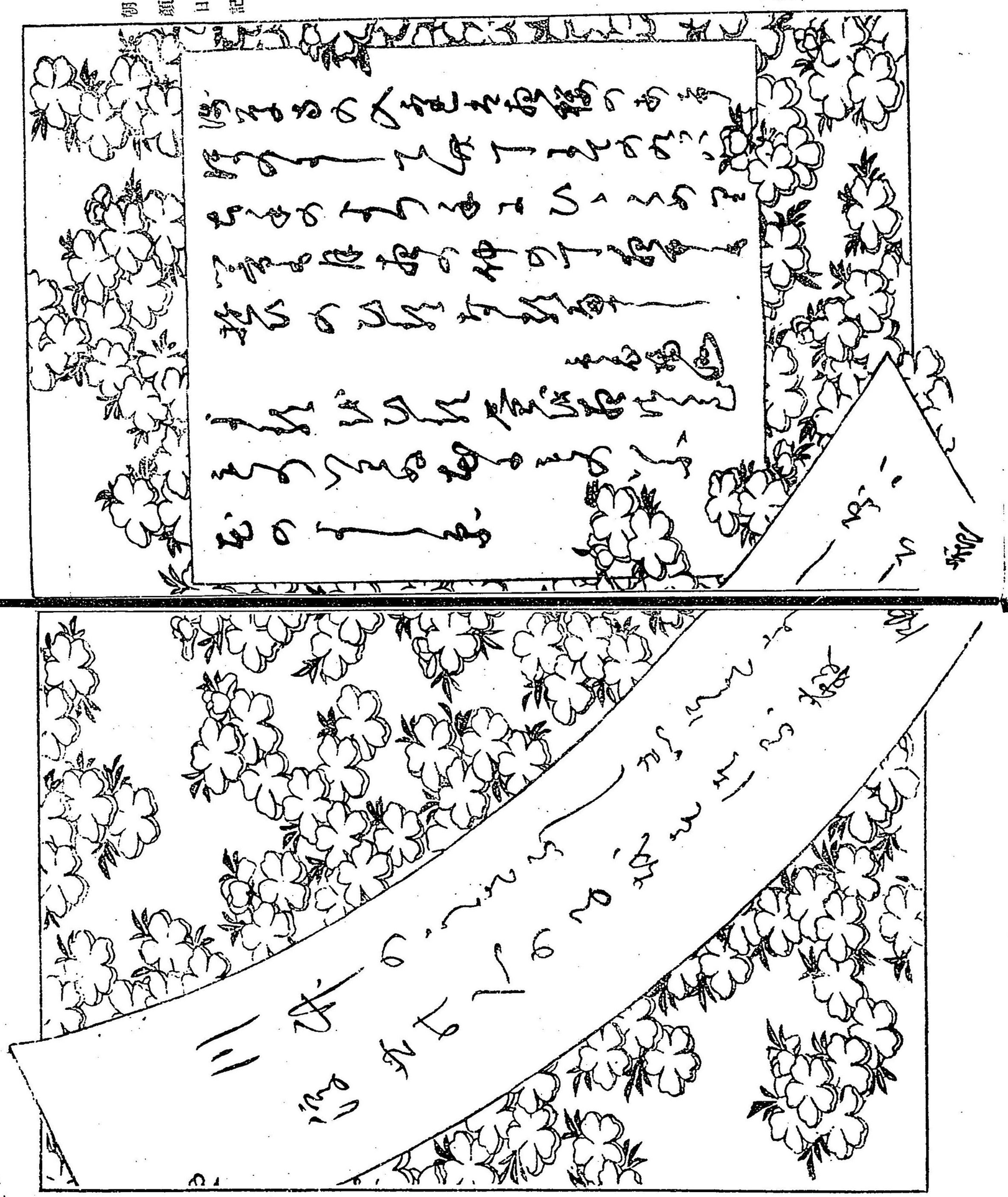


激燒るをうべとしいかさま汝が申すごとく次郎左衞門の匹夫下郎見もなか〳〵眼の汚汝等しかるべく計へと仰すにぞ瀑布太ほと〳〵笑をなし仕すましたりといさみける日あらず駒澤次郎左衞門鎌倉にくだり由居が濱の御中屋敷に落つき家老冷泉帶刀に對面をなしよろづ示しあはすことゞもありて直に執謁をぞねがひける殿には岩代瀑布太等が讒を信じ一度も召るゝことなければさしもの次郎左衞門もせんすべなく今日明日と晩ていたづらに一月ばかりを過しけり帶刀ふかくこれを愁ひひそかに次郎左衞門を招ぎていかゞせんと商議をなせば次郎左衞門いふやうさあらば御近從にたより如此々々はからひたまへとさゝやきける帶刀これを聞てはなはだわが心に合へりとてそのかたざまなる殿の内執事湯淺勘兵衞を呼よせ次郎左衞門が申せしことを口寫に吩咐ければ勘兵衞心を得て詰旦御前に出小臣前日狂がる巷說を承はりつそは先頃君を諫め奉らんと廣言を放ちてまかり下つる駒澤次郎左衞門度々執謁を願へども今において御値なきは君全く渠が鋭氣を嚇れたまふ由なりと彼所此所にて流言ものゝ候よし相公の御勇氣にも似げなく燕雀にひとしき一個の駒澤縱令緩怠なることを申出すとも只御一句の下にいひふせたまふべししかしこれまた煩擾におぼされなば御目わたさるゝやいな一言もいはせたてず威嚴を示し即座に追黜たまふときは渠もといかなる巧を宿搆居とも支度たちまち相違して鼠のごとく逃去り侍らんさあらばいといたう心地よくはべらんと語の裏に猛勢を含迂遠しに激ましたてまつりければ大内殿つく〳〵聞召れいかさま本府にて家隷も多かる中に渠一人抽んてことさらいまだ弱冠の身にして予が諫言をなさんとはさて〳〵斗膽奴なりさらずばまた世間をしらぬ井の蛙向ふみずの奴才め必竟武邊の大体をもわさまへねば大國の主が逸遊を驕奢のごとく心得つらん好〻渠を呼出し女どもに大戲樂させて肝を潰させ場羞をさせて弄東西になしくれんと近臣に命られはやく准備をいそがせたまふこれによりて奥女中三十人生藝者三十人熟藝者三十人併せて九十人の美女をすぐりいとみやびやかなる一樣の衣裳をさせて千鳥が崎なる御別莊において大戲樂をぞ催さるはやその日にもなりければ廡には花燈を點し羅ね緣側には狸々緋と綠羅紗を二條に布わたし梨園の子弟は片側に並び居て吹彈に妙をつくさしむ殿にはかの駒澤次郎左衞門を黎明より召よせて小書院にひかへさせやゝゆふべにちかづきて戲樂をはじめさせられぬさて九十人の戲兒どもは總て嬌艶に粧ひかざりおの〳〵綾羅の袖を飜し身の輕きことは蝶燕にもことならず次郎左衞門が誥居たる座敷を輪をなして舞環つ絲竹の調はそゞろはしくも耳を悅ばしめ戲場の飾は花やぎて目もあやなり大内介殿はいかゞおぼしけん戲樂を半に息させて次郎左衞門を御座の間にめさせらる大内介殿はかね〳〵次郎左衞門とやらん何奴なれば予が猛威を冒して異見をせんず不敵ものいかなる相貌なるにやと見まほしくおぼせしうへ女中ばらはさらなり戲兒は戲服のまゝにて殿の御側に稻廡のごとくかしづけるが皆いひあはせるがごとく名にきゝし次郎左衞門が手姿を見んとわれ一とこぞりよりぬやをら駒澤次郎左衞門膝行にて御眼前にまかりいて敷居一ツを隔て額をつきてうち畏みつ内執事湯淺勘兵衞奏者として駒澤了莅が躬次郎左衞門と稟あぐこのとき殿は夥の女どもとゝもに瞳をさだめて襟はせたまふにこの次郎左衞門生れ得て容貌美麗に氣宇軒昂見えてその人品のたをやぎたるにつよき心をしひてくはへたればなよたけの心地してさすがにをるべくもあらず加旃ずその擧動の瀟洒なるはさらに





て今日の拜謁に打扮たる長上下の着やう小袖の染色といひしたてざまの通なる髪かたちの今様にいみじう榮ありて何處に一點の醜態なしかゝれば殿をはじめあるかぎりの女中たちしばし眷戀て肚裏に十分の愛慕をさへ生じけるされども殿は早追たてんとおぼす御氣色なるに中にも專房の婦人そと殿の御袖をひきて今すこしちから召させたまへとさゝやけば殿もまた聽と御覽あるべきおんしたごゝろなれば次郎左衞門ちこちこうと尻聲高く叫せたまふ次郎左衞門いさゝか怖るいろなくやゝつゝしんで頭を擧ればあたりは銀燭點し羅ねて白日のごとし女中がたはしきりに御盃をすゝめたてまつれば殿にも次郎左衞門が進退の閑雅たるところおのづから御心にかなひ御顏ばせやゝやはらげて御きげんうるはしくやをら大觥にてめしあげられそのまゝ次郎左衞門にくだされける次郎左衞門いや〳〵しくこれをいたゞきなみ〳〵と一盃つがせたゞ一息に乾々淨々と飲ほしければ女中たちはこれを見てわれしらずも微笑ぬ殿はこのありさまにいよ〳〵興せさせたまひ次郎見事おさやうと仰すにぞ次郎左衞門ハット應またしも了鬢どもに一盃もらせまた一息に飲ほしける女中達はどよみあひてざゞめく殿はかさねて次郎左衞門汝は筑紫の產なるよしさあるにや次郎左衞門かしこまり正是上意のごとく鄕貫は肥後の菊池にて侍り仔細あつて國を去只今は伯父丁花が家督を下しおかれ不思議にも君臣の因をなし奉り感佩造化に候と聞えあぐれば大內殿なるほど汝は儒者の孩兒さだめて頭巾氣なるものならんとおもひしが今日の打扮はなはだ風流たり折ふしは遊里へも往つらんな次郎左衞門うけたまはりいかにも御意のごとく在府のつれ〳〵に伴にさそはれ深川の妓院にまかり候ひしがおほよそ喜瀨川と申處は日本一の花街に侍り那方なる洛陽店の夜珠といふ女に馴染をかさねさふらひてこの衣服もその夜珠がといひさし又佶となりて俛けば介殿莞爾と哂はせたまひ次郎左衞門くるしからぬそのあとまうせはてさて面を上よその夜球とやらが何としたるぞ次郎左衞門ます〳〵慇懃に双手を突小臣かの夜珠と始て一座仕つりし時かれが申はべるには郎は山口の御藩士なるに郎の御主大內介樣は鎌倉一の風流客と稱れたまふその御內にてありながらこの打份は何ごとぞ奴に任せたまへと賴母しくまうすに從せよろづかれが計ひになり今日の衣服もかれめが截縫て候ひささてしも喜瀨川の遊君ははなはだ深切に情あるものに候といとほこりかに悠揚げてほと〳〵感服たる面もちなり女中たちは袖打掩ひて笑顏をかくせば大內殿肩を聳せ御聲はげしく汝獨り信だちて喜瀨川ばかりを日本一と稱贊こそ旁痛きことなれもはや大磯の景氣は見たるか次郎左衞門回答けるはいまだ大磯は一覽仕らず候へどもおよそ女の情のふかきことゝその所の繁花なることは世にまた類あるまじく小臣はじめてこの地に下り駭き入候と皺面つくりて叙にける大內介殿しのびあへず呵々と笑はせたまひ汝は田舍より下りてやうやく昨日今日いまだ大磯の大廓を見ぬものからさいふも道理もし見せたらば何とかいはん褒る語もあらじいざさらば今よりめしつれ往んそれはやくと近臣等に吩咐たまへば昵近の人々いそがはしく供支度をなせりそのまゝ御庭さきなる水門をひらかせ美をつくせし御座船に召れ次郎左衞門を左右にかしづかせて直に大磯へといそがせたまふかくてはや千鳥が崎を後になし三叉を斜に見ながしたまふその絕景いふばかりなし殿には次郎左衞門鎌倉はじめてなれば案內をもしらじと御機嫌のあまりこの舟行の雄手雌手なる名勝どもをおちもなく指點していひきかせたまふ次郎左衞門あ



れは二州橋とて納涼にはよきところぞ其處は首尾の松東橋といふぞ向かふに見ゆるが向島なるぞ河西太郎待乳山關屋の里淺茅が原鵲の森五百崎牛の御前あれなる隄に鳥居の半より上あらはれたるは見巡の稲荷來方に駒形堂あるををしへ遣せり這方の塔を見よあれこそ名高き淺草寺なりさてこの駒形にておもひ出しつ

君はいま駒形あたりほとゝぎす

こは大磯の遊君與州が嫖客を慕ひて口號たる句なり傾城といふものはげに優しきものにあらずやとなほ飽ずしも長々とものがたらひたまふほどに早御船もつきたるにぞ殿は次郎左衞門を從がへ三谷渠より上陸せたまひ土手八丁を歩行たまふ交加四手の聲は正しく歸雁のなきつるゝかとあやまたれゆき〳〵て衣紋坂をこえ見かへりの柳がもとよりはや大門口に入たまふ次郎左衞門毋胎を出てよりはじめてかゝる仙境にいたりしゆゑ且驚き且呆れて肝つぶれたる形容なり七座の大院は世に高くきこえ虛と實の仲の丁諸わけ手くだの情しる吾嬬女郎のはりつよき意氣地をくらぶ京町や今宵は誰と伏見町新町 角町 めぐりゆけば水戸尻の燈籠はるかに仄みゆ誰や行燈かげあかく横町の小茶屋には江戸素搔の聲かしがましこのごろ抜群花魁には舞鶴樓の頂山舞鶴三浦樓の高尾は清客にも名をしられつそのほか角の玉屋の薄雲なんど呼出しの搖錢樹かずをしらずこれ等の姉妓たち支那の和朝の綾錦を身に纏ひ小褄かいとりて新艘妓雛をひきつれつゝ己が記紋の大提燈を前に點させ八文字を蹈て金蓮をすゝむこれにめでまどふ嫖客はゆくさきをふさぎて道もさりあへず次郎左衞門はしばらく殿にはぐれてとある格子にたちよりさし覗ば花のごとき美人滿々て蘭房のかたより

若水はやきくるま井の。めぐるくる〳〵としの

あさ。こゞのまゝなるみだれがみ。

と一闋の河東曲を唱たるはしらず何等の人なるにやその聲妙にいとめづらし大内介殿はもとよりおん潛行に在ませば次郎左衞門と近從少々めし具せられ大磯の仙窟をなごりなくつれまはらせられ廳てまた御宿房なる松栄屋へ入せたまふもとよりこの院子はすぐれて繁昌せしゆゑいち早く籠子おろしありて店のさまいとしめやかなり殿の御愛妓瀨川といふはいまだ私下の世話の頃より賢氣なる粉頭にて生れ得たる國色は一咲百媚の麗姫なり瀨川はとくより待まうけ妹妓はさらなり夥の藝者どもを洞房に集へて唱はせ舞せ百般趣きある遊どもをなし大内殿を欵待たてまつりぬ其ところのさまは伽羅の柱に水沈香の床縁なり上頭には明の仇英が密 栄 せし一幅の金谷園の圖をかけつ玉の瓶子には名もしらぬ珍花を 挿 み火鼠の皮子安の貝こそなけれ琴棋書畫の調度あるは和歌の書卷どもを棚にかざりてうづたかく茶香の具は七寶をちりばめたり盃盤の類は總てその時代の高蒔描綠染青磁器もおほくは應天府交趾の產にあらざるはなしさてまた麒麟の膸天鵝の肉こそ見えわたらね山海の珍味を盡し美酒は新豐にも優つべしことさら金碧の屏風は燈燭に輝耀あひて見るにまばゆくほと〳〵喜見城の樂もこれには過じと見えにけりさしもの次郎左衞門この大繁花大繁富を看るよりも只あきれにあきれてしばらく語なし殿はこの動靜を御覽じ次郎左衞門いかに喜瀨川とはいづれか勝れる次郎左衞門ひれ伏して恐れ入前には小臣眼界狹小してわが日の本にかゝる極樂國のあることをしらず喜瀨川のみを遊處の最上なりとこゝろえ誤まち過當のことを熟あげ千悔およびがたく候 とふかく慚愧していと面目沒風情なり殿は渠が徹底感服せし体なるをこのたびこそ渠めをいひふせたりとこよなき御滿悅と

ぞ見えさせたまふされども殿の御心には次郎左衛門しかく才あるものなれどもいまだ煙花の情曲などはうとかるべくおぼせしが酒酣なるにつれて次郎左衛門座配をなして興を添ること不文不武有趣出奇間をあはせぬしかのみならずその性もと温柔なるに吹彈歌舞の雜藝といへども一個として精熟せざるはなし正にこれ天のゆるせる才子といふべしこれによりて殿はさらなり瀬川をはじめ座にあるかぎりは二なき風流士なりとてふかくめて慕ぬ次郎左衛門かくまて殿の御心にかなひしゆゑいつとなく御側去らずとはなりにけるまた烟花のものどもゝ一日としておもひ出さぬことなく殿大磯へ入らせたまふ時自然次郎左衛門御供せぬをりは藝者どもまてはなはだなつかしがり擧て殿にうちむかひ相公次郎さんはへとうかゞひけるとなんかくて次郎左衛門は遂に日の出の出頭となり殿にも今は次郎左衛門なくてはとおぼすほどの寵遇なるにぞ近從の侍ふかくこれを猜みいかにもして御側を遠ざけんと多方計較をなして悶搔といへども古今獨歩の人傑とよばるゝ次郎左衛門その勤るところさらに一點の破綻なくつねに殿のおぼすことはおぼかたいまだ御意なきうちにさとりほと〳〵癢さところに手の屆くやうに物しけりまた花柳へ嫖蝶たまふ時は次郎左衛門奇異不思議に新しき趣向をおもひつき種々様々と座をもちけるにぞなまなか百千の幇間拳頭を集合てもたゞ一個の次郎左衛門が風韻におよぶことなしされば大内介殿は霎時も御側をはなしたまはずやがて一の侍臣とはなりけり

第十回〔文〕

一夕大内介殿は松菜樓にて大燕のあそびを催され宴はてゝのち花魁瀬川が洞房へいらせたまひ次郎左衛門に命ぜられ渠が手つけたる新飜の手事を一張彈させて瀬川が膝を枕とのの時次郎左衛門瀬川に對ひ殿にはうまく睡せたまふかゞ瀬川うち點頭つゝこは〳〵手をあてゝ御鼻息をうかゞひいとよくおしづまらせたまへりといふ次郎左衛門は三絃子をさしおき何かはしらず一通の文めく物を懐よりとりいだしこれを瀬川に手遞與すれば瀬川はにつたりとわらひてこれをいたゞきけるを近從頭岩代瀑布太隔房よりこの擧動を見つけしかば明の日竊かに殿へさゝやき駒澤瀬川と密通せしとおぼえ候その緣故しか〳〵なりと言上せしかば殿もほと〳〵不審おぼしいかさまおもひあはせしこともあるぞ予那里に臻るごとに次郎左衛門をめしつれざる時は花魁ども極て叮嚀にたづね問り仔細こそあらめ汝まづこのことをかくしかならずしも色にあらはすことなかれとふかくいましめおかれけるまた一夜例のごとく次郎左衛門に一張彈させて瀬川が膝を枕とし御鼾聲雷のごとく寢たる狀して覘がひたまふかくとは夢にもしらずして瀬川は殿の寢息をうかゞひ袖より封ぜし文とうて次郎左衛門を見て媚たる文をおよびごしにさしいだせば次郎左衛門もまた懐裏さがして文とり出し互にこれをとりかはす登時殿は瀬川が文を取んとさしいだせしその織手をしつかと捉せられやをらつと起たまひてやをれ不義もの見付たとさけばせたまふ御聲の下かねて手配ありしにや近從どもばら〳〵と踊出次郎左衛門をおつとりまく次郎左衛門は手ばやく文を燭にさしつくればそのまゝばつと燃たちけり上意とこゑかけ左右より捕にかゝるを陽炎稻妻神出鬼沒の活伎に殿は忿の御聲するどく次郎左衛門手對するかとおしかりあれば次郎左衛門ハッとうづくまり全くもつて手對などゝは勿体なし小臣不義の覺なき故申わけせんそのためといひつゝうしろに手をまはしみづから囚のかたちをなせ

ば人々をりあひ擱止たり瀬川はよゝと泣たをれつ殿は御眉逆だち御眼おどろ〳〵しく誰佩刀を拿來れと息まき喘ぎて近從を喝し燭臺をちかづけさせ奪せられし文おしひらきすら〳〵と覧ながしたまへばいとも優しき水茎ならでコハいかに龍篆鳳章眞名の文字一丁一畫讀下らぬ海の外風の唐山文章なりさしもの殿も當惑あり呆れてしばし語なく顧れば夥の人の前予大國を治る身のこれしきの文をさへ誦得ざりしと誚るゝ世の人口こそ朽をしけれとおぼえず御顔赧められしがさはあれまたいかなる隱語をなし密語を通ぜしもはかられずとなを疑念の解たまはて幸とありあふ識者を召いそぎ讀しめたまひける御側儒者安積潤藏仰を畏み文をとりあげて讀悶すにすなはちこれ繪の島にあそぶ道の記にてその絶景のおもむきを書つらねたるのみにして別に何たる仔細なしまた燒殘の文を見るにその篇全からねども飛鳥山にて花を看の詩なりはじめの文には次郎左衞門が添削とおぼしく處々に朱字の書いれあざやかなりこのとき瀬川涙をぬぐひてうちかしこまり次郎ぬしにかぎりいさゝかも漫行しきことなければ科のあるべきやうもなしさいつごろよりこの大磯に漢文をかき詩をつくること流行はべるにかゝることは殿の好ませたまはぬをしりながら妾をはじめ姉妹どもなべてこのすさびをなんものしさふらふ次郎ぬしは世にまれなる博士なりと鎌倉武士の口質に申侍るそれゆゑこの大磯中の妓ども次郎主の門弟とならぬものもなくおの〳〵詩つくり文を書てその草稿どもをば次郎ぬしへたのみて雌黄をうけ侍りき妾もつたなけれど文かくことを好はべり殿にはかくしまゐらせて文かく道をたどりしものから御目をしのびてしかせしぞや御恩ふかきわが君の御機嫌もかしこみ侍ればこのことばかりは聞えあげまじとおもひつれど不意今不義をもせしかと御不審を蒙ふりそのうへ苟にも師たる人に惡名をつけんことのかなしさにかく明々的に稟しあぐるにこそと涙とともにかたりける岩代瀑布太頭をうちふりやよ瀬川どのさいはれても一應にてはうけがたし得て花柳にはかゝる僞情はあるならひまさか發覺時の逃道にかく陳奪翰の騙局をなしすりかへられしとおぼえたりいてさらば實否を糺さておくべきかとなさけなくも瀬川が調度手筥の類ひ底をはらつてのこらずうちあけありかぎりの文どもを一々あらため査すれどさせる淫行ごとの文とては一通も見えばこそ漢文の草稿のみ累々とし堆だかし儒者潤藏かたはしより讀見れども總て鎌倉の名勝を咏ぜしものかさらずばまた月をめて花を惜める風流詞なれば瀑布太も今は呆れかへり佛頂面してひかへしはいと手もちなく見えにけるこの間に近從のものども手分して院々の諸姉妹にこのことを聞あはせけるに瀬川が言葉につゆたがはずさすがに大磯は大都の花柳なれば大小名さへいらせたまへばいとやはらぎたる和歌のみならでもろこし人のもてあそぶてふ詩文章のはやることいさゝかいつはりならずして姉妹どもみな駒澤につきてこれを學びしはあきらかなりしとぞ世の諺に惡につよければ善にもつよしといふごとく大内介殿はいまだ滔天の惡事は行ひたまはねどひたすら酒色に荒みたまふ御癖あればにや御氣もいとあら〳〵しく朝政おこたり罪なきをころし人望そむけたる御ふるまひのみおほかりしがこたび瀬川が次郎左衞門ととりかはせし文を御覧ずるに絶て艶簡にはあらずしてしごく質明なる漢文なりしを一字とても讀下したまふことあたはせられて剩その夜他門より入こみたる稠人に覗き見られ大きやかなる恥辱をとりたまひいとゞ面目沒おぼせしよりたちまち一念發起まし〳〵予いやしくも大國を領し鎮西の

節制を蒙りながら今まで文道をしらざりしは家の恥身のはぢたとひ隅田川一盃の水を汲盡してあらふとも濁れし面は清がたしとひたもの昨日の非を悔たまひその夜いそぎ御館に還らせたまひ誥旦齋戒沐浴して禮服にあらためられ駒澤次郎左衞門紀春雄を御前に召れすこしく席を進ましめ汝予がためをおもひこれまで幾十の内忠を盡せしこと滿足におもふぞ汝は家隷なれども予がための守護神なり今日より始て汝を師とし學問を勵むべしよく〳〵指南なしくれよと厚き上意を蒙りける次郎左衞門おそれいりて頭を席にうちつけおぼえず涙をはら〳〵とこぼし物員ならぬ小臣が寸勞を賞せられ君さばかり善行にすゝませたまはゞ上は朝廷祖宗の御爲下は臣民御仁澤を被ふりなんこと恐悦この上や侍るべきと慶賀を叙てまかん出ぬそれより大内介殿は駒澤次郎左衞門に侍講をさせ旦暮たゞ學問を勵ませたまふにもとより聰明比なく一を聞て十を知らせたまふにより駒澤は浩博なる聖經賢傳の内より今日の經濟に用たつべき樞要の語のみをえらびて捷徑に導びき講じ聞えまゐらせしかばほと〳〵惹延がとく御上達あらせられおのづから心を正され身を脩られて幕府に仕まして御務いさゝかも懈たまはず專ら仁政にこゝろを委ね軍民を憫みたまひしほどに上の御きこへよろしく德望遠近にかくれなくげに當世の賢君なりと仰がれさせたまひにきこれしかしながら全く駒澤が方寸より出てかく名君に仕たてあげしゆゑなりかし前に駒澤が智略にて大磯に漢文かくことをはやらせしそれに費用たる金子どもは總て當家の忠臣冷泉帶刀が計にて辨へ出せしとなりまた花街第一の情俠とよばるゝ瀬川を托みて非實と不義ある擧動にとりなし漢文をとりかはせしが必竟これをもて通明なる介殿を諷諫なせし辛勞どもを殿後來くはしく聞召駒澤が己を屈して主のためにかくまで心をつひやし剩しばし冤の汚名をさへいとはで遂に得がたき功績をなせしは比類なき精忠なりと御感のあまりまし〳〵重く用ひられてやがて御擡舉あり執權の格に加へさせられもつぱら政事を委たまふさてまた遊君瀬川はいやしき一夜妻なりといへども川竹のうき身に似氣なくよくも駒澤が忠語を諾ひ己が眞情のかぎりをつくし命をさいかへりみず已に刀下の死地に入りながら果して駒澤もろともに諷諫をなし課せしは世に稀なる義婦といふべし殿にもこのことをふかく賞せられ若干の金子をもてかれが身價を償なはせたまひすなはち御偏房と冊かせたまひけり德の流行すること置郵にして命を傳るよりも速かなりとかや駒澤次郎左衞門は天賦し博學多才に些も誇らず緊く篤厚の君子なれども佛家のいはゆる方便とやらん兵家にいへる智畧の類にて人意の表なる奇策を出しさしも手硬き大猛烈の大内介殿をさらかへして忽地大賢明の人君となさしめ國家を泰山の安きに置しは前代未聞の名臣なりと在鎌倉の士太夫はこのころもつぱらこれ沙汰にて駒澤が智術德行をぞ稱賛にけるあるが中に駒澤いまだ妻なしと聞て女子もちたらんほどのものは乞聟にせんと手蔓をもとめて緣談をいひ入る人數かぎりなしされどもこの駒澤は初宮城阿蘇次郎とていまだ浪人にて在し時秋月弓之助が娘深雪といふものに二世かけて戀匹の約束をなせしゆゑ信を守ことまた金石のごとくなればさばかり歴々の大門戸より婚姫を請もとめらるゝといへどもこれを一概に推辭きりてとりあへざりけりこれによりてたまさかには駒澤氏はさしも德望人にしあれど内心は色好にてしかくおしなべて緣談をいなまるゝにやとあやしむものもありきまたは智畧ふかき人なればいかなる望かありてしかせらるゝならんと結句奥ふかくおもふものもおほか

りをりしもあれ秋月弓之助は主君太宰少弐殿の使節をかね大番に交代してこのをり鎌倉に下り桐が谷なる少弐殿の第にありて駒澤なるものは當時無双の豪傑なりとつたへ聞紹介をもとめて一面識となりしがます〳〵その人品を慕かの家に親しく交加人を央己が獨娘深雪と呼なすものを駒澤どの〵箕帚の妾に具へ晋秦の好をむすばんと媒妁の人をして叮嚀にいはしむれば媒妁の人はこれまてに御直參の歴々方より縁談仰入られしさへ駒澤一概に固辭たればとても此縁とゝなふまじきよしをいひ聞すれども秋月またこれを可ずぜひとも曲て云入見られよたとひ足下の勞をいたづらになすともこれ拙者が生涯の心やりなればとあながちにたのむにぞ媒妁人も今は止ことを得ずしてあだごとにならんとはおもへど物は試にいひ看んと駒澤に遇てこのことを告にければ世には案の外なることもあるものかな此次郎左衞門いまだ阿蘇次郎たりし時宇治にて眷戀たる娘の名を深雪とは記えしかどその父の名をしらざりしにはからず明石の浦の月の夜にふしぎと舟の上にて環會その時はじめて秋月弓之助が娘といふことを知得たるに今かく家老職とも發跡たるにぞ遠からず山口へ下りなばかの人は程ちかき筑前にありとしおもへばをりを見あはせ婚姻をもとめんとほと〳〵その准備せし矢先なりしゆゑ今日なんはからず媒妁の人入來たりしかくいひ出せしかば悦こぶことかぎりなくなを念おして太宰少弐殿の御内なることを問究ます〳〵安堵て一議におよばず允諾けるにぞとまれかくまれ媒妁は事成れるをよろこび足を空なして弓之助が宿所に馳回いとほこりかにこのおもむきを告て慶を叙ける弓之助はいかゞと殆ぶみおもひしにかく速に事とゝのひつるは娘深雪がひそかにかたらひおきし事とは夢にもしらねば全く吾耳朶裏の福分なるべしと肚裏に自負をさへ生じとりあへずおくりものして己が喜びを表はしあつく媒人をぞ賞しける

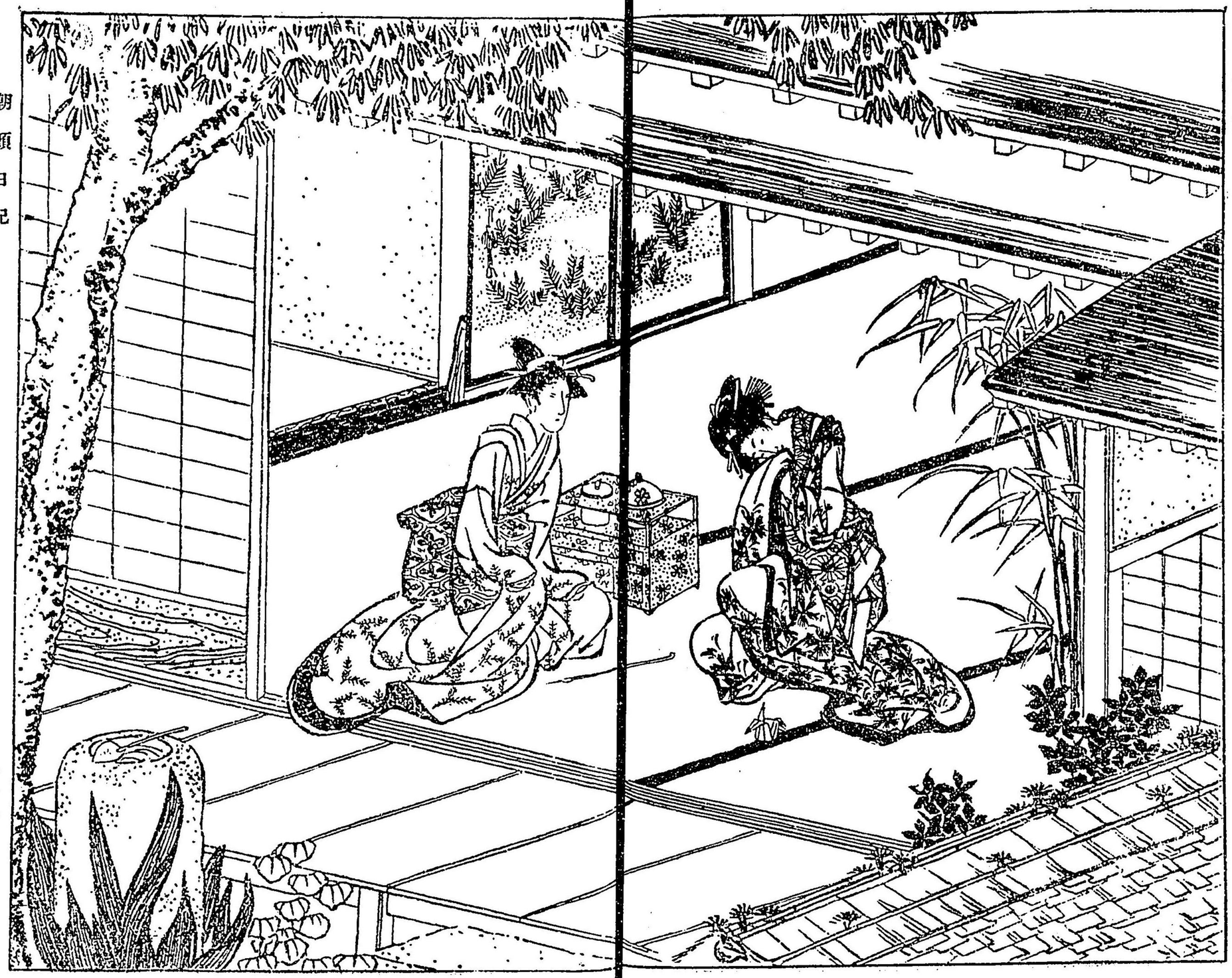
第十一回（諫）

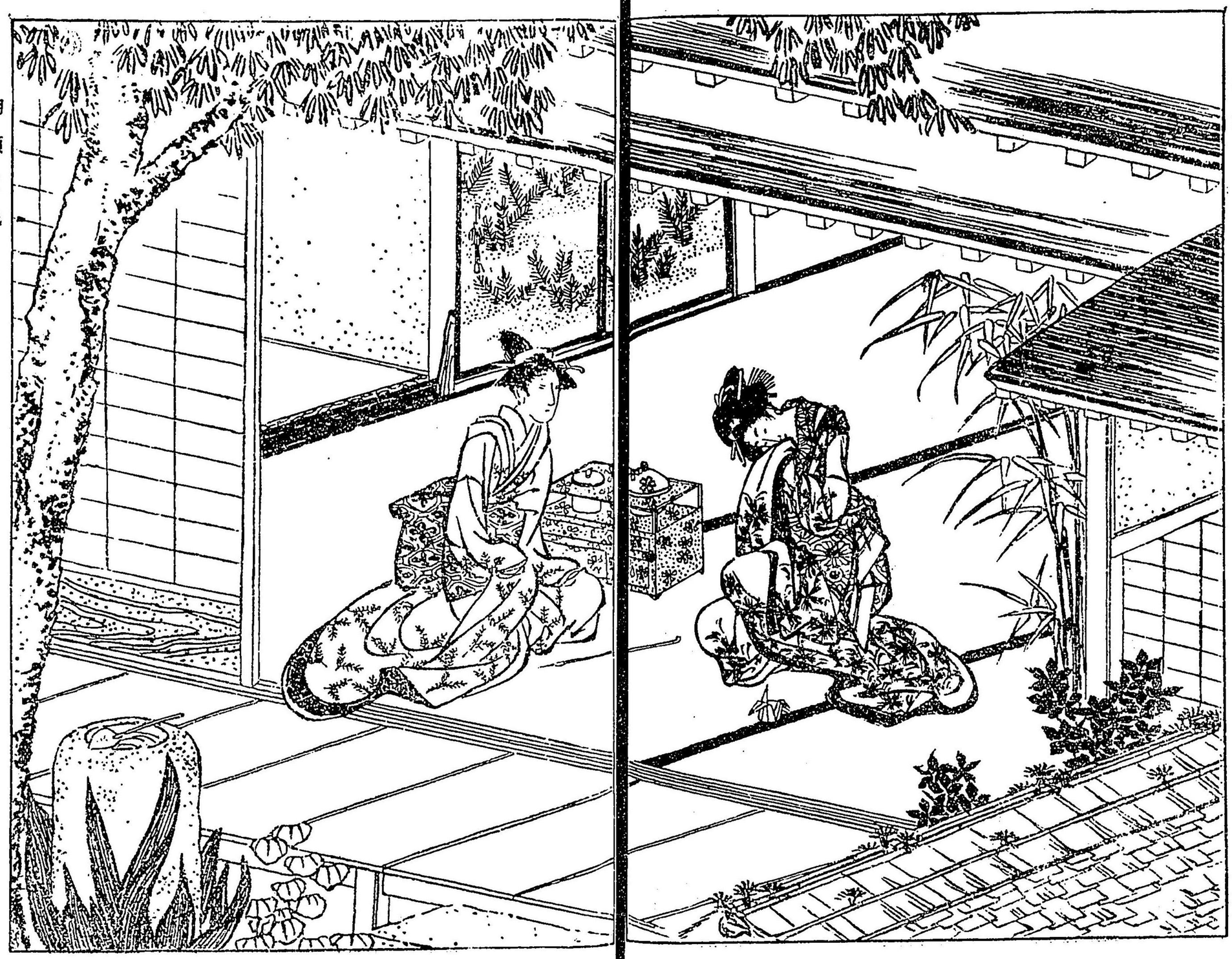
世の常言にいふなる會は別れの端とやらむ秋月が女兒深雪ははからずも日頃慕へる阿蘇次郎と明石の浦の船の上にて邂逅に環會二世のちぎりを約し即時情郎にしたがひて奔り去んと支度せしが事ありてその船にはかに駛出せしゆゑこゝろならずも父弓之助と共に筑紫に下り路陵の邸に歸住深室に閉籠りてぞありける物おもふ身はわが故郷の天ながら旅にしまさる憂に耐でわが背はいかになりたまひけんさぞわらはを誠なきものとやおぼすらん這方は一すぢに戀ひ來しものを誓ひてしかねことははや忘れやしたまひけん郎君は情多きものとしきけば宮古の花にうつろひましけんこそ腹だゝしけれなどとざまかうざまにふかくおもひかゞまり夢すざましきうき寢鳥あだに音に啼難面にひとりかたしく袖が浦いつかは君に藍の島海の中道なか〳〵に蘇老松原風絶てそよとばかりの信もなしかくまてあくがれたるつもりにやありけん早晩心地さへ例ならず三伏の熱き日も常にたゞ簾單てのみ過しける深雪は今宵了髮淺香に吩咐て簷端の簾子などりなく捲せ端ちかく居て櫻干に靠りせめてもの心やりにと外面をうち眺れば及時池の蓮花の盛開なるがえならぬ飛香の一陣々々づゝ鼻を撲來りぬいと清らなる水の湄なれば夜の更るにしたがひ何となく露けくおぼゆるに水草の葉末よりは秋の螢の四個五個ばかりいとよは〳〵しく飛かふありさまさながら青き光どもの滅がてなるぞものわびしくはかなげにあはれなりけるすゞろに越方のしのばれて看もの聞ものにつけて涕泗をもよほす媒とはなりけらし

よるをしるほたるを見てもさびしきは
時ぞともなきおもひなりけり

と古歌など吟じていもねられず只顧悲嘆にくれ竹のふしまちの月もほのめきいづればほと〳〵其人の面影さへ幻にうかびつ墻根にすだく蟲盃の切々唧々く聞ゆるはよもすがら我にともなひてや泣あかすらん過し明石の枕月の下臥ひまもなく逢瀬にさそふ萍の生憎嵐に吹散され衣々ならぬ船々と影はそなたに有明のあけはなれずもはなれ來てよるべをかこつこのうき身こゝろつくしにさすらへてたゞわが背子をたづねわび魂は雲井の餘所を翔夢は關路の千里を往還ともすれば世をあぢきなみ時ありては身を怨じつげにや死てわかるゝ今般より生別離ほど悲きものはあらじと上古の詩にいひけんも今わが上に比へつゝ只管哀慕の情にたへて袖ゆく水を堰あへずとかやさても在鎌倉の秋月弓之助は女孩兒がかゝる情痴とはえもしらずされどまたいつぞや明石の浦の船の上にて深雪が艶簡めくものを海に投しきりて悲嘆に沉みたる風狀をあやしみもしやいひかはせし意中人のありて戀慕の餘しかせしならんかたとひ渠がしたふものはいかほどやごとなき人なりともよも駒澤が縹致にはおよばじ女孩兒深雪ははづかに深窓にひとゝなれば眼界また寛からず我四十年來天下に奔走せしかどいまだ駒澤ごとき才貌双全たる人を見ずされば渠もし一回駒澤をあひ見るにいたらば極めて推辭むことはあらじと此趣狀と縷々としたゝめ一封の家狀を走卒に齎せていそぎ本國筑前へ差しける路陵なる秋月弓之助が邸には渾家の水青信々しく良人の留守をまもり日々とその消息を待わびてありけるに今日しも奴が鎌倉より御使にまゐれりとて丁寧どもがその書函をさし出しぬ水青は良人の書信をとりあげてまづ平安とあるに安堵やをら緘おしきりて熟

く讀了一たびは悅び一たびは愁る面持なり悅べるものは佳婿を得たるがゆゑなり愁ふるものは女兒が別に意中人ありてつねに戀慕態を猜しゐるにて愁いにいひ出しなばいかなる怯事をか仕出來なんとおもひはかる故なりさるによりて水青はよく〳〵思案を凝しいづれ女兒を諭して事を成へんにはしかじと軈て乳媼の眞柴を套房によびよせうちひそめきて商議せり了聲淺香は少黙ものにて隔襖にこれを漏聞隨即深雪が蘭房に走ゆき喘吁々小姐適間鎌倉より御音信の候らひしはしか〳〵のことにはべると一五一十耳語ければ深雪は聞より胸つぶれ呆れて半晌口を開かずこの時淺香は内房より呼れて起ゆきぬあとに深雪はひとりごち原來かゝる憂事を聞んはしか前宵の夢見のあしかりつる比先は君侯の御聲がゝりにて肚裏に染ぬ詰號に遇幾年月の苦に病しが不料色虬之進が暴に病て亡たるにぞ天幸一頭の煩悶を除ぬさもあるうへははやく情郎に偕老と佛に祈り神に願それを力にあだな二光をおくりしがおもひきや今日の御書信に駒澤殿とやらんに新婚せよと强面なる父の命せ自來わらはが身にはふかく山盟海誓し人ありていかなる義理約束のあるとしも露ばかりも猜したまはてわらはがまだ允諾もせぬものをはや許配をなさせたまふとや愛慈なきなされかたと往年は君侯を恨み今日はまた父を恨其儘そこに倒れふし丈にあまれる双の袖を顔におしあてよゝと啼出しけりなべて情ある女子の態なりかし母の水青はこの擧動をさし覗き見て旁に人なきを幸とせきばらひをなしつゝ深雪が房に入ければ深雪は慌居なをり襟刷くろひ泣ぬ顔にとりなせども宛轉たる愁容正にこれ玉顔寂寞として涙闌干たりといへる光景なり水青はやをら側なる琴をおしのけちか〳〵とよりそひ泣吃せる女兒が背かひ撫つゝ道理よ〳〵との慰言かく背丈のびたる女兒





をば春まだき白處子のごとおもふも兒にはめもなき親心母水青いふやうやよ深雪そのやうにむづかるは淺香めが失口りて婚姻のことを聞れしならん今まであらはにこそいはね汝の肚裏に戀人のおはすことをばとくよりも猜したるぞやおもひよらぬ今般のこと汝は心に染ぬ姻緣とやおもふ且この父上の御文を見ね婿といふは鎭西の探題六箇國の主大内介樣の御家老駒澤次郎左衞門殿とて三千石の秩祿知弓筈釗鎗把ては鎌倉一の武夫なるよし且文道にもかしこく萬の伎藝什麼一個會せぬといふことなく剩世に希なる美丈夫にて天禀て眉清目秀色は雪よりも白く縹致氣骨傑然なる人表分に過たる佳婿を得たりなどゝあの嚴確父上のこのやうに器量のことまで精細にかゝせたまひき加旃この駒澤殿の人品を賞ひ御麾下の世胄がたより女兒を賜さん妹を妻さんと方々より懇望ありしかど駒澤殿いかなることにか一概て固く辭みまふされしは鎌倉中の風說なれば水人も玉成ことおぼつかなしと躊躇しがこれこそ月老の結ばせたまふ赤繩にや這方よりいひ入るやいな速に承知ありしとよされば父上の命を畏みはやく承引てたびねさもあれば親孝行且はその身の冥加なり汝が戀人といふは比先宇治の螢狩にてたゞ一たび見もし見られもしたる宮城阿蘇次郎ぬしのことなるべしその人は浪人といひ別來弗に動靜も聞ずことさら賣僧雞庵めが騙局など百般の障礙ありきかゝる齟齬あるは必竟これ緣の無が故ならん緣ある時は千里の外もあひ遇ならひ恰ど今般の駒澤どのゝごとくいちはやく事整こそ赤繩のあるといふ證據なりこの利害をよく辨明よ鬼にも蛇にもあらぬ母がなでう無仁の處置をなすべきさはあれ羞をいはねば理が聞えぬといふ世の諺緣有無の緣由といふは現在の此母が身の上十八年來つゝみ來しも今愛子の可憐に愧をわすれてかたるぞよわれいまだ少艾しとき乳母が媒によりて嫩氣のいたりの後先見ず母家の間壁なる瓜生主水といふ武士に人しれず契をこめ末の松山浪こすとも互の盟は違じともろともにふかくおもひしこり一年餘を過せしうち汝の爲には祖父君わが父宇佐美彌五右衞門殿一日御城より退朝たまひ母上に仰すやう今日は不圖御前にて君侯某をちかく召れ汝の女兒水青はや桃夭のころなれば幸秋月弓之助とは對〻の門戸年紀も似合しきよし弓之助は弱冠なれども緊利發なるものなり婿に取て不足はあらじ予が媒にて婚姻申つくるぞと感佩御上意弓之助が人品家風は從來望とところ殊に嚴命かたじけなく早速諾まうしたるに君侯にも滿足におぼすとの御意にて御酒をさへ賜され御勸ありけるゆゑ一時高興にて歸しぞさあれば近日弓之助より黃道吉日をえらび納采を贈來るべし這方にも早くその准備をなすべしと嘻々よろこびたまふゆゑ母上はさらなり國家ざゝめきて祝ひはやせどわれはそれにひきかへて何が水の出端の嫩ざかりこれを聞ておどろき恰どそなたのやうにおもひつめ先は闇なる女心ひとすぢの義埋に纏ひあるにもあられずあまりのやるかたなさに一夜墻を越て隣邸にしのびゆき主水殿に遇て事の次叙をつばらに語りこは何とせんと氣もそゞろ浮沈にせまるわが身のうへいかに所置たまふぞと泣つ口說つせしうちに主水殿も十方にくれし体なりしがやゝありてまうさるゝはこは是非もなき事體かな知るゝごとく我はこの家の螟蛉子なり那方とは門戸も相對ば機を見て婚議申入んと挂念しがさすがに養母の膝下これかれと心ならず遲滯て今日の今とはなりたり嫡實の母親なればとく耳にもいれて商量をもなすべきをかく延佇になりしはこれまでの緣にてありつらんまた和寮は君侯の御聲がゝりにて夫人新羅の前の御主持

とあれば等閑ならぬ重きことこれ全く天よりさづけたまふ因縁といふものなり我は今より弗におもひきり侍りなん和御寮は忠と孝とのために秋月許へ燕爾なしたまへ我においては一點も念を遺ずと乾々淨々といひ放されしゆゑこれに腹が立まいものかおぼえず切齒をさへなしてそは餘りなる薄情おふせかなわらはゝ一たび山盟海誓ことなればつゆおもひあきらむることはなりがたしいざこれより何處へなりとも伴て退たまふかさらずば今この座にて君が刄に貫かれて死なましはやく手にかけて殺してたべと種々怨かこちたれば登時主水どのゝいはるゝにはそは女の一途といふものなり眞情はさもあるべきことなれどもよく〳〵情由をわきまへたまへ我は養子の身分色にまどひて義恩ふかき母を捨極重なる義家の名跡を斷絶せしめまたかけかまはねども弓之助にも蠢巧の女を妻にしたりと世上に哂すことこれまた人情のしのびざるところなり孝義は天の道色は人慾の私と聞天の道を捨て人の私を立ることは我は得せぬほどに和御寮是非ともに死なんとならば早く回て和御寮一個死たまへと世にたのもしげなき語を聞よりあまりのことに掃興はて呆れまどひて家に回り熟右思左想にひとり死ねといふほどの薄僥郎に義を立ぬき不孝ものと世に笑るゝも詮なきことあのやうなる薄僥郎なれば來世の契もたのみなし憎さも憎し主水殿への憤激かた〳〵一向世間へしれぬうちに寧婚嫁して見せんと心を決し遂にこの家の渾家となりしが良人弓之助殿は謹嚴氣質なればいと趣なくをりにふれては心醉郎とて主水殿のことをも慕ひつれど馴染といふものはまた格別なるものにていつか良夫弓之助殿が愛憐なりやがて汝を産しぞやその後街心にて主水殿と行遇ことありしかどかの人も具妻となりていよゝ慎ふかくいさゝか昔の風狀もせられず

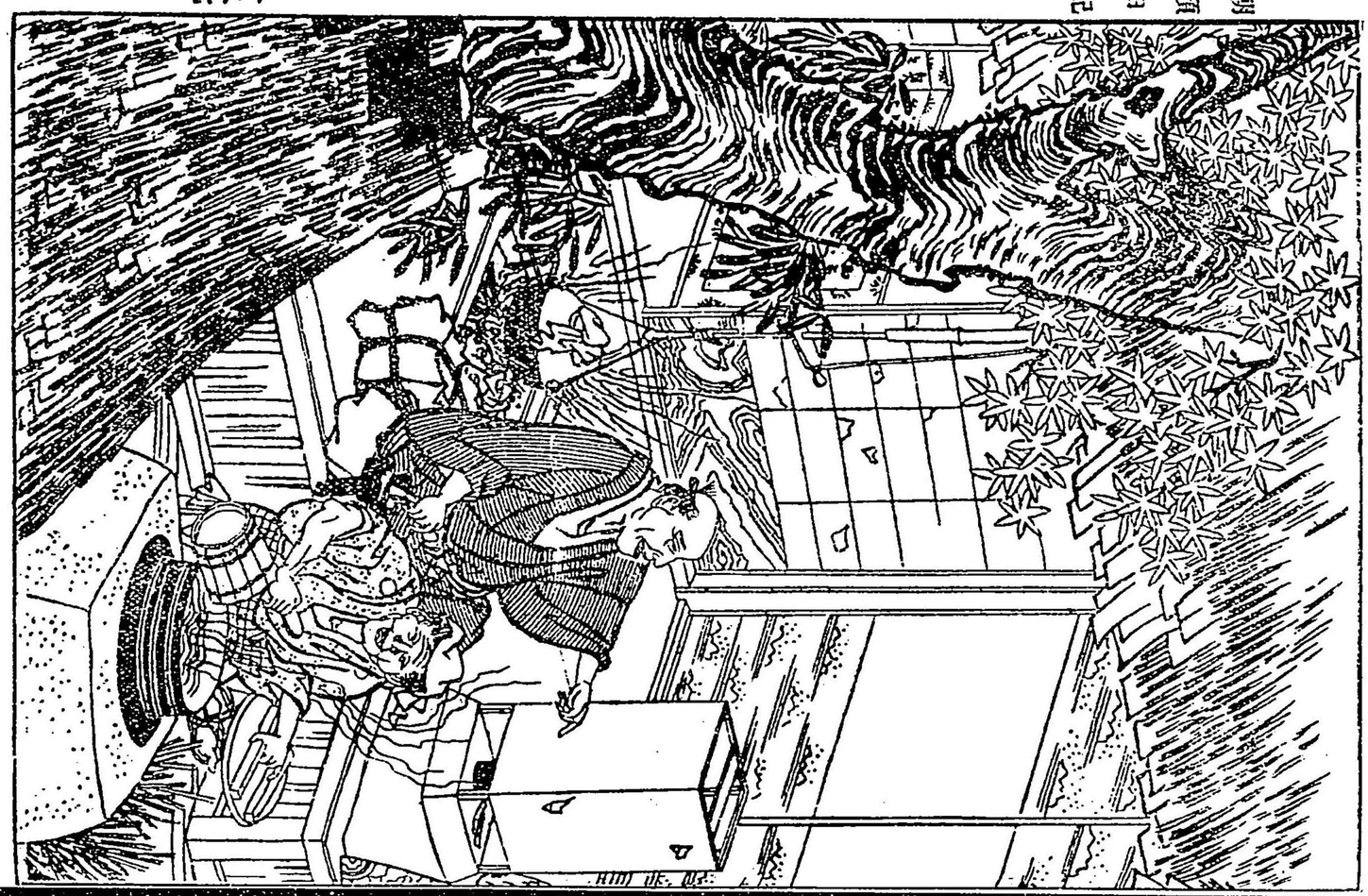
凝し熱もさめきりてよく〳〵想にその時主水殿不保いはれたるが武士の深切にてありしなり汝はまだ阿蘇次郎主とは偕老の契を結びたるといふてはなし宇治にて逢見しまでのこと、と明石の浦のことをば夢にもしらねばかの人は汝のかやうに慕やるともしらて今は早妻むかへられしもはかられずすれば下蔭の云なる鮑の貝の片想とやらん徒に想屈してあたら花貌もうつろひはてん諺言なれどもさきにもいふごとく父君の御書に駒澤は世に冠絶たる風流雄なりといひ來したまふ母もまた耻をもあかすほどの深意をわきまへ父母への孝行にははやく奇人を想斷笑容駒澤へ花燭してたもと種々に說話たてられて女兒深雪はこの長語を聞顏さへ得擡ず泣しみづきてありけるが母の庭訓の骨髓に浹やう〳〵に涕淚を拭ひ羞澁さ勿体なさ不孝の罪そら怖しく既然母上の御語を諾ひ駒澤殿とやらんに嫁して御慈悲ふかき父君の御こゝろを安堵まゐらせんと身の過を悔つゝ聲もかすかに謝申せば母の水青はふかく悅こびこは出來せり健氣なりと扇たてゝ賞そやしぬかくて復書をしたゝめてさいはひと好便宜あるに托て此風趣をいひやりけるこれよりさき鎌倉なる弓之助が僑居には氷人の所招にて駒澤方より納幣を贈り來せしうへ今又渾家水青が家書とゞきて女孩兒も異議なく承引たる趣をしりていよゝ安堵喜ことかぎりなしされども深雪は一心金石よりも堅く阿蘇次郎に約し舊盟をまもりそれがために節操を氷潔し他家へ嫁づく念は露ばかりもなゝあはれいかにもしてこの家をしのび出帝都にますなる情郎に尋遇ばやとその使宜をぞ覘ひける前の日母に允容の体にもてなしたるは閨家に怠情をさせんとの私意なり一夕深雪は一通の遺書を留め黑夜に紛れて路陵の邸を逃れ出踢躇に帝都をさして奔りけるこれ色膽と情痴とにあらずんば僅々破

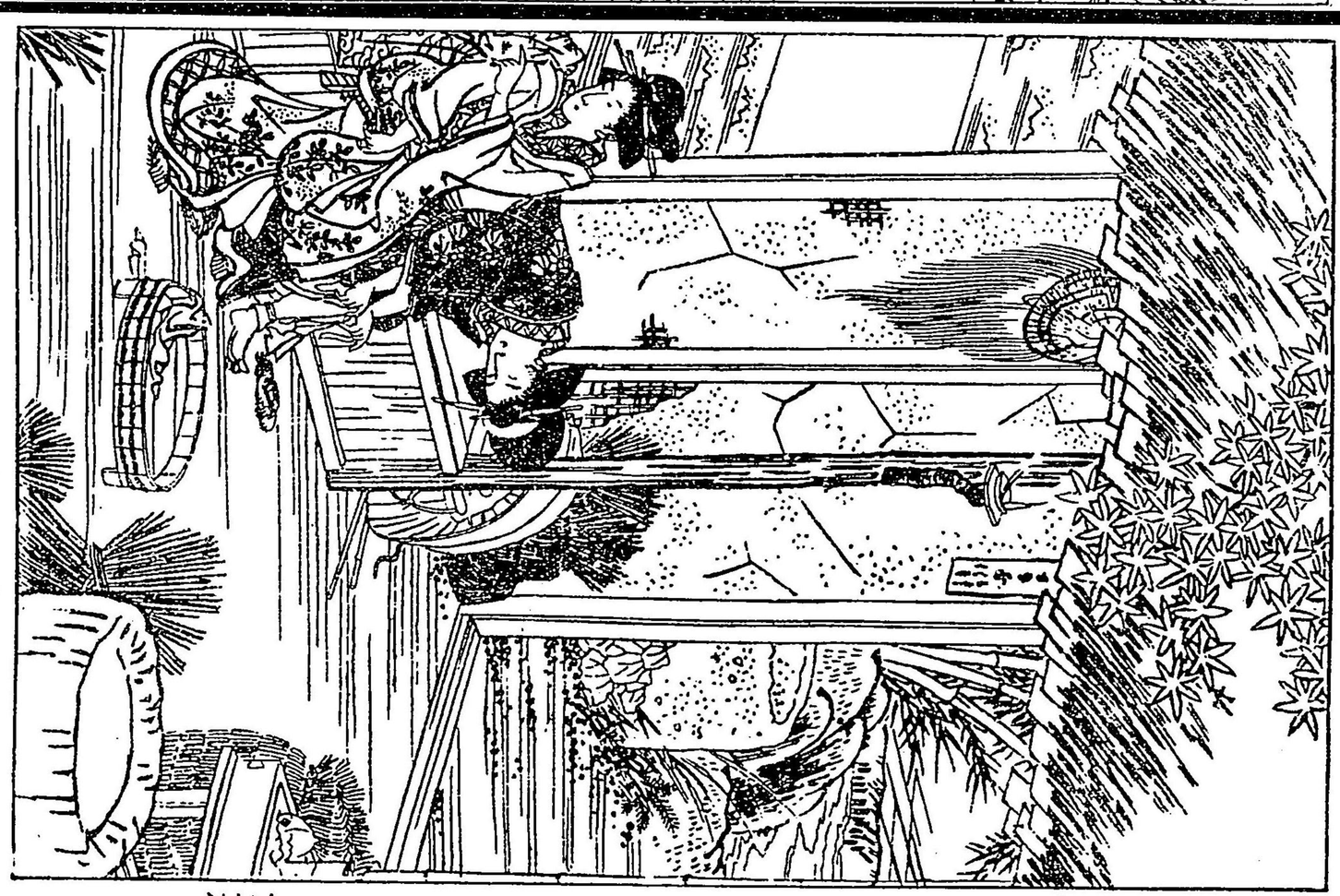
瓜の深閨處子いかでたゞ單々行程萬里に赴くべき水青は女孩兒が遺書を見るより忽地肝潰て人心地もなく慌忙人を走らせて追かけさせ祈禱よト筮よと騒ぎ惑ひて狼狽れども 遂 回り來らねば今は如何にもせんすべなく泣々このよし書にしたゝめ鎌倉へ使を馳て夫主弓之助へ告知しむ弓之助この變をきくより呆れ果且駭き且忿り一年明石の船にての風狀不得意ゆかずと顧しも必竟これまて愛惜に溺れその査明をもなさて姑息怠慢せしこそ悔しけれとふかく臍を噬て悶ゆれども甲斐なしさはあれ今さら駒澤へ對して何と謝辭あるべきわれ堂々たる武夫の身として一端婚約せしにかゝることありしとなでう白々地にまうさるべきわが辱門はともあれ深雪めが無狀にて當時賢者といはるゝ駒澤に恥辱を與んこと千萬きのどくなりと多方と心を傷しめ右思左想せしが猛然一計をおもひつきわれ賢婿の体面を掩はんため一生一度の虚事をいふべしと家隷どもに堅く守口如瓶して馳使を差し女孩兒深雪こと不意暴に病て世を早してはべりぬ互に哀傷にたへ侍るよしをのべさせ戒名をさへおくりければ駒澤次郎左衞門この訃音を聞より天を仰いて長嘆し是好丁々々我不肖なれども騎長として國老の事を行ひ大國の權柄を掌に握れりされば近日に錦を着て故郷に歸り眞情比なき淑女と逝好俱に榮貴を保べうおもひしに誰かはからん一夕の枕席をも共にせず倏忽我を遺て一個黄泉の路に赴んとは凡 室 女は氣の肩を煩らふ習俗思想の餘に病亡しか憾むべし痛むべしと聲うち呑てほと〳〵血の涙をぞ流けるされば許配の婦人不幸ありしと聞てこのゝち又陸續緣談をいひ入者夥かりけれども次郎左衞門は情人已に身まかりしうへは誓て兩回墳房を娶じといさぎよくいひ放ちて續緣の念を絶けるとなん

* * * * * *

第十二回〔眇〕

さても深雪は蕗陵の邸をしのび出只管東を指て走けるがいつか苅萱の關の古跡をうち過嫩松の汀をも北に見て程なく烏金磯といふ地方にいたる這里までは昼間かくれ曉宵の仄くらき間に歩けるが追索るものどもはその影だにも看ざりけり深雪はまだ夜深に起蓐食て逆旅店をたち出この驛の郊垣より後背を顧れば五旬年紀の漢子ありて青春廿四五とおぼしき婦を具し來るが横雲の天なれば人顔なほおぼろげなれば大抵親子とはしられけり這の漢子聲をかけて阿姐は獨行と見ゆるが天照廟にぬけまゐりせらるゝか酒家は防州あたりまて行ものなり旅は伴侶とまうせばお伴になり申べしと懇にいふ深雪は立とゞまりて熟視るに緊く老實さうなる野叟なり深雪はいふやう正是わらはは上國へのぼるものそれなるは令愛にてはべるか婦女どちは遠慮もあらずさあらば御行程の斜纏ともなりてんとうちつれてゆく那の野叟が女子めくものは世なれたる態してうらなくもかたらひけるゆゑ深雪はふかく安堵てげりゆき〳〵てはや小倉の城下にいたり一間の茶店に尻かけて一盞茶時憩息ふこの時那の野叟深雪に耳語けるはこれより那邊に文字が關とて旅容をあらたむる批驗所あり小姐は往來符牌をもちたまふか深雪いふやうわらはは遊の旅程にてさる支度をもなし侍らず野叟はこれをきくより眉頭に臥蠶を起しそは不便なることかな符牌あらざれば這方より水陸ともに通行ことかなはずさても不便といふにぞ深雪はほと〳〵十方にくれて默し居たりやゝありて野叟いへらく好丁々々こゝによき手段こそあんなれ酒家親子が通券に二人としるせりこの二の字の中にまた一點を加へて三の字となし關吏をあざむきやす〳〵と通しまゐらせんとそ

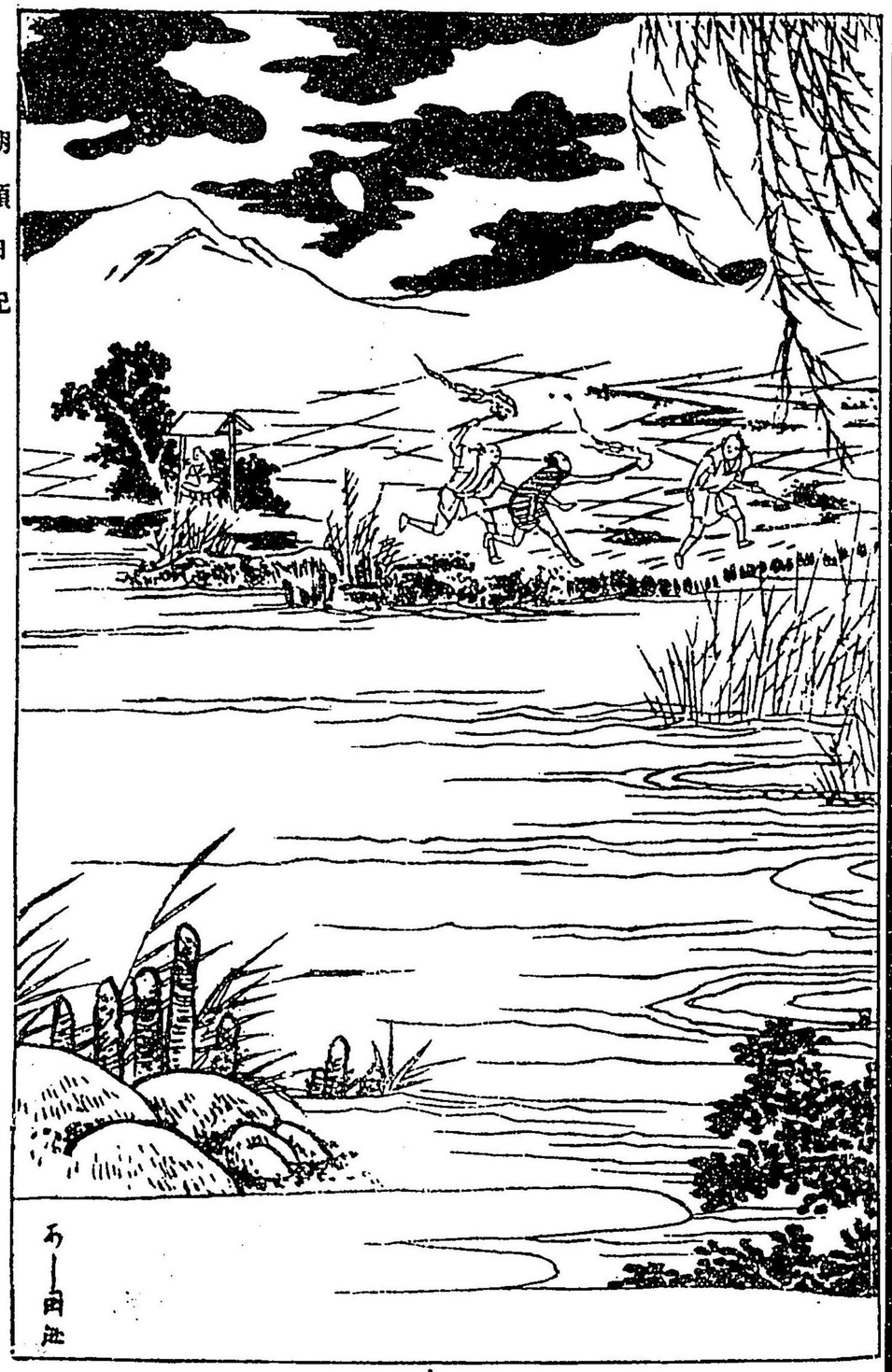




のまゝ書加へ又たち出てやをら關の戸にいたりこの符牌を眺て何の苦もなく過すましけりかくて深雪は那の親子の客人に從て隼人の峽門を渉り赤馬が關にぞ着にける三個はこれより旱路を歴ていそぐほどに日あらず周防の國小瀬川といふ地方にちかづきぬ這里はおよそ百戸ばかりの小村落なり那の野叟ゆく〳〵深雪に對て這里は老父郷里なれば緩々茅廬に逗留して行路の疲勞をも憩めたまへそのうちにはよき夥伴も出來なん浪速にかよふ船の便をも聞出しまゐらせんなどます〳〵懇にかたらふ已に渠が家に來てみれば葭封茅の宇端にはおのづから胡蝶花生ていとわびし外面なる麥打場は雞の雛ども求食あひ狗兒など戯れ狂ひつそのわたりみな黄櫨柿の堅紅散布てこれを蹈ば雹汎々々と鳴野叟は背戸の繩簾おしわけて入り婆々中歸來はと音なへば早かりしと應て婆婆は機を下たち鬢搔撫つゝ出むかへ老人家什麼ぞよき鳥が罹しかと問に野叟ひそめきて鳥も二羽まで獲が一羽は價になりさうなものとさゝやく深雪も呼入られて裏頭の光景を見まはせば庭籠より手桶に湯を汲いれて拿來り牀端にて盥盤にうつし姐々たちさぞな草臥たまはん洗足したまはゞ内房へ往寛緩甘ぎて憩みたまへといふ深雪は農婦に對ひてこは勞汝なり一路もこれの御亭主の御勞煩になり侍と挨拶して草鞋脚絆をほどくに皮肉腫浮て喰いりたる紐の痕さへつきたり伴の女と共に一浴盤にて双足をあらひやをら厨房に蹣あがりつ婆々は笑容可掬つくり別房に誘ひゆき枕などあてがひ一椀の澁茶を拿來てこよなく欵待ける深雪はもとこれ深窓にひとゝなり萬事初々しく什麼の心もつかずして翁媼が深切をよろこびけりされども伴の婦をば農婦が女子にもあらぬ挨拶せるゆゑふかく又いぶかりあやぶむこの伴の婦はもと小支那といふ覇臺の柳巷の遊女なり些つまらぬこ

とのあるゆゑ柳巷を出亡して小倉の方に赴く所に偶と那の野叟にいてあひけり那の野叟は權に老實の態に扮粧せども從來脱囮の吉兵衛と呼るゝ人肉經紀の骨長なり罠をも脱る狡狐のごとき狡猾きものなるゆゑ土人も後には吉兵衛とはいはず狐兵衛〳〵とぞ唱へけるされば這の小支那は那の狐兵衛に拐騙れて伴られしが小支那は自來遊女のことなればあくまで騙嫖には熟たるものゆゑ初より吉兵衛を囮戸といふことを猜しけれども盤纏さへ心にまかせぬをりなれば假意と瞞されたる風狀をなし中に就てよき計較をもなさんとしらず顔にもてなして這里まで從ひ來しなり小支那は熟〳〵深雪が容止舉動の窈窕たるは極て良家の令愛なりと見てとり今しも囮戸が裏とは知て安堵在こそ痛はしけれと明の日婆々があらざる閑を覘ひ深雪に耳語ていふやう御身爪端の纖弱さよも平人には在さじかく嫩艾御身にして千里獨行をなしたまふは戀路にせまりてのことゝは問てもとくより猜し侍るわが身はもとより往還の人に折るゝ墻の花うき川竹のながれに漂よひ世の浮沈を看馴しゆゑこの家の主翁をばはやくも囮戸とは知りはべる這の家に入來ものは總て不良ぬものばかり符牒もて渠等が隱語を聞侍るに御身を高價に沽遞さんとの頭勢なり御身今泥梨地獄に墮たまへばとても解脱たまふことはなりがたし鱙て鯢鯨よる筑紫の果か胡笳吹く陸の奥にがな賣渡されたまひなんあな痛はしと涙ぐむ識趣ほど哀傷に勝やすし深雪はこれを聞よりも乍ち面土色のごとく半晌呆て口を開かずやゝありてはふり落る涙をはらひこは惠ある御語かな推量にたがはずさる仔細ありて情郎をたづぬる獨旅さても伴の野叟は囮戸にてありけるかさあれば今は籠中の鳥雲井に回らん由もなし過宿世の業にてありつらんもとよりも氷操をたてぬくわが肚裏そも故郷を出しより性

命は捨て無ものと觀念しつれば機に臨み死を看ること歸がごとき覺悟ぞよこれ看たまひねと懷裏よりとり出たる護身小刀試に脱はなせば明晃々たる鋩の光霜をあざむくばかりなり小支那はおぼえず毛聳してさすがは武家の令愛君潔よき御覺悟さりながら死はやすく生はかたしとやらんまた一心は石をも徹すと承はりきさほどせつなる御戀路運は仰靠龍天なり御命だにあるならば何處ぞのほどには情郎に環會たまふべしかなはぬまても艱苦をしのび身を完しておたづねあれ今日なん主翁も西貼壁にて閨戸の夥伴どもと團欒をなして飲燕しつ今霄のうちに逃れたまへこの舍の後方はあさまなる蘆垣一重なり潛出たまふほどはわらは斫ほどきて看標の白紙をつけおきなん適間屋後より眺やりたるに東北にあたりて人烟熱鬧き處は城下めきておぼえ侍る那方には官道もありなんそを心當にはしりたまへといと叮嚀に教導き躊よりて深雪が齧などの不正をもなほしつ深雪はほと〳〵悅こびてふかき姐々の好意のほどいつの世にかは忘るべきとあつく謝を申て雲鬢に挿みたる印子の簪を脱とりしひてこれを小支那に與些の人情をぞ表はしけるかくて深雪は暮やすき嘘景をまちわび窓より前栽の霜枯を眺やれば神無月は大かた時雨がちなるに今日も時雨うちしていとゞ物哀れなりけり深雪は獨柱に倚れて居たるに入相の鐘皎々と遠近に鳴渡はや天晩の氣色孕えもいはぬこゝろぼそさに古しことゞもを獨ごち雲井をわたる雁の翼もうらやましくぞおもはるゝこの時また一陣はら〳〵と大粒の雨おちきたり浦風おどろ〳〵しく吹つのるにぞ柳篁の類鳴さやぎてもの冷まじきこといふばかりなしやがて一盞の油燈を點し婆々は斜對戸より風呂に呼れて出ゆきぬ登時遊女小支那は深雪をひきたてゝいざこの隙に遁たまへと忙したつるにぞ深雪はそゝろ喜びいさみそのまゝ屋の後にしのびゆき白紙の栞を見るより天の與とやをらおし破りてくゞり出辛うじて小渠を越匍匐あがりて隄づたひに走らんとするに天色は墨をすりたるやうに東西をさへわきまへずたつきもしらぬ眞の闇脚下は蘆葦叢にてたゞ一條の仄徑なり深雪は杖の料に拔もちたる墻竹を立て地に跪き菅廟を一心に禱りこの笄の葉つきの倒れし方を東と知らしめたまへと念じ完りそのまゝ手を放し葉つきのかたをかいさぐりてこれをたのみ只顧足に信せて走るにともすれば葭の刈株にて跟を傷つけ血塗になり疼得て耐がたかりけり時ばかりありて後背を回顧ば數多の炬ふり照し罵しり騷ぎて馳來るは極めてこれわれを追來るものなりと肝魂も身に添ず只走に走どもとよりかよわき女の脚追人は次叙にちかづきぬ木枯の風いよゝ烈しく刹那に烏雲を吹掃せば一箇の鼓の透よりうち戰ぐ竹影は金屑を篩がごとくにて洩出る月影に透し見ればいとあらはなる寒林疎葉大やかなる石佛のみ儼然として立おはせりされば樹躱すべき所なく進退こゝに谷まりぬれば深雪は歎きてうち仰ぐ天もあはれと月蝕のまだ仄ぐらくなりまさる死すべき時に死せざれば死にまさる苦ありと懷なる短刀を捜にいつの間にかは脱落て今は寸鐵をも佩ざればよしさらばこの汲に身を沈てや死ましと灣曲の水の深處をたづね礫を投て見てあれば音さへたゝぬ淺潟なりさらば縊て死すべしと下括をほどきて幸と江にのぞみたる柳の垂枝にうちかけ圈兒をつくりて襟をしめ阿呀崖より飛吊んと南無と一聲叫ぶ時この灣曲に候泊せし干鰯船のありしがこの船の客人に念佛者と見えて程近き村落の十夜に參り抵今わが船に回り來り隻手には小提燈を提隻手には珠數爪ぐりて南無阿彌陀佛南無阿彌陀と唱へ來りし觔斗の拍子に今深雪が南無の一聲を聞



縊死と看るより矢庭に飛かゝりて抱きとめ縊縄をさへ奪ひて月光に照し見れば十七八の麗人が年ふる柳の下にありて十指合せて縊縄にはや吊下らんとせしところなり那の客人多方と深雪をなだめあらまし死すべき縁故を聞己が名所をもあかし目前見殺するは何とも痛ましく忍びがたし些の散財は從佗後果のためにこの老人が救護まうさんと叮嚀にいたはるうちはや追かけ來る者ども馳つきて口々に罵しり緊要の奇貨を棒にふらんとせしとて直にひつたてゝひこずり往んとせしを那の干鰯船の客人わけ入て種々嚶ひ懐中の財布より金子をとり出し那の罠脱の吉兵衛にとらせまた三片ばかりを追捕の者どもに遞與無難事を完し深雪を伴回船頭を呼起し仔細あれば早く船を出せと催促る船子ども心を得てそのまゝ鐵錨をひきあげ遠つ灘へと漕出す深雪は弘誓の船の救を得て囮戸が鰐の口を免かれ念佛者の老人の功德を嬉み宛も地獄にて佛に遇し心地せり恰好順風つよくふき出せばやがて篷を拽あげ五六合もたせて唯一夜の内に數十里を走り播磨の室津にぞ着けるこの客人といふは這の室津の迷魂陣の亡八にて夥の妓を養嫖客を待を過活とせる一座の花院の主翁なり舗號を大黒屋とし名を吉兵衛といふ這の吉兵衛は生れ得る沒一眼なるゆゑ眇の吉兵衛と綽名せりもとこの吉兵衛は樅丁のことなれば常に田舍經歷して妓子買に能しが防州小瀬川は囮戸女衒の巣穴なればとてとくより這の處に來り居てその奇貨を穿鑿せしに頃罠脱の狐兵衛が勾引して兩個の女を伴來たりしゆゑ密に覘ひ相てはや價定にかゝりしが這の渡世に狡猾眇柳巷の落第の蒼妓は望まず只處子の深雪をほしがり多方商量するに狐兵衛は深雪が身價を五十兩よりは減まじといひはりけるされども眇は中々合點せず偖菌は由ある奔女なり強て苦界させんとせば自害し果て原

價までも全然烏有とこの說話に枝葉つきて已に破談にもなるべきを牙僧ども種々と嚶居る時しも罠脱が婆々は畫間小支那と深雪が耳語あひしことを壁耳せしか口囂き惡婦のならひ堪かねて兩吉が價論の座にはしりゆきて一五一十告けるゆゑ鬼を欺く眇の吉これにつけこみそのまゝ三十金に買落しさて伴の演劇を草曲意と假造ごとして虛念佛者となりて如せしはもと這の眇吉は夫あり子ある中をさへ裂しめて買取種々奸計を運らし如何なる鐵肝石心の婦人たりともうまゝ苦界に墮しむる老賊なるゆゑかゝる造りごとして深雪が必死を救ひふかく恩を擔せよんどころなき義理に迫て苦海に溺んと巧計しものなり深雪はかく欺かれしとは夢にもしらず世には慈悲善根の種を蒔念佛者もあるものかなとおもひの外渠が家のさまを見ればまさに風月場とおぼしくて夥の姉妹の粉頭どもめざましく脂粉を凝し媚を献じ笑を賣ふゆゑ嫖客旦夕入集合ていと熱鬧深雪はこの光景を見より胸をうつてその薄命を歎き又しもかく行先ざきなる艱難にしのびかね數回か死路を索しかどとにかく小支那が訓を守り生はかたしとおもひ回しさしこむ痞をぞおさへける大黒屋吉兵衛は老婆のお六と熱く議り夜叉めく虔婆によく〳〵吩咐けるに虔婆はこれを允諾別房に籠り居たる深雪に對ひ家主がその死を救ひ天大の財を費せし恩誼のほどを口說たてそれを償ふ料には半年乃至一年ばかりも苦界に出られよ僥倖ある財主の半老子弟に梳弄のことを約せし由を語り多方賺し瞞しあるは嚴しく催逼などすれども深雪は一切承引ず艴然としていふやうそは心を得ぬことかなわが一命を助けられたるは慈悲ある家主の好意とこそおもひつれさる佛意き言は聞さへ耳汚れはべるにと雉子搏なる態なれば虔婆は深雪が執意を恚み只得座をたちて家主夫婦にこのよしを告け

金銀出入帳
大福帳

れば吉兵衛聞より大きに怒り酒家若干の金子を費やし頗の辛勞して買取來りしは全く本院の聚寶盆にせんためなり允ぬとて允さずに終さうかと眼を怒かして虔婆を叱りそれ早く厮を廠になしおもふさま削刀鍼を刺よなどゝ氣喘々搗子お六は慌丈夫に撑住かならずしもはやまりたまふな且霎時待たまへ那の小姐は歴々の武辨出身と見ゆるを 強 に呵責たまはゞ舌嚙切ても死かねまじき擧動なりさある時は損に損を累る道理まづ奴に任せたまへ今一回諭し見侍りてんと 漸 宥め課て己が縫房に深雪を呼よせ見ればみるほど 鵑たげにその容止の貴に艶く心 可 羞態ぞしたるお六いふやう和御寮は今三十金餘の價貨となりたまへばそれを 償 なふ資あらずば少間苦界なしたまはてはかなふまじさるを公然おもはて在しけるこそ心得ね虔婆どもは鬼々しきものにて今御寮に愛目を見せんと 犇 ぬるを辛じてとゞめ侍りき和御寮はそも如何なる人にて如何におぼさるゝやといと温和にうら問ば深雪回答ていふやうわらははよしあるものゝ女兒なり緣故ありて只單身郎を尋ねて都方へ登るもの 最 その人といまだ枕はかはさねど一回盟約てしうへは水火を蹈ても偕老んとおもひはべるさあればいかに責はたられ縱令段々に斫きざまるゝとも氷雪より潔よきこの身をなてう汚すべきいつそ前の夕縊れ死なばかくばかり可惡語は聞まじきに自來死を待覺悟なれどもこれの家主の散財のみ一個の遺憾におもひ侍る奴々倘佛心あらば情願債をしばし猶豫されて家主の不滿を宥られ許して帝都へ上せてたべ尋る郎に會面しうへは金子は倍して還しはべらんさもあらば折角小瀬川の汲にて必死をすくひ給りし功德も水になりはせじ奴々の厚き庇をばいかで生涯忘れんと涙と共にかきくどく却是は識趣の亡八のお六深雪が貞心感ぜしうへそのいふことも 理 なれば

快く諾ひていかにも和御寮の肚裏おしはかりまゐらせて痛はしくこそおもひ侍れ吾們かゝる輕賤過活は做ども一是不知人情にもさふらはず丈夫の眼前はよきにいひなししかるべう所置侍らんとなほ懇にうち語らふお六は深雪が起たるあとにて吉兵衛と相對百般と利害を解き深雪が義烈を委く語り那の小姐の氣象の猛しさ一心戀に凝て石にもなりかねまじき貞女精神强て迫らば死を催るといふものなり周防の女衒を捉來ていかに說話すとも報賽已過這方にも影 護 ことあれば凌虐ことはなりがたしあの兒は極めて世奇の愛女兒ならん寧籠をあけて放ちやり尋ぬる人に遇せなば金子は定てかへさるべしよしまた萬に一個齟齬たるその時は奴が四季の新穿を製まひほどにそれをもて塡損こゝは一番奴をたてゝ允容て恕てやらしやれといふ眇の吉兵衛はもとこれ事に熟せし有名の奸猾折角小瀬川にて十夜歸の演劇を做せし人を騙す圈套も徒ごとゝはなりたれどもとてもこの術でゆかぬ奴倘萬一迫り殺しては半文錢にもならぬ乘除且得意の戈婦のいふところ緊の了簡なりと一決して一向齊々楚々懇切にて放ちやるにしかじと意を曲て菩薩面をつくり夫婦もろとも種々に欵待幸よき便船を開出し艄工も入魂の者にて老實なればとこれを托みて深雪を載しめ浪花まで送差さんと萬信々しく經營ぬ深雪もまた龜婆お六が庇の遭腐によりて奇難を免がれ剩ふかきその勦を受しかば別に臨て何をがな心ばかりの謝儀をなさんと旅の調度を搜せども小瀬川を遁し時包袱は遺おきつ家を出る時は夥の人目を忍びかね髮の飾も取る間なく僅に常家の櫛と印子の簪を挿たるまゝにて奔りしゆゑ別に償のある東西もあらねば唯一枚の玳瑁の櫛子をばお六に與て別敬とぞしたりける

* * * * * * * * * * * *

第十三回〔關〕

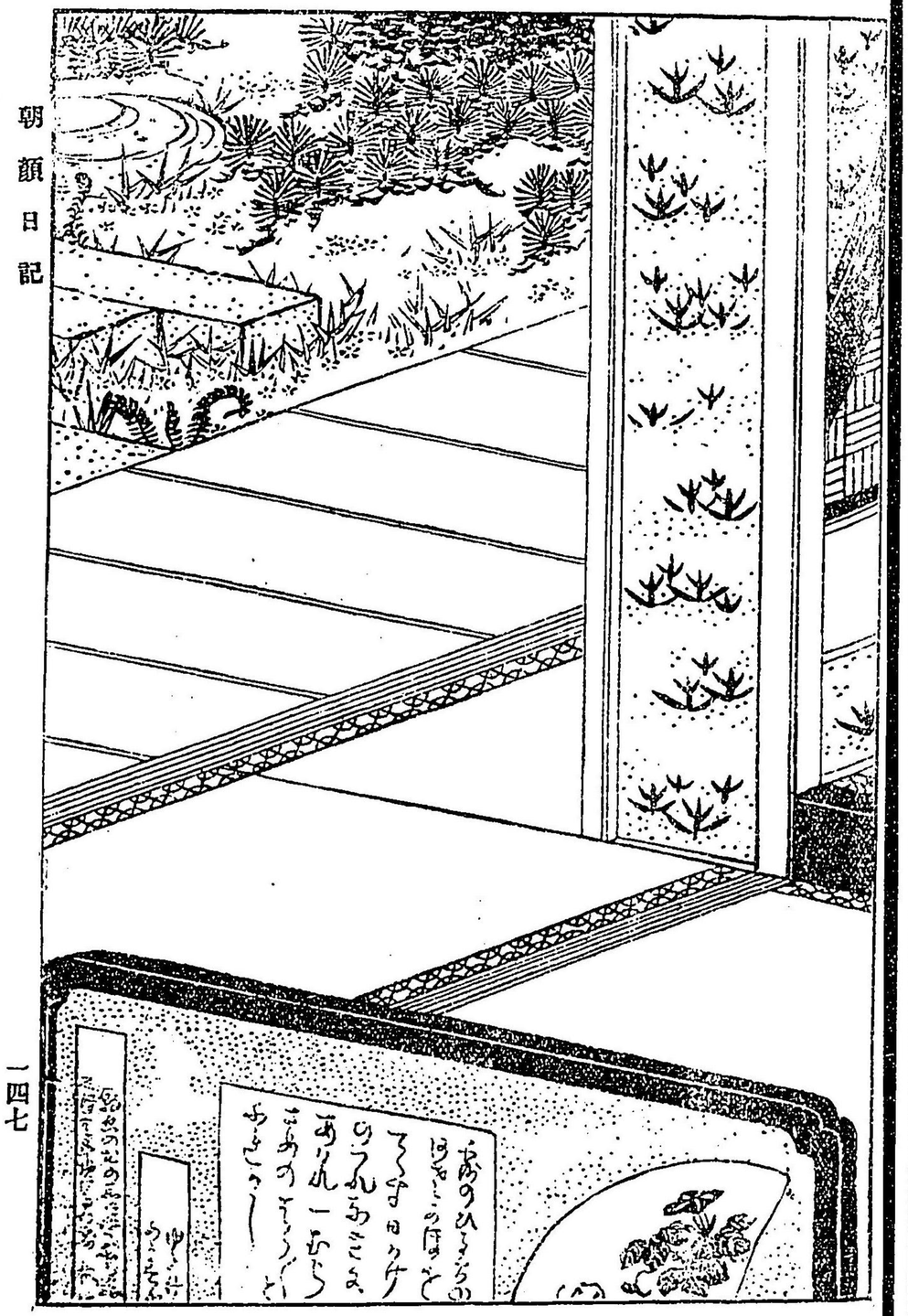
名妓紅拂は李衛公の英雄を鑒佳人窈々は張君瑞が才情を憐む私奔私約の醜態は遮莫兩個に一貫たるその氣烈をもて白璧の微瑕は掩に足なん宮城阿蘇次郎由ありて駒澤の家督を繼次郎左衛門と名を更めたるに秋月が妻水青は勿論女深雪は此ありしとは夢にだも知ず駒澤は別人なりと心得一心誓て異夫に見えじと遂に其家を出亡それより閨戸が舍に止られては鍼の席に坐し或は亡八が院に幽られて炎の臺に在がごとく幾十の艱苦を嘗悉しなか〳〵に今は憂身を捨果て世に又怖るべきものはなけれど渡海の泛宅に坐ては亡賴者の觸犯を豫避夜は終夜寢も寢られず名たゝる播磨灘は半百里程の大洋なるに候も秋已に果たれば風いよゝ烈しく況て前程は鳴門の奔潮盤渦出看々滸起て山の如く船を蕩颺汰簸しつ凡庸の婦なりせば隨即眩暈つべしさるに深雪は端然と危座て顏色も變でぞ在けるいつか高砂の浦畔を後になし明石の峽戸を過又來方の想れていとゞその人を眷戀み只管神馳しがやゝ都の天の近きたるぞ樂しきはや水送山迎て蘆が散浪速の港へぞ着にけるかくて深雪は浪花をたち出難なく帝都に歩着て嬉の餘旅疲をさへいとはず疾や遲と紫陌に入やいな居趾はしらず只宮城阿蘇次郎が僑居はと雲擬むやうに尋ね搜せば速かに知るべうもなし看す〳〵天も晩たれば只得先斗町の逆旅店に歇宿を占自來盤纒とて准備せざるゆゑあるほどの隨身衣を沽代なして日々の費用とすいづれ阿蘇次郎に遇さへすれば自在ともなることゝ高を括り果は襲までも鬻盡せしぞ不論好反さて其寓居を漸〳〵下河原にて尋あたりしかど今はあらぬ票札に替てありけるゆゑ唐突にも叫門しがたく貼壁の賣烟舗にたちよりて阿蘇次郎が下落を問に店小二が着實隣家に宮城阿蘇次郎殿とて學問の師範を做人のおはせしが何事のありけん近曾遽に中國に下られたりその後は鎌倉に住れて今は聲價人になりて在せるよしある書生衆より傳承まはりきといへりけるを深雪は聞より阿と叫び忽地仆伏て半晌昏暈けりこれを看より對門隔壁より人夥集合顏に水うち灌などしければとかくして徐々に甦へりぬ人々は烟舗より動靜を聞てはなはだ哀れがり多方と勦はり扶持原來宮城氏に由緣の人なるか宮城氏鎌倉に在すよしは吾曹も仄聽はべりぬさもあらば早く鎌倉へ下て對面あれ鎌倉といへば迥なるやうなれど行程僅に十日餘とぞいふなるさばかり心性おはしては獨行のほど放心不下おもはるゝ氣を確實に脩たまへと着力ていと懇に勦りける何處の浦にも夜叉はなけれど分て都下は人の心も優しく仁けありて那の官道をゆけば日の岡の到下なりそれより山科といふ地方を經て大津といふ驛舍あり今日はまだ日の高ければ大津までは容易往せたまふべしなんどゝ問ぬことさへいひのゝしる深雪はやゝ人心地つきて都人の好意を感激やがて杖に扶られて蹴揚の阪を躋り姥が懐を過ゆき〳〵て程なく名たゝる逢坂山にぞ着にけるこの處よりは湖水も些見えて渺々たる水光天に接して凜烈じげなり深雪は猛然とおもふやうこれよりさきの東路は行程なほ迥なるにいつか衣裳も沾却て裂縫片衣一套憂身を掩ばこの頃の寒氣肌肉を侵し心地また例ならず且這里までの一路も京へさへ着たれば情郎に遇るゝことゝこれをのみ賴來て幾許の艱苦を嘗しにその人今は在さずして鷄が鳴東の天に在すと聞ほと〳〵精力を脱し往つ還りつ風痴のごとく獨躊躇邊には關の清水も墜紅に埋もれ神の檜垣にはふ葛も色がはりせし霜枯にをりふし返照の影殘る對山の凹なる間より一陣の朔風吹颯て單穿の骨髓に冷徹れば遍身たち

海道(ふどう)の流落(ながらへ)

心ふりきり
なみあも
風そ
あをを
りの花の
ひとしをり

高三隆達

まち粟粒おこりそのまゝ寒戰ぎおぼえず咬牙をさへなしつたゞ右顧ても左顧ても孑然たる一身なるにかく俄に寒邪に冒されて煩燥く心細きことといふばかりなし今は一歩もすゝむることあたはず只得この夜一夜泣あかしけるが曉がたに風すこしゝめりて疎雨のやうにふり出るにまた一層の愁をまし泣々宮居の廡下まで匍匐ゆきて殘喘もつきあへずぞありけるこの朝まだきに驛の里正等幹ありて通過りしが亙臥せる人の啼く聲いとほそ〳〵たるは草葉によはる虫の音にもまがへるを聞咎て立とゞまり但見ればいと薄たけなる未通女のいたく窶はてゝ身には一套の襤褸を纏ひ戰慄居れる顔の小厨が荷たる諸葛菜の葉よりも青くさしも果敢なげなる擧動なるにふかく憐憫を催し夥伴のものどもにうち語らひ這の病女はかく貧窶しくなりにたれど爪端の賤からぬはいかさま由ある人の果ならんさても痛はしきことにあらずやと即ねば松吹風か澗のながれの響のみある時は筑紫潟の父母と戀ひある時は吾嬬なる可憐郎を想ひ屈してぞ居たりける忽日また父老ども來りて深雪に對ひいふやう嚮の日汝の惱ふかゝりし時熱に犯されての譫語にあはれ早く鎌倉に下てわが郎に遇まほしと幾十回かいはれたりそは眞情に侍るやと問ひければ深雪應て聲かきくもりいかにもわが郎は東方の天にとさくからに尋ね遇んと歩來てあらはづかしや病寒この路上にのたれふし不意目かいの見えぬ身となりぬしかはあれどおのれやれ命のかぎり精かぎり神佛の冥助をたのみ環會とおもひはべる尙このまゝに結果なば遊魂となりても下らてはおかじといふ父老いへらくさもあらば汝には什麼ぞ習熟られたる伎倆はあらざるや深雪は聞てうち點頭既然わらはは三絃子を彈會はべる父老は己がこゝろに合へる臉して好々三絃をさへ彈れなば鎌倉へ下らるゝにはよき飯資なりと便袋より丸藥などとうてゝ是を飲しむれば土人どもはやがて熱き白粥など拿來たうべさせつ里正はまた土人等と商議この處にあやしの黄土の小屋を修らひ藁の席を敷せ稻卷などして臥たる上を覆ひていさゝか寒冷を凌せける交加の人もこれをあはれみ一錢二錢と丟りて過けるとかや深雪は阿蘇次郎を慕あまり日は終日夜終夜流涕焦泣ほどに遂に兩眼泣潰今は蟬丸の因果を惹て俄盲となり果しは哀といふも愚かなりしかるに一身の病毒銀海に凝磊しゆゑにや半月ばかりして軀は健になり四肢の居伸も自由ぎにけりさればかく他鄕に流落剩膝容るばかりの小屋に起臥いぶせきこと何に譬んされば由緣の方よりとてこと問おこす人もなし故園の記念とも作ひともおもふは天虛ゆく月日のみなりしをそれさへ拜まれぬ身となりはて夜ならねども野干玉の暗路を迷ふわびしさにたゞ音信るものとては馬驅丁が唄ならて已いちはなだちて驛中を募五錢七錢聚めしがやがて二貫ばかりにぞなりにける父老はこの錢子もて骨董舖より一張の樫柄三絃を買得て深雪にあたへいざこれを彈て何なりとも曲子を唱ひ些ばかりなりとも纏頭を得てそれをもて路費とし一驛一驛と驛送に鎌倉に下られよといと深切に敎導ける這の父老もまた得がたき奇特のものにぞありける深雪はそれより父老等が好意を嬉しみいてさらばこの三絃を彈て東海道を下らんと沈思にわれかく瞎眼となりにたれば今や郎に會面とも極めてそれとは認たまはじさあれば那方にも記得ある朝顔の曲子を唱にしかじと袖は不覺に滴せる露の乾る間の蕣の萎めるばかりやつれてし憂身を照す日影さへ見る由もなき干隔滂女たゞ羞澁さ難面さに涙まぎらす疎雨のはら〳〵としもふれかしと操ぶる三線の愛惜と夫戀鹿の鳴音より哀情ふくめる聲口には聞人ごとに感に耐竊に咽ぶ



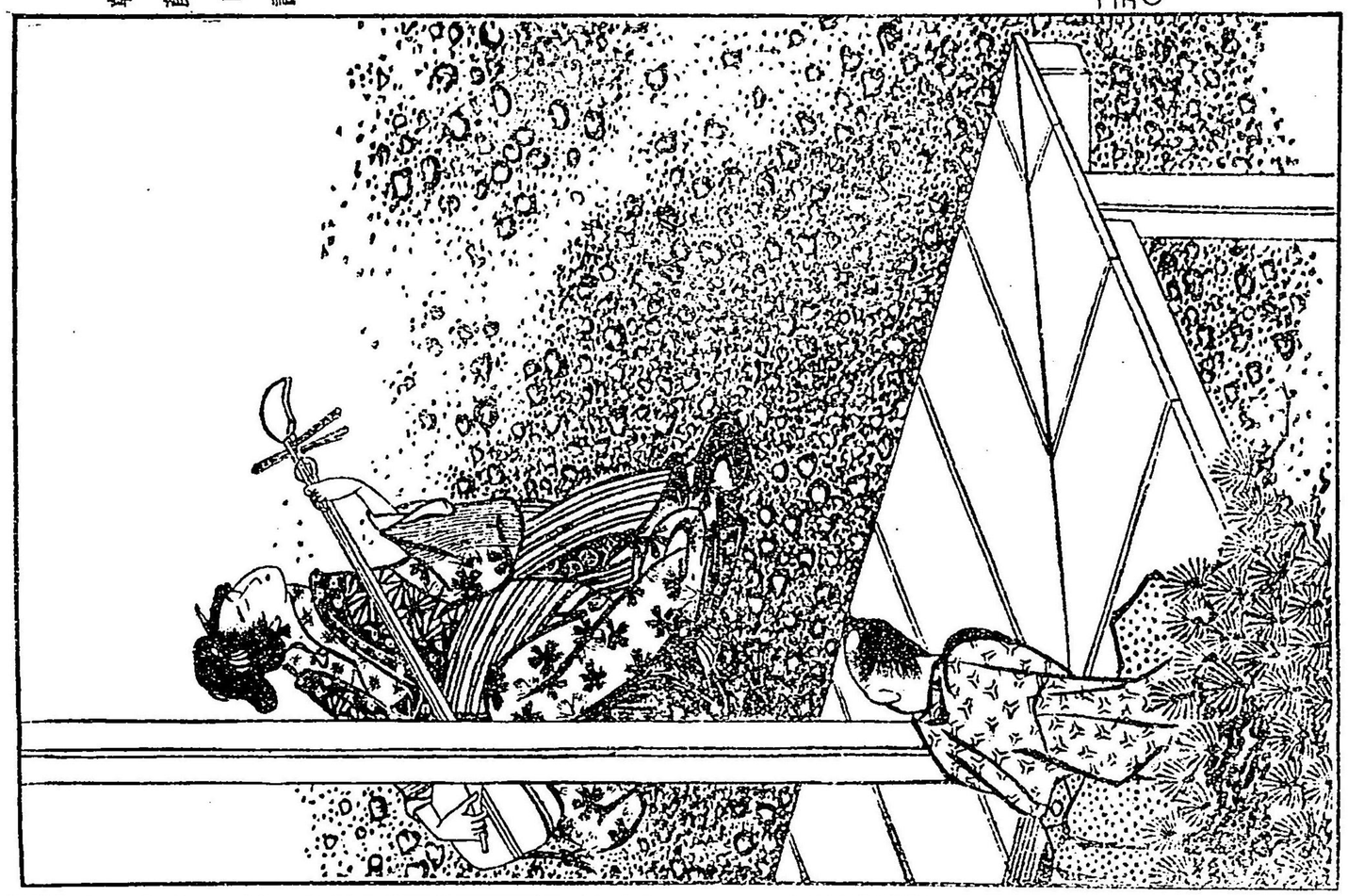
黄鸝に優り迦陵頻伽にも劣はせじと喧すしくいひさわぐほどに那方這那よりもてはやされて露ばかりにはあれど惠みの纒頭の員副ていまは綴補なれども新しき夾絮をうち襲餘寒を凌ぐ便ともなりにきさて這の深雪が往先々の土人ども深雪が眞の名をしらねば只朝顔々々といひ囃ほど只これ朝顔の瞽と喚做して海道筋にその名高ぎきこえけるまた朝顔が經過ところの驛々朝貌の曲子大に流行狗うつ黄口兒はさらにもいはず乾菜葉きざむ飯盛婢も殺鬼春喫無籍漢までこの曲子を唱和門々巷々はこれが爲にかしがましこの春は羽林大内介多々羅滿興殿幕府の御休暇を賜され本領周防の山口へ赴任せらる寵臣駒澤次郎左衞門御前驅たるにより騎長岩代瀑布太と同道して殿より三日先だち鎌倉表を起行けり行ば程なく業平の中

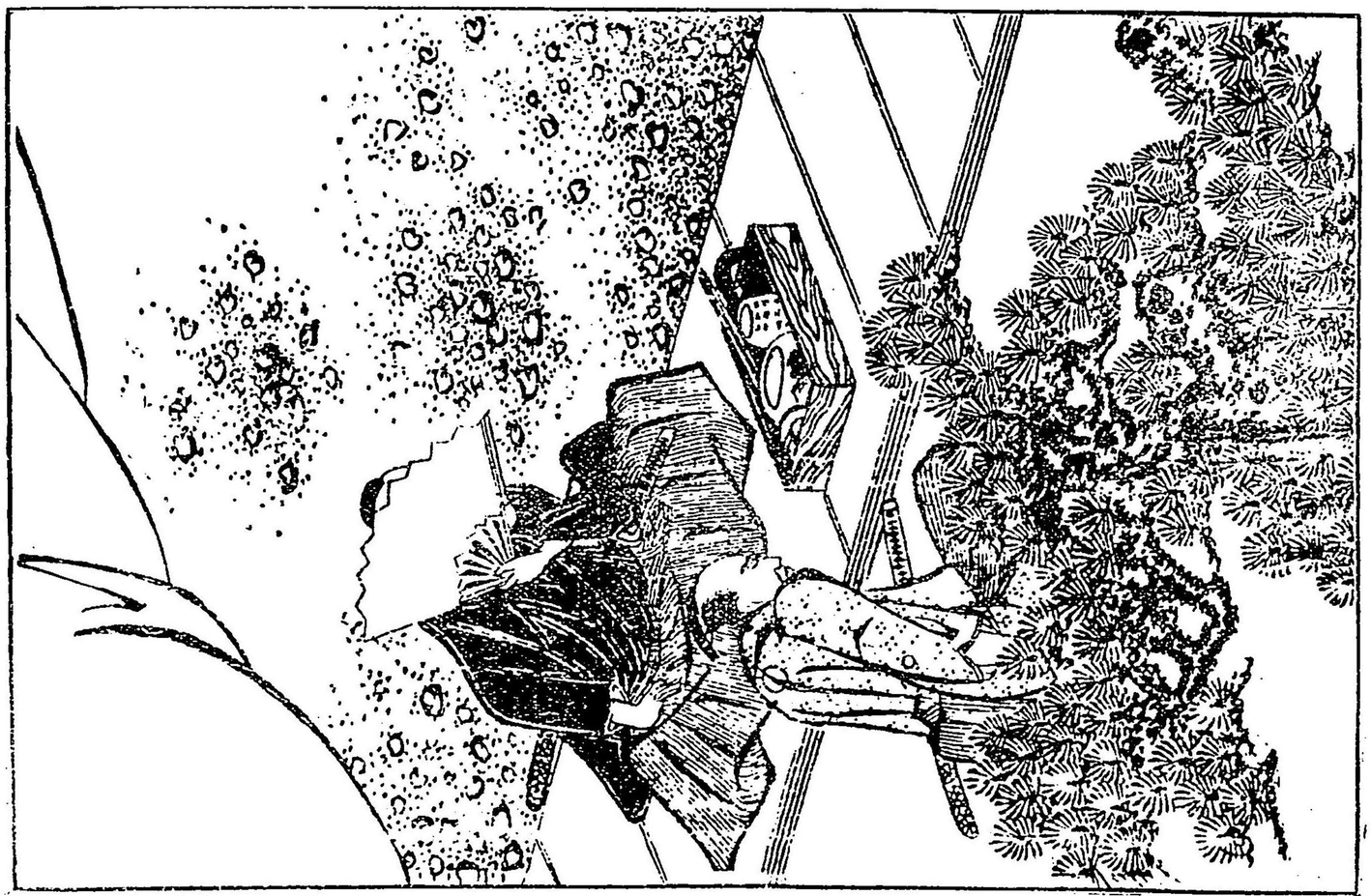
第十四回〔川〕

將の鹿の子まだらと咏せ給ひし富士の山脚なる駿河の府中にぞ着きにける駒澤も今は大藩の國老格なればその行裝いと美々しかりき本陣には駒澤が定紋の幕を張泊札高やかに建おきて玄關前は砂子堆く盛あげそのわたり水うち灌ぎ亭長は麻裃うち着て恭しく出迎ぬ駒澤左郎左衞門正廳に上れば亭長が奔走大かたならず次郎左衞門やがて亭長に宿賚をとらせぬかくて次郎左衞門は浴室を出り一盞茶時湯氣を解し居て座右を看にいと新なる矮屏風にしごく可賞なる一ひらの色紙を貼交へてありけるをつく〳〵諳下せば己一年兎道の螢狩の舟にて深雪が握扇に寫てやりたる朝顔の唱歌にてありければ次郎左衞門ふかく不審み右思左想に那の同舟の伴ならでしるべうもなきこの唱歌誰水莖の痕かはしらねど斯處にて見んとは料らざりきとゝにかく放心不下ばそのまゝ掌を拍て引客女を呼よせかの色紙を指點こは何等の人の

寫たるにか汝はしらずやと問ければ引客女應へてこの屏風は漸ちかきころ裝飾てまねり侍る御尋ある地紙の文字は朝顔の流行曲子なるよし弊宅の兒輩の寫字師より寫て餽られしと亭長のまうさるゝを承りぬ鎌倉にはいまだ蕣の曲子は時行まうさずや這里等の驛々は頻にこの曲子をもて囃しむくつけなる馬子どもすらも唱ひあざれ侍るにといふ次郎左衞門は其まゝ眉を八字になしそはまた何如なる緣故により時行出せしぞといよゝ怪める面もちせるにぞ引客女いふやうさればその事に侍る此頃朝顔と喚なせる十七八ばかりの美しき瞽が東の方へたづぬる人のあるとて綾内よりくだり來りその蕣の曲子を三線子にかけていと有趣唱ひ侍る始めは花子のごとき風狀なりしが今はその藝の庇にて張三李四よりもてはやされてやゝ時めきなほこの驛に留められて居はべる客官にも召れて聞せたまはゞ御慰藉にもなり侍らんと勸ぬ次郎左衞門聞うちよりも驚怪ぎ何となく肚裏にや徹けんさらばいちはやく聽かまほしと同歇せし瀑布太に對ひてこれを議に瀑布太も今霄はわきて徒然なりそは一段よかめりと諾なひけるゆゑそのまゝ引客女に吩咐ていそぎかの盲女を招ぎ來らしむ時ばかりありて宿の下從が朝顔が參りさふらふといひつぎ瞽が手をひき來て緣唐布たる階除に座せしめぬ瞽はみすぼらしげに跪づき低頭して禮をなせるその舉動朧氣ならねば次郎左衞門は燭の火影にたゞ一目看て原來深雪がなれの果なるかと肝つぶれたる這方には瞽は律呂を調せつゝ聽賓客をわが郎とは神ならぬ身のえもしらで操り初る憂身にも虫の知すといふものならん只何となくうちしほれおのづからなる涙聲にて

露のひる間のあさがほをてらす日かげのつれなきにあはれ一村さめのはら〳〵とふれかし





とおし反〳〵悲壯くも彈き唱心は空に吾嬬なる夫を想ふ想夫憐夫の春雄は偷眼に看れば見るほどうたがひなきわが妻なるか痛しや世に亡人とおもひしにかくも窶れて存命ありしよ見當初は花やぐ容貌いと窈窕に媚きつるを今は凋める朝顔の露を帶たる愁眉涙睫われふかくもおもひはからで氷人して舊の名を告ざりしはこよなき過百千回悔ても還らず妹はそれぞとしらぬも道理明石の浦の盟をたがへずわがために節をたて家を逃れて飄零來沒秋波とまてなりたるは極めてこれ衰暮のつもれる殃にやあらん可憐妹が情貞やと骨髓に徹ゆる憂悲しさ心胞胳を白刃もて剛るゝより堪がたくこぼす涕泗は泉のごとく聲を呑こむ泣顏を岩代に見られじと扇を掩翳背向ば廣座稠人もわれしらず涕うちかみて默したる瀑布太は一個鐵腸漢菩が方を斜視て勞汝にてありき唱ざまの殊勝さ伊勢の海席田よりは今めきて有趣かりき今一曲と所望けるを次郎左衞門はこれを止め纏頭を與へて退かしむ瀑布太は執事に悖がたくいと敗興氣の嘆臉せり次郎左衞門は適間より胸うちつぶれて悲歎のあまりふたゝび聽にしのびかね强て瀑布太を攔止しなりかくて次郎左衞門は夜深人靜るを俟て又も前の引客女をまねぎ仔細あれば甲夜の朝顔とやらんを密にこれへ呼よせくれよとたのみければ引客女は心を得てそのまゝ人を走らせけるに使回りていふやう朝顔が宿よりまうすは比先清水といふ在處の饗筵によばれて迎轎に乘てとく往りたれば今夜は那方に宿欲やすらん天明ては歸來申すまじとのよしを聞次郎左衞門深く望をうしなひ海月の骨に遇としもなくいとほいなく想屈まり人しれず嗟歎煩悶ど甲斐なし次郎左衞門例五更起行のことなれば夜間に朝顔にあふことかなはず瀑布太が嫌疑なかりせば計較萬種もあらんとおもへど今は何ともせんすべなくつねに肌身を離ざりし妹が記念の扇を取て亭長を呼よせて些したる緣故のあればこの扇子を霄の菩にとゞけくれよとまた別に一摑の金子を副諄々托みて遞與ければ亭長はこれを收手愼てその托意をぞ畏みぬ亭長は二位の客官を送りまだ夜はあけはなれねどもまたしも朝顔が宿に使をやりて伴來らしむされども朝顔は何くれと隙どりて巳の下刻にやう〳〵出來り亭長に對て昨日の謝を叙朝まだきより忙しく呼び來したまふは底事の在しけるかとあやしむにぞ亭長いへらく別の事にもあらず甲夜の貴客の御托にてこれを汝に差しくれよと一柄の扇子と一封の金子とを遺しおかれたりとそのまゝ手遞しすれば朝顔は眉を顰めこはいぶかし故なき御方よりかく沈重なる金子賜ふべき覺はべらずと數回扇子をば捻りまはし撫つさすりつしてありけるがやをらその扇子をさし出家公この扇を見てたまはれ倘や蕣を描ありてその側にわらはが常に唱ひ侍る唱歌を寫てはあらざるやとわりなくいふに亭長は眼鏡をかけその扇子をひらき見て正是々々いはるゝごとく一輪の蕣の花の畫に露のひるまが寫てあるはこれを聞より朝顔はおぼえず吻と長大息つく亭長は扇をうちかへし見て朝顔殿まだ何か寫てあるよ朝顔いよゝ慌つゝ何ごとか寫てあるならんとそゞろはしくも躪よれば亭長は扇の裏書を誦宮城阿蘇次郎事駒澤次郎左衞門と記してあり原來駒澤殿は舊宮城何某と申せし人なりきといひも果ぬに朝顔は呆れまどひおもはずも展轉人目をも羞ずとり亂して身は空蟬の蛻殼しごとく什麼宮城阿蘇次郎こと駒澤次郎左衞門とやそれこそわが尋佗たる人なれ南無三寶遲かりしいて片時もはやく追つかんと足も空に驅いだすを亭長はやがてひきとゞめそのやうに焦燥たまふなあまりに慌て急がれなば躓きて怪我もやすらん駒澤どのは五更起行のことなれば迚も急

には追つきがたし殊にこの大雨にいかで途も歩らるべきさはあれせひに往ふとならばこれを着往しやれと簑と笠を把て遞せば朝顔は涙を流し辱なしとそのまゝうち着て杖をたのみにたど〳〵しく西の方へといそぎつゝ心は飛ど脚果敢どらず雨はます〳〵降しきり宛も篠をつくごとく斜風に衣服は濕腐し辛じて大井川に歩りつけばコハ悲し大鼓打鳴して只今川留りぬとのゝしりさわぐ深雪は已てに氣疲足痿てこれを聞より身も世もあられず大内家の御藩中駒澤次郎左衞門殿は如何にと問ば問屋場の者どもそは今一時ばかり先に川を越たまへりといふにぞ岸うつ浪のよるべなく松にはふ蔦のたのみもたえおぼえず大地に打座蹶躓して悔めど詮なくたゞ聲を放ちて泣叫ぶに剩さへ笠をば川風に吹とられて

第十五回〔豹〕

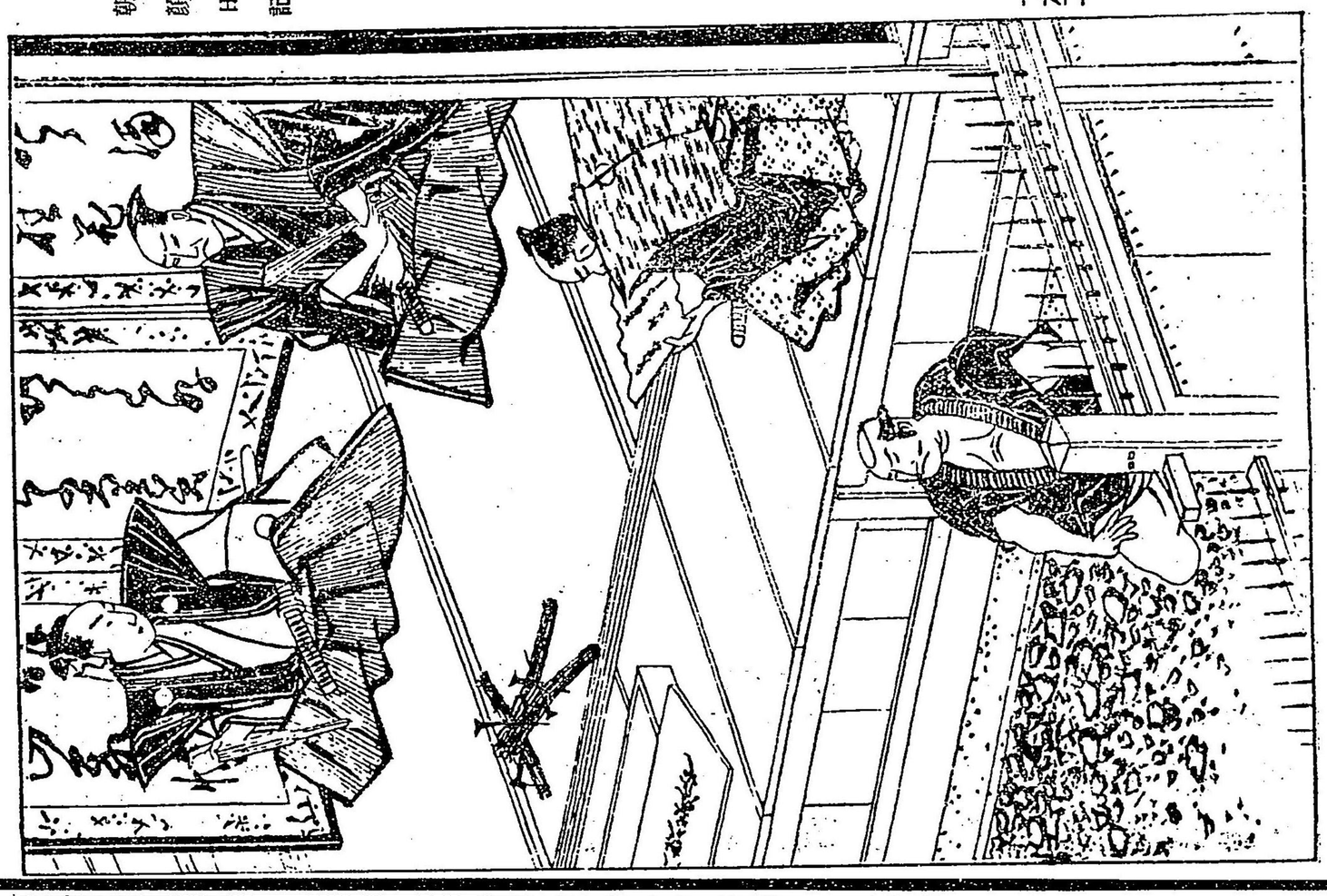
駒澤次郎左衞門春雄は大井川を渉りてより大小天龍はさらなり一路些の川沮なく剩連日天晴にて曉起ち晩に歇り程なく帝京にちかづき草津の驛をまだ夜深に出て午の貝吹頃は山科にいたり所謂奴茶屋にて少憩をなしぬ爾時一個の乞丐がだみたる聲して常盤の州には山鰻鱺と唄ひつゝ蛇を使て錢子を乞次郎左衞門隔隙にこれを透見白齒者柳倉忠吾を呼びうち耳語また轎子に坐てゆく行こと二里ばかりいと冷静き古刹のあるをみて轎をたてさせ筑八を跟方に從がへ門より入來りて閑玩けるこの處は伏水の六地藏とてその昔小野篁冥府へ往還せしといへる古跡なり忠吾ははや弄蛇乞兒を將て僻處の花の下に跪せて待居たり次郎左衞門ちかづきよりて足下は橘雞庵にあらずや別來は久遠たりといふに雞庵頭を搔てこれを看れば烏金和絹に大内家の唐菱の紋を染ぬきたる小袖を着し一樣外套をうち穿て茶宇の袴を跨美を盡せる

大小刀を佩たるがいと堂々げなる武士なりこれ則ち當初の宮城阿蘇次郎にてありけるゆゑ殆その最早く發跡しを羨み且己が飄零たるをうち羞澁八と應へて俯伏ぶけるその狀髮は五六寸生長て剛力めきたれど些の力もなげに見えて身には海松のごとき一套の襤褸をまとひ潮垂まさりていと淺間し次郎左衞門は跟隨を遠ざけその身緣故ありて駒澤の祖業を襲今は大夫の列にも加はりしことゝまたは不思議の因によりて秋月弓之助とも緣者となりしが往年足下の計ひにて種々の齟齬などありたることを聞しかど君子はその罪を惡んでその人を惡まずといへり我いさゝかも衷に介むことにあらず我初浪々の身なりし時足下の涯き好意を承侍りきと袂より一包の金子をとり出しこは些少なれども露ばかりの謝意を表すなりと手自遞與如何なればこそさほどにまで流落られたるぞと懇にうち語へば雞庵はさしも黠悪ものなれども今駒澤が寛仁大度にして己が舊惡を責ることなく剩恩をもて仇に報い若干の金子を餽たるゆゑほと〳〵路頭の餓孚となるべき身の恰も大旱に雨を得地獄にて世尊に遇へる心地して雀躍にたへず且おのれから駒澤が德行に化せられて忽地に邪慳の角を折始て善心に醐へり幾回金子をいたゞきて收領むされども己が奸計にて鷲鴉と區別る醜漢子の荻野祐仙を阿蘇次郎に假扮て弓之助を計較阿蘇次郎と深雪が良緣をさまたげたる不義不實をばわれと悔み愧て看る〳〵滿面通紅ます〳〵怖れわなゝぎ遂にその陰匿を懺悔して獃呆祐仙には影護舊債はべりしゆゑ只得渠が托に任せしかく無狀を行ひしが天道は善に祚し淫に殃すとかやいつか事發覺夜間に都門を亡命して海西に逃くだり赤馬が關に在しが從來好る戯とてある博局に入夥をなし且其處の稻荷街なる妓小支那といふものに嫖熟色と慾とに邃金をもすべて蕩盡し

遂〳〵かゝる身分とまで偃蹇はべりきと吃々淨々と泄秘いひ完を次郎左衞門聞て深く嗟嘆をなし于戲毒ある藥は使用やうによりて結句その功も速かなりといへり足下の奸才なん機に臨みて正道の事に使役かたあるめりと何やら低細と閑談數刻に及び足下はいざ我に先達はやく山口へ下りて待居られよ功あらば重く賞すべしとそのまゝたち別れて但うち仰げば空のかぎりは淺翠にうちかすみ遲日の光輝融和けく恰好雉子の聲うちして好景いふばかりなし

櫻さく遠山鳥のしだり尾の
　　ながゝし日もあかぬ色かな

と咏せたまひし御製の微妙なるを一時の興におもひ合山鳥は隔て寢ときくからにわが妻雌をもなつかしみて且感じ且吟じつゝ轎子を吊せて閑歩けるやがて伏水の甲明亭をうちすぎ母利橋の邸におちつくこゝに浪花の卒分堂より迎の爲にとて並の大座船を設けありけるやがてその舟にうち乘て澱河を下りぬそれより日を經て本國周防の封彊に入今日なん山口へ榮歸すればとて衆跟從も花やぎて打扮せ已に府下の郊垣まで來かゝりしが豈料ず看樓の裏頭より步兵長めきたる武士一隊の健卒を將て駒澤が前程をふたぎ嚴令と號はり駒澤次郎左衞門御不審の儀あるによりこれより直に檢斷所に去るべしと附令し健卒等を喝して矢衾をつくり轎子の前後を圍ませ外城の御門より入しが御館の方をば餘所に見なし十字街頭を横をれて檢斷衙門に到る駒澤次郎左衞門はこの衙門の玄關より上り悠々と敞廳うち通ればはや上席には一族山岡玄蕃允を始とし肉食者並び坐たりあるが中に今般同伴せし岩代瀑布太も先だち來りてありける冷泉帶刀爲猛は是より先相良主馬と交割して鎌倉より下居たるが月番といひ殊に今日の査驗にてありけるゆゑ日比駒澤とは二なき金蘭なりとも公事には私の勞語を做さず抽列で威儀を正し次郎左衞門汝叛逆の企せるよし顯證を以て訴訟る者あり意旨なくば速かに雪寃めされよと演にける次郎左衞門これを聞てこは不圖的ことを承るものかないさゝかもその覺知侍らず列位知るゝごとく小的こと莫大の御登庸を蒙ふり君の御恩を重る身として何爲大逆罪を犯すべき何等の黠奴がさることを申せし其奴はやく呼出され屹と糺明あるべしと苦りきつて回答けるに玄蕃允次郎左衞門を佶と睨へ意旨なしとはしら〳〵し誰かある證據の東西をこれへ拿と吩咐れば法司屬吏ども四方上下に口もなき一個白木の箱を拿出て駒澤の側に置きぬ帶刀これを見て次郎左衞門この箱は有驗の解魔法師伽縷羅院といふもの和殿の請托によりて君侯を調伏せる支度の具なりと申せしが如何如何にと詰めかけしに次郎左衞門嘲笑ひこれこそ小人に仇あるものどもが修らひたる譏種とおぼゆれこの箱の上頭に一文字寫たる所を打ば乍披る機關なり事古たる伎倆事の淺はかさよといひ解す帶刀はそのまゝ拳頭を擧て一文字を兆と打ば撲剌粒とひらけて中には一塑の草偶人の形代ありたるに透間もなく鐵釘を施得たるは毛髮も聳ばかりなり帶刀はこれに副る願書をとりあげて讀下せば勿体なくも大守を咒詛殺すべきいと可怖文言どもにて願主駒澤次郎左衞門と寫せり帶刀は正視斜視撿閲るに駒澤が手跡と寸分不誤ねばしばし含粘次郎左衞門呵々と笑てコハ愚なり帶刀主かゝる大逆を謀るものがなてう白地におのが名氏を記べき後世に僞筆などして寃訟するは小兒の遊嬉にも劣れる下策傍痛しと空嘘噴くに帶刀もうち點頭賀是博識の舉ある駒澤ほどのものがあまりに陳腐草偶人の調伏とはその人に似つかぬ手段こは別に野心を懷者ありて己が逆望を妨ぐべき駒澤なるゆゑかく寃の科を打點蹟けんとせし奸計なら



んと山岡を斜視にかけて寓語いふにぞ山岡は頻に眼語すれば瀑布太は聽懷裏より一個の卷軸をとり出し次郎左衞門殿この連判狀覺知あらん小的豫御邊の風狀不會ずと一路上覘隙しが前宵目擊たることのありて御邊の調度よりさがし出しこの卷軸奪取たりと熊野の烏瑶に梵天帝釋より天神地祇を嚇かせし自筆の起請文に一味の徒黨が血判を押たるをさし出せど次郎左衞門些ともさわがず一卷を閲見て前の願書といひこれといひ贋は贋たれども天公も照覽あれこは明々なる僞迹ものなりと冷笑す山岡大に焦燥やをれ早く黨類めらを牽出し駒澤と對決させよと高やかに叫びたる聲の下より健卒どもはいと痩枯て色青ざめたる修驗者とまた一個の相貌兇惡なる上菊石痕夥しく絶て肥大なる一軀に豹の形を文刺せし猛漢子を高手小手に細めて白洲にひきすゑ背後にはあまたの警固のものども狼の如く虎のごとく視張りて從たり這の修驗者伽縷羅院をば山岡が手の者拘到たるよしまた次なる惡棍めきしは豹藤内と呼ものにて渠は舊江州甲賀の山奥より出てはなはだ忍術に精く些の膽略もあるゆゑいつか草寇の頭領となり江湖上に剽掠を做して鬧したれども常には賭徒に混れあるは救火顯徒と做り種々と身を假粧てその踪跡をくらませしゆゑ居どころさだかならざればその影をだに捉るとあたはざりしと組子どもより稟あげけるとなんしかるに這の豹藤内去る夕御寶庫に閃入勘合の印を盜みとり逃去んとせし浩處しも宿直の衞士恰好瞧け辛うじて縛とり檢斷所の廳に牽出せしゆゑ檢斷吏勘察衆も相共糺明ありけるが勘合印に垂涎るからは這奴が分際にはあるべからずいかさま別に當家を傾けんと謀る白者のあるに極れりはた近曾至寶の一種紛失せしも極て這奴が所爲とおぼゆ何者に托れてしかせしぞと嚴しく拷問におよばれけるに初頭は執拗抵

賴己が一慮より出たるよし劇語たれども幾十回の責苦に堪かね遂に白狀して己自來駒澤が大望に與し嚮に一種の寶貝をも偷取て遞與おき今また勘合印を贓み取んと躒入しも總て駒澤が吩咐なりといへりさ駒澤は二通の口欵を逐一閲完 緣側近躙りより兩個の縛囚を熟視みてヤイ豹藤内とやらん我叛逆して寶貝を竊ませしなんどとは痕跡もなき嘆語なり從來見たることもなき這面何者にか賴れ假意擒はれとなりて生天大的寃訴を搆たるぞその主を申せいざはやく實事をまうせ倘一點にても僞るにおいては指一朶づゝ斫はなす捿遲の刑にも行なひつべしと嚇威かけられて豹藤内は次郎左衞門を屹と見あげヤヨ駒澤殿かねての計較も不三不四壞了たり足下が這の修驗に大内介殿を咒咀殺させ重寶どもを匿しおき管領の御曹子を養子としこれをも奇貨に使ひ果は足下が六ケ國を押領にせんと猫もしらぬやうに謀られても斯脆く露顯るといふのも天命是非もなきと己でさへ丈夫らしいひて完たるに何喰ぬ顔にまだ演劇してゐますは大賭の局主のやうにもなき未練の擧動にこそあれと出放題なる雜言を吐けば側なる修驗伽縷羅院も一樣の口氣にて拙僧も和殿に托まれ國主を調伏し驗あらば千金を與んと約せられしゆゑ丹誠を凝し秘法を修せしが痛情くもかく怯面就房たるこそ微運なれといと朽惜げにいひ〳〵始て駒澤をば見あぐるに一表軒昂その顏色は温柔たるが沈勇に恣を合める威嚴のそゞろ凛々くおぼえて宛かも月下なる梅花の霜に傲れる頭勢なり伽縷羅院 意 駒澤とやらんは其人忠直なりげにおぼゆるを己はたゞ母を養ふ資のみに後先をかへりみるに遑あらずして已にこの軀を沽却たればその施主に賴まれて只無罪人に殘害をかけたるは一頭には孝養のためにしたれど一頭にはおもはずも殺生戒を破り大やかなる罪科をつくれりと殆〳〵後悔

にたへねばたゞうち萎れて俯ぶきぬ冷泉帶刀聲を勵まし駒澤を害せんと僞文は勿論那奴等が寃誣の叙次高の知る生匹夫めが好騙局これといひかれといひ揃も揃ひし惡黨ばらいで骨を挫ぎていはせんと喘吁聲ともろともに伽藍羅院は一轉と伏て氣絶たりこれはこれ一百兩の施主の爲に自から舌を齒切て駒澤が雪寃すべき口を滅んと死たりけりこの時はや檢斷の屬吏ども帶刀が令によりて驚破豹藤内を木馬刑に行なはんと慌忙その支度して犇きあふ豹藤内これを見るより大に駭き器頭て山岡に目語して止ざるにぞ玄蕃允進出帶刀まづ嚴刑は止られよ眼下に修驗めが自滅せしゆゑ一個の證種を失へり豹藤内は靈符の尊像の去向を索べき干係の者また候渠を責殺さば臍を嚙の悔あらん今日の査問はこれまでにせらるべしといふ帶刀もこれに同じ尤然倘這奴をも責殺さば一期駒澤が雪寃秋はあらじと直に健卒どもに令して豹藤内を牽出させ緊しく獄屋へ繫ぎ置しむ帶刀又次郎左衞門に對ひ御邊の上も御不審全く明ざる中は鈎座を避憚ありて逼塞めさるべしと付令す次郎左衞門はこれを畏みて隨即衙門をたち出れば設ありたる覆網轎子に乘て愔々烏衣巷の邸に回り只得門戸を閉ふかく慎み居たりけり

第十六回〔柴〕

さても深雪は喪明とまでなり果て空しく朝顔の曲子を唱ひ東海道を吟行しが不料も駒澤が本陣に呼ばれ那の曲子を唱へけるに次郎左衞門たゞ一目見て原來我情婦深雪にてありけるか我今名を替て駒澤某と稱せしゆゑ舊の阿蘇次郎なりとはゆめおもひよらでわがために節操をたて家をのがれてこのわたりに流落哀慕のあまりにや明さへ泣潰れてかくばかり貧窮はふれしは便なきことなりといたう愛憐おもい

や優りて不覺涙の墮るに同歇の人を憚かり夜いたく更て密に遇まくおもひよびに差しが生憎に深雪は他處に往て出來らねばいかにともせん術なく常に肌身をもはなさぬ記念の扇子に名を更めたる由を寫副驛長に托みてこれを留め置しゆゑ深雪はこれによりて今まで他人とおもひ嫌ひ避たる駒澤殿は全然わが郎阿蘇次郎ぬしにてありしといふことを知忙まどひつゝ風雨を冒して大井川まで趕ゆきしが誰はからん比先川沮りて郎はとく渡りたまひしと聞てほと〳〵力を落し只管くやみ歎きこの河沮の開くまで一夜を過すこと一年よりも長くおぼゆまたしも病つくべきをわれと心を雄々しくとりなをして日あらす川を越精神かぎりに程を貪ぎぬさばかり婉弱小艾婦なれども一縷の情勇顆く讒摩の灰も猪狼も屑とせずして不滯周防の國に下駒澤殿の邸は烏衣巷裏にありと聞旅の疲も出ばこそ腫たる脚を蹉踔て劬勞尋ね來て見ればのふかなしや賴も力もきれ果たりなに駒澤殿は罪ありて閉門したまふとや阿呀この邸は靑竹もて斜に釘得てあるはなどゝ人の絮話におぼえず涙溢れおちて大地に倒臥痛つゝ聲を放ちてひた泣になくほどにやをら人環視してこや風狂の婦のしかも盲なるはと指ざしゝて哂ふもおほかりあるが中には又緣故こそあらめといへる者もありぬ浩處に母子とおぼしき兩個の順禮人叢を押開て倒れ臥たる狂女をば扶け起し埃などうちはらひ種々勞はり何地へやらん將ゆきけるこの兩個の順禮は則ちこれ深雪が乳媼眞柴なるものとそれが兒子關助にぞありける如何なればかく湊巧に小姐深雪に環會しぞと索ぬるに往年深雪が蕗陵の邸を出奔せしより母親水靑は號天泣地なげきかなしむことといふかぎりなし眞柴はこれを見にしのびず主母水靑に己が所願趣意を告僥倖とあり合る仲間の關助を具して主人の邸をたち出西國三十

三所の觀音を巡拜あはれ大悲の冥應をもて今一回養君に遇せてたべと丹欵を盡して禱つゝいつか三十三個の簡をうち終しかどいさゝかもその驗しあらてまた西に向ひてなく〳〵も故鄕の天に赴きて備後の州阿武門といへる港澳に着けるがこの處にも名高き觀世音の在すに上り下の船人どもは隨意に風を祈るめれば菩薩もほと〳〵孰を西孰を東と分かねて躊躇たまふめりこの夕眞柴は大悲閣に通夜をなしけるが老眼を絞りいと冷き涙をさへ拭ひあへて隻手に珠數爪繰つゝ菩薩に額突て日暝途遠この老が主家の養姐を尋出さんため遙々三十三所を順禮して願つれど佛の慈悲もあらざるやまたわが信心の屆ざるにや今日までも環あはて依舊空手と筑紫へ下り主母に遇て何といひわけの侍るべきやまた何の顏かあるべきそれよりは寧この身を海に沈過世の劫を果しなん阿娘の前後老の後世をも救たまへと頑語を獨語やがて

法華經を誦し了らば直高欄より飛入らんと一心の覺悟をぞきはめたりける登時えならぬ異香うち薰來て錦の帷裏よりいとも妙なる玉音にて老女さな嘆きぞ汝が誠心厚きを憫み尋ぬる人に遇せなん今より五日すぎて周防の國山口なる烏衣巷といふ所にいたり見よと正々しきおんつげは夢かあらぬか辱けなしと眞柴は信心肝に銘じ喜こぶことかぎりなく今日なんこのところに尋ね來りて深雪に會面けるぞ古恠なるかくて眞柴は深雪を己が旅店に伴歸てこのよしを詳にかたりかばかり菩薩の冥護灼然なれば前程可賴おぼしめせ駒澤どのは義氣ふかく後妻を迎へたまはずときゝはべるまた寃の難を被りて當分閉門して在す由は巷の說に聞ゆれど世のならはしなる先頃專北山霎陰なければ霎て行と唱ひしやうにいく程もあらて寃の陰も晴て世に出たまひなんそれまではまづ故鄕に還りまして銀海忠の保養あらせたまへやがて駒澤殿に申し入團圓婚嫁なしたまふやうに計較べしと多方賺し艶說ければ深雪も僅々允容けるゆゑ眞柴は甲斐々々しくも打點ひ關助を役て便船を乞しめその曉天降松より出船をせしが日あらずして故鄕なる蕗陵の邸にぞ着にける秋月弓之助夫婦は悅ぶことかぎりなく盲龜の浮木に遇優曇華の花待得たる心地してあつく眞柴が勞誠をも賞しけり深雪は朝な〳〵垢離を搔精身潔齋して只一心に本居菅聖廟を禮拜してあはれ大自在の靈應にて夫主次郎左衞門が災難を免かれさせ玉へと只祈にいのりて片時も惰ざりしとぞあはれむべし一個の貞女は不幸にして沒秋水となり獨空房に臥す嘆ずべし一個の忠臣は寃の災難をかうふりて戶を閉たるが此末那の忠臣貞女めでたく團圓や不團圓や次の卷を覽て解したまひね如斯の語は先輩已に道陳たれ共這半丁の閑空を嫌ひて贅附はべるのみ

第十七回〔蟲〕

大内介殿いかゞ思召けん遽に駒澤が閉門を免され冷泉帶刀に預け置せたまふ然に那の遺失を責問すべき豹藤内は一夜獄を越りて晦跡たり帶刀等不意に喫一驚して慌忙しく幾隊の快手を走らせ四面八隅草を分ちて搜捕せけるさて這の緊要の遺東西といふは眞武聖帝の尊像にして忝くも當家の遐祖琳聖太子高麗の國より齎せ渡來たまひしより長く家の守護神と崇へたまふ從來奇異の靈驗在により時となく紫禁より大内氏に鳳詔くだり即這尊像を廟堂設けられ妙見靈符の大醮を做さしめたまふその禳法は代々當家の主たる者修め來れることゝかやしかあるに先頃那の尊像の一軸失て何者の所爲といふことをしらず倘もこのこと禁廷に聞えなば由々しき家の大事ならんと長臣の們眉をひそめ各安き心もなし先時駒澤に

寃の難題を云かけたる修驗伽縷羅院といふは這の國の僻處三田尻といふ地方の民なるが一個の母親に事て至孝なることいふばかりなしこれが舍弟德兵衞と喚做者を隣郷なる做敗布的何某が入贅につかはしけり母は生得ていと古怪き好潔の毛病ありて平素みづから洒掃のみをこゝしはた飲食の類もいさゝか不如意ことあればそのまゝ嘔逆を發して終日絶穀ざるもまゝ多かり伽縷羅院は深く是を歎き只願母の萊舞掃除は勿論飲食なんど心のかぎり叮嚀に物しつされど自來その家貧しく母を豐に飼養ことあたはず母の嘔噦發るごとに涙を流し自己が孝養の煖飽不得を歎息せりおほよそ知音の人に對時は滿腔子に啣める遺憾を洩しあはれ一二百兩の金子もがな母を安樂に養はんものを今にもあれ大金を損して人命を購むる人もあらば己この一命と交易たきものなりといと皺面にぞ語りけるさるほどに山岡玄蕃允は己が大望の妨なす駒澤次郎左衞門を斥て墜さんと多方計較てありけるに先是在京の時色慾の爲に散財出醜荻野祐仙自光山岡が邸にも親炙附翼せしが忽日來て物の序に道やう世には希有の望せる獃呆も侍りき近來小的許に請治に來る三田尻の者が申すにはそれが街坊に伽縷羅院といふ修驗ありてはなはだ孝心の者に侍るが自己貧しく母を養ふに不如意なるにより自然好事の人ありて大金もて交易んと望まばそのまゝ性命を沽んと申すよし承はりきと無心の雜話を心ある山岡玄蕃聞よりも計頓に心頭に上來たりこは最屈竟の事なりと隨即祐仙を閑處にまねぎ何事か密語をぞ叮ける蕃這の祐仙も駒澤を戀の敵と深く嫉み疾より山岡が逆謀に荷擔せしゆゑ今山岡が吩咐をばいと容易領承ぬかくて祐仙は詰旦蓐食て山口の府下をたちいて只管西を望んて走ぎけるが未牌にははや三田尻の附郭なる出村といふ地方に臻とある茶店にたちよりて憩息其許の店小二を央み三田尻の熟人へ折簡を斟せ差しけり幸宿に在けるか待程しもなく那の伽縷羅院なる者出來ぬ祐仙は欵待し在つればやをら酒など請めいと寛語たるうへ和僧は憑金にて命を沽るゝと聞侍しがそはいよゝ實定に侍るか今爰に百兩の金子あり非儀にても承引たまはゞ商量し給ひねといふ伽縷羅院聞てそは從來望處なり百金をだに賜らば如何にも愚僧が狗命を購申すべしといと苦もなげに允容ければ祐仙は最早く事就と悅び和僧の命を買得由は緊隱密にて壁耳を憚るなりそは施主より直に聽るべしいざさらば片時も早く伴ひ歸なんと忙はしたつるに伽縷羅院さはまづその金子を收落申し一回弊院に歸り舍弟に百般付屬おき園家の眷にも這の金の出處を恠まざるやうに申しきかせ直回して來りなんといふ祐仙はさばかり惹東西なればその飜悔せんことを放心不下て半晌猶豫狀なるを伽縷羅院熟視て今日なん邂逅夙志を遂たるに自然變卦にも遇んかとほと〳〵あやぶみやをら店小二を呼たてゝ道やう愚僧些の仔細ありて那の醫師殿より爲替の金子を拿歸るなり程なく又來りてその事を辨し侍るに露ばかりも齟齬はさふらはず篋時往來の間ほどは和主これを爲證てたびねと諄々托けるに店小二は恒に伽縷羅院が篤實を熟識居れば快よく允なひ祐仙に對ひて種々附語をなすにより祐仙も只得承引てげり伽縷羅院は祐仙が遞せる金子を懷にして這の茶店をたち出直に本院にかへり來りて道るはさても今日は造化なることとそあれ待ば甘露の日和ありといふごとく今般皇都の土御門家より扶桑六十餘州の陰陽師どもの系譜御糺しありて胡論なるものは沒入られ正道なるものには牌符を下さるゝに或の推舉に由不思議と御看顧に遇かり我へは鎭西道の査差に赴るべき命を蒙りきそれにつきさる御幹にて遽に召るれば

唯今より風闕を指て起程侍るなり調度どもは日後申し下すべしと一袋の百金を居あはせたる德兵衛に遞し這の支度金は汝に付與おくぞ起先孺人へ御不自由させまゐらせし代り什麼なりとも好ませ給ふ東西ども買へて勸まゐらせよとねんごろに托き母へも告別をなし上洛せんには夥の二光をも送りなん好々信に在せわが發跡て僧都ともなりて發旺歸省を待たまへと口裏にはいへど肚裏にはこれ今世のわかれと思へば涙盤渦來て胸うち潰たれど不悟まじと衣紋刷くりて紛らしつ母は餘波は惜しけれども愛子の出世と聞からにさもあらば早く都より還り來て老が倚門心を慰よと離の盃酌かはし大家啓行を見囃しけりその後伽藍羅院は金主の山岡が命を守り駒澤に寃をいひかけ渠が分説の滅口し舌嚙切て死たるは財の料とはいひながら無慙といふも愚なり三田尻なる母はかくとはいざ知ず朝夕陰の膳を排指を折て日を算へ

その消息をまちかね只屈その風聲のみして想ひ煩へり又這の修驗が弟德兵衛は養家の双親早く亡てその妻阿茂と乳臭兒と嫡親三口の過活にて些本錢なる木綿商買の牙儈に閑なく伽藍羅院去て後は實母を己が家にひきとりて阿茂と共に侍き事ぬしかるに頃忽然として德兵衛母子一般の異病を受て惱みけり日毎午後より惡寒して大熱を發し逼身疼痛めて宛かも蝮蠍に螫るゝがごとく異常痛風なるにぞ來り診ほどの醫ども一個として什麼の病因といふことをしらずあるが中に老功なる一醫熟察て兩個の病者に礬水を飲しめまた生豆を食せて驗るに母子とも甜美とうち食て些も腥からぬ形容なり老醫これを看て原來疑もなき邪祟なり中々藥石の治處に非ずといふ看病に在あふ瓜葛の者ども膝すゝめてさもあらば如何にして佳んと議るに老醫いへらく凡鬼注は加持祈禱にて禳驅ことは多かりされども何の邪魅といふこ

とを知ねば驗者もせん法はあらじ足下達も聽れしか這節土御門家の内なる佐伯少進入道一清軒といふ者山陽道陰陽師査め役者として下られ萬代沼村の庄官に寓り居らるゝがその易斷鬼神不測の妙ありと風聞せりとまれかくまれ那人に筮判を請乞て見られなば根由も解なんと勸めけるに德兵衛はこれを聞て萬代沼は僅半里にたらぬ所なり朝醒の間は精神も行歩も常のごとくなれば一回往て乞てんと黎明をまちて夫婦もろとも稚兒を携萬代沼の庄官が許に至り一清軒に謁て自己母子が難病の狀をつげ懇懃にその明斷を請ける一清軒容易諾即座卦を起に山風蠱を得たり一清軒眉うち皺めコハ山風蠱とて三毒盤上にて相食の兆あり熟卦面を味はふに是必足下達の骨肉に大隱匿の惡業を做したるその天罰覿面に中りてかゝる殃に罹るなりその惡業を造るといふは今天下に名たゝる有道の大賢人を寃の罪に墮さしめたるとお

ぼゆるぞ天道は善に福し惡に禍すその賢人は天に應じ人に順がひ國を富しめ民を愛せる善行あるゆゑ上天心に應たる德者也しかるを凡愚の身として惡に與しその人に害を做したる餘の殃つひにそれが眷族に及ぶこれ全く天公の御惡深かる故なり今筮の兆に據ば不小可毒祟なれども足下母子とも早些那の賢人の寃を雪んと苦思深切ならば蠱の毒勢稍緩つべし登時下官が家に秘たる法を修して兩個の鬼注を禳除て與せんといふ自來老實の木綿屋德兵衛これを聞より信疑相半合粘に申すやう先は筮考たまはり感激侍る雖然爰に一個の不審の候賤人が骨肉の者にかぎり起先露不仁無道の惡行を做せしものゝ覺侍らずといひ出すを一清軒はや不消分説て非學者論に輸ずといふことあり今徒に爭論とも詮なかるべし早く回りて母儀とも量見給へ中意事も出來なんといひ捨餘の來客に應對しつこの時はや請筮人